

『我れに、此大軍あり、喜ばしや、一舉して、家康を滅ぼすべきぞ』

三成、意氣、甚だ昂がる、乃ち諸將を會めて、軍略を議す。浮田秀家、席を進めて、

『内府、今日の計たる、進んで、會津を攻むるか、退いて、江戸を守るか、否らざれば、兵を率ゐて、西上するか、必ず、此三つの外には、出で候はじ、徒らに、兵を此に聚めて、空しく、敵を待つは、策の得たるものと言ふべからず、若かず、軍を進めて、敵を迎へ戦はんには、是れぞ、我が勢ひを張るの手段に候なり』

と説けば、諸將、實にもと、此れに同す、乃ち部署を定む。毛利輝元は、増田長盛と與に、大阪に留まりて、秀頼を守る。

小野木公郷等は、二萬人を率ゐて、丹後に入り、細川幽齋を、田邊城に攻む。

毛利秀元は、長束正家、僧惠瓊等と與に、三萬人を率ゐ、伊勢に入りて、富田知信を、阿濃津城に攻む。

京極高次等は、一萬人を率ゐて、北陸方面を徇ふ。

ありとしも、覚え候はず』

と説けば、衆、實にもと、打ち領づく。

井伊直政、獨り、肯んぜず、

『君の天下を取り給ふこと、正しく、今日にこそ候へ、天の與ふるを、取らざれば、却つて、殃を受くると申さずや、疾く、御旗を返して、敵を撃ち滅ぼし給ふべし、退いて、一隅を保つ如きは、我等の知る所に候はず』と言ひ捨て、袂を拂うて、怫然として出づ。

家康の子秀康、突と、膝を進めて、

『兵部直政の申す所、道理至極に候、一將を留めて、景勝の押へとなし、全軍、擧つて、西上せんこそ、然るべく候なれ』

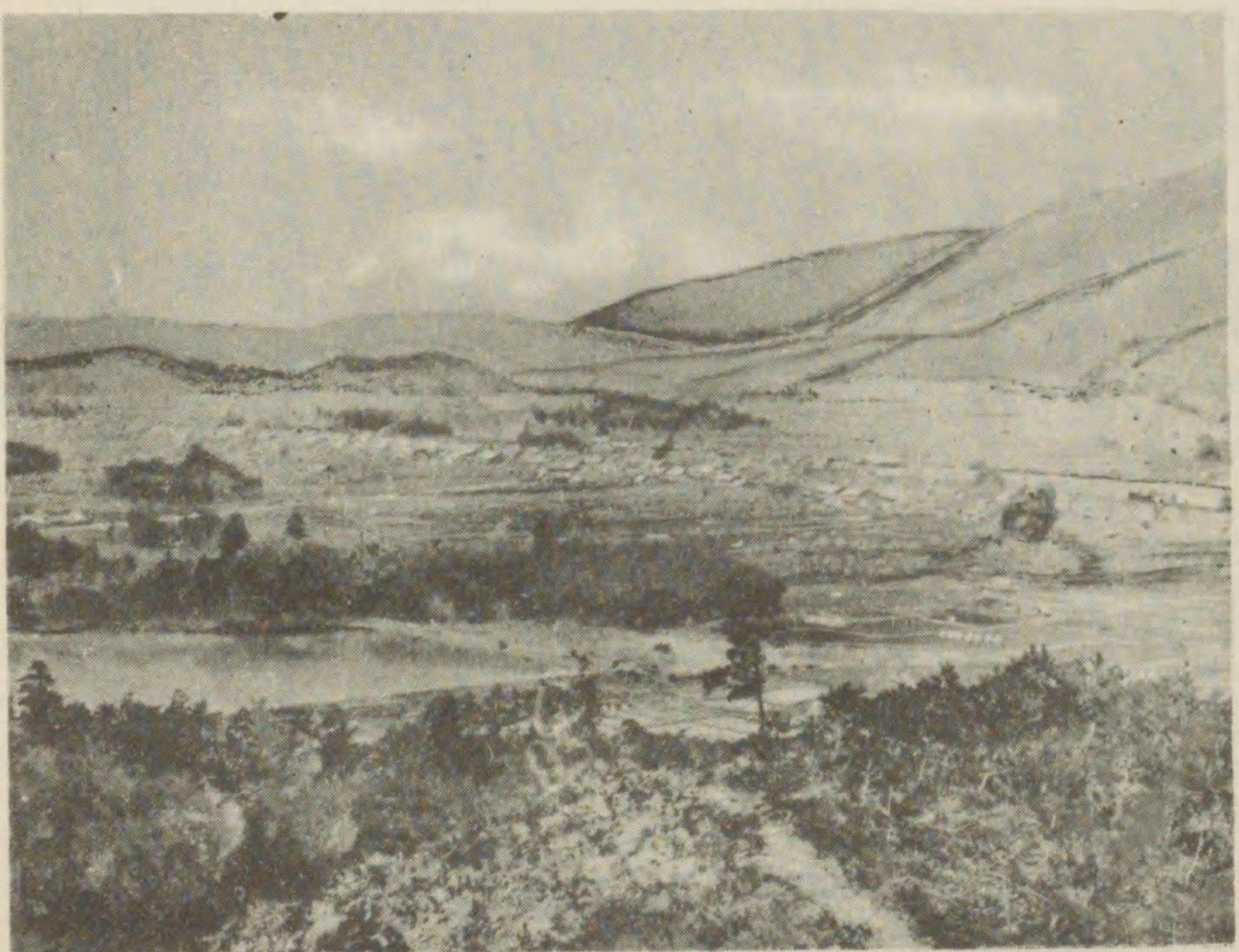
と説く、家康の意、初めより、此に在り、

『如何にも、其通りぞ、疾く、兵部を呼べよ』

と命ずれば、秀康、馳せて、直政を伴ひ來り、又も、軍議を凝らす。

四

翌日、家康、盡く、諸將を、小山に招く。



福島正則、淺野長政、黒田長政、池田輝政、細川忠興、加藤嘉明等以下、皆、列を正して、居並ぶ。
關ヶ原全景
關ヶ原は美濃國不破郡に在り今は關原の大字となる慶長五年東西兩軍の天下分け目の大決戦をなせる處

家康、自ら出でず、直政、及び本多忠勝を以て、『三成、愈々事を起し候ひぬ、諸君の妻子は、皆、大阪に在り、之れを棄つるは、

秀家は、小早川秀秋、島津義弘、鍋島勝茂等の十將と與に、兵四萬を率ゐて、伏見城を攻むるに決す。秀家、年少にして、氣鋭し、三成に向ひて、
『我れ、伏見を屠り、鳥居元忠、内藤家長の首を梟して、美濃に入り候べし、疾く、國に還つて、諸軍を催足し給ふべし』
と説けば、三成、此れに従ふ。
徳川征伐の師、是に於てか作る。

三

家康、七月二十一日を以て、江戸を發し、二十四日、進んで、小山に抵る。

會、伏見の使者、來つて、變を告ぐ。諸軍、聞いて、色を失ふ。

家康、敢て驚かず、親信の將士を會めて、策を問ふ、本多正信、先づ、口を開き、

『從軍諸將の妻子、盡く、大阪に居り候、定めて、心を牽かされ候はん、宜しく、盡く、罷め還し、唯、諸舊臣のみを以て、固く、本領を守り給ふべし、此他に、良策

人情の忍びがたき所に候はん、若し、西軍に屬せんと思ふ人あれば、心置きなく、立ち去り給ふべし、我れ、糧食を給して、無事に、送り還し參らせん』
との命を傳ふ、事、以外に出づれば、皆、顔を見合せて、黙して、答へず。

福島正則、忽ち、膝を乗り出だしつ、

『此度の事は、皆、三成の計らひのみ、争かて、幼君の知ろし召され候べき、某等、毛頭、三成の指揮を受けて、内府に抗する心候はず、何卒、御先鋒に、充て給ふべし、必ず、姦人原を、打滅ほし候はん』
と陳べ、意氣、昂然として、一座を見廻はす。

兩長政、輝政、忠興、嘉明等、亦、皆、口を揃へて、
『實に、左衛門大夫正則の申さる、通りにこそ候へ、妻子の如き、何の顧みるべき邊の候はん』
決然として、潔きよく、言ひ放つ。

家康、聞いて、打ち喜び、宴を開きて、諸將を饗す。
稍、ありて、家康、又人を以て、
『今や、東西に、敵を受け候ひぬ、先づ、東を攻め候は

んか、抑々西を討ち候はんか』
と問はしむれば、諸將、皆、

『先づ、西をこそ、討ち給ふべけれ』

と答ふ、正則、グツと、盃を飲み干して、長政に屬しつ、
『三成、行長の首を、下物に、一酌するも、近日に候ぞ』
と言へば、長政、亦、快然として、之れを受く。
酒、漸く酣はにして、興、漸く湧く。

折柄、家康、來て、席に着き、

『諸君、先づ、發し給へ、我れも、續いて、出立せん、諸君にして、助け給はんか、天下を定めんこと、五六十日を出で候はし』
と告げ、更に、徳永壽昌に向ひて、

『子は、兵事に精はし、今日の勝敗を、如何に思はる、ぞ』
と問へば、壽昌、莞爾として、

『天下の諸侯、假し、擧つて、君に當り候とも、衆心、和せず、號令、一ならず、争かて、君の鋒尖に敵し候べき、敵の敗形、既に、業に、現はれ候ひぬ』

關ヶ原驛

關ヶ原は美濃國不破郡に在りて中仙道の一驛なり慶長五年東西兩軍の血戦せるところは關ヶ原停車場附近の光景なり



はゞ、敵を打破らんこと、容易の業ぞ』

と答ふ、

家康、

打領づ

きつ、

『實

に、

其通

りぞ、

諸君

にし

て、

一致

共力、

我が

差圖

に従

ひ給

と告げ、壽昌を以て、嚮導とし、正則を以て、先鋒と定む。

五

家康、將さに、師を旋さんとし、先づ、留守の將を撰ぶ、

本多正信、膝を進めて、

『此大任に當らんもの、少將君秀頼の外には候はず』

と述べ、家康の意も、亦、此に在り、乃ち秀康を召して、

『我れは、軍を帥ゐて、西に向はん、汝は、此處に留ま

りて、景勝を押へ候へ』

と命ず、秀康勇武、倫に絶す、初めより、西征の師に、加

はらんと欲す、父の命を聽きて、意、甚だ平かならず、

『秀康は、西討の任をこそ、承はりたう候へ、留守は、

餘人に、命じ給ふべし』

と述べて、之れを辭す、家康、首を掉りて、聞かず、

『留守は、極めて、大切の役目ぞ、特に、江戸には、諸

侯の質あり、汝ならでは、衆の心を安んずるに足らず、

枉げて、父の言葉に従ひ候へ』

と諭せども、秀康、尙も、從軍を望んで、止まず、家康、

忽ち、怫然として、

「扱ては、景勝を恐るゝなよ」

と叱すれば、秀康、ハツと、頭を下げつゝ、

「左らば、留まり候はん、父上、御心安く、思し召せ、

秀康、斯くて候からは、景勝如きに、一步も、白河を、

踏み出ださせ候まじ」

と述べ、意氣、凜乎として、敵を呑む。

正信、軽く、其膝を拍ちつゝ、

「勇ましいかな、其御一言、それでこそ、留守の御役目

をも、預け給ふなれ」

と勵ます、家康、涙を垂れつゝ、手づから、一甲を取つて、

秀康に授け、且、

「是れ、我れの若き頃より、被れるものぞ、未だ一度も、

敵に、背を見せたることあらず、イザ、汝に取らすべし」

と言へば、秀康、欣然として、受け納め、別れを告げて、

辭し去り、翌日、兵一萬人を提さげて、宇都宮に向ふ。

六

最上義光は、初めより、家康と親し、伊達政宗も、亦、家康に屬す、獨り、佐竹義宣、兩端を觀望すれども、其父義

或は、異心を挾むに至らんも、亦、知るべからず。

監軍直政、忠勝の二人、憂慮、措く能はず、追つ掛け、

使者を發して、家康の西下を促がすこと數回。

然れども、家康、尙、未だ發せず、二人の痛心、謂ふばかりなし。

既にして、村越直吉、家康の使者として、清洲に来る、二

人、迎へて、仔細を問へば、直吉、無雜作に、

「殿には、御病氣と稱して、御下りあらせられず、此由

を傳へよとの仰せに候」

と答ふ、二人聞いて、眉を擡めつゝ、

「そは、由々しき大事ぞ、若し、左様なる事を告げなば、

諸將士、皆、離反すべきは、必定なり、君には、不日、

出發し給ふべしと告げ候へ、努め、仰せの儘に、語るべ

からず」

と告げて、呉れども、直吉を戒しむ。

翌日、諸將を會めて、直吉を引き合はす、諸將、直吉を、

中に取り圍みつゝ、其使命如何にと、打ち守る。

直吉、徐かに、菓子をも、面々の前に、押し並べて、扱て、

重、既に、歎を家康に送る。

東北の事、復た憂ふるに足らず、家康、是に於てか、師を

回へす。

福島正則、先鋒たり、池田輝政、之れが副たり、七月二十

八日を以て、小山を發す。

井伊直政、本多忠勝の二人、監軍たり、亦、同じく發す。

諸將の城邑、畿内に近きもの、亦、相次いで發す。

家康、乃ち八月四日を以て、小山を發し、六日を以て、江

戸に入る。

七

先發の諸將、十四日を以て、福島正則の居城清洲に着す、

總勢五萬、其將二十有七人。

時に、石田三成、小西行長等、既に來りて、大垣に在り、

清洲と、大垣と、相距ること、僅かに七里、兩軍、相對峙

して、未だ戰はず。

清洲の諸將、領を引いて、家康を待てども、更に、西下せ

ず。

訛言、頻りに、行はれて、衆心、更に、安んぜず、諸將、

「主人家康、申して候、水々の御在陣、御大儀に候、家

康、早々、出馬すべきの處、風氣の爲め、其儀に及ばず、

井伊、本多と謀りて、好きに、取り計らひ給はれとの仰

せに候なり」

と有りの儘に述べて、少しも繕はず。

直政、忠勝の二人、聞いて、色を失ふ、諸將、亦、心、安

からず、

「シテ、何時頃、出馬せられ候ぞ」

皆、膝を進めて、問へば、直吉、言下に、

「左ればに候、態々、某を差し越さるゝからは、所詮、

急の事にも候まじ」

と答ふ、二人、益々驚ろき、頻りに、直吉に、目配せすれ

ども、更に、見向きも遣らず、

「此菓子とても、江戸より、持參せしには候はず、實は、

井伊、本多の兩人にて、用意致せしものに候ぞ」

と包まず、事の由を、打ち明かせば、二人、益々呆れて、

言葉なし。

諸將、聞いて、憚ばず、互に、何事をか囁き合ひ、形勢、

今や、甚だ穩かならず。

加藤嘉明、忽ち、ハタと、膝を拍ち、

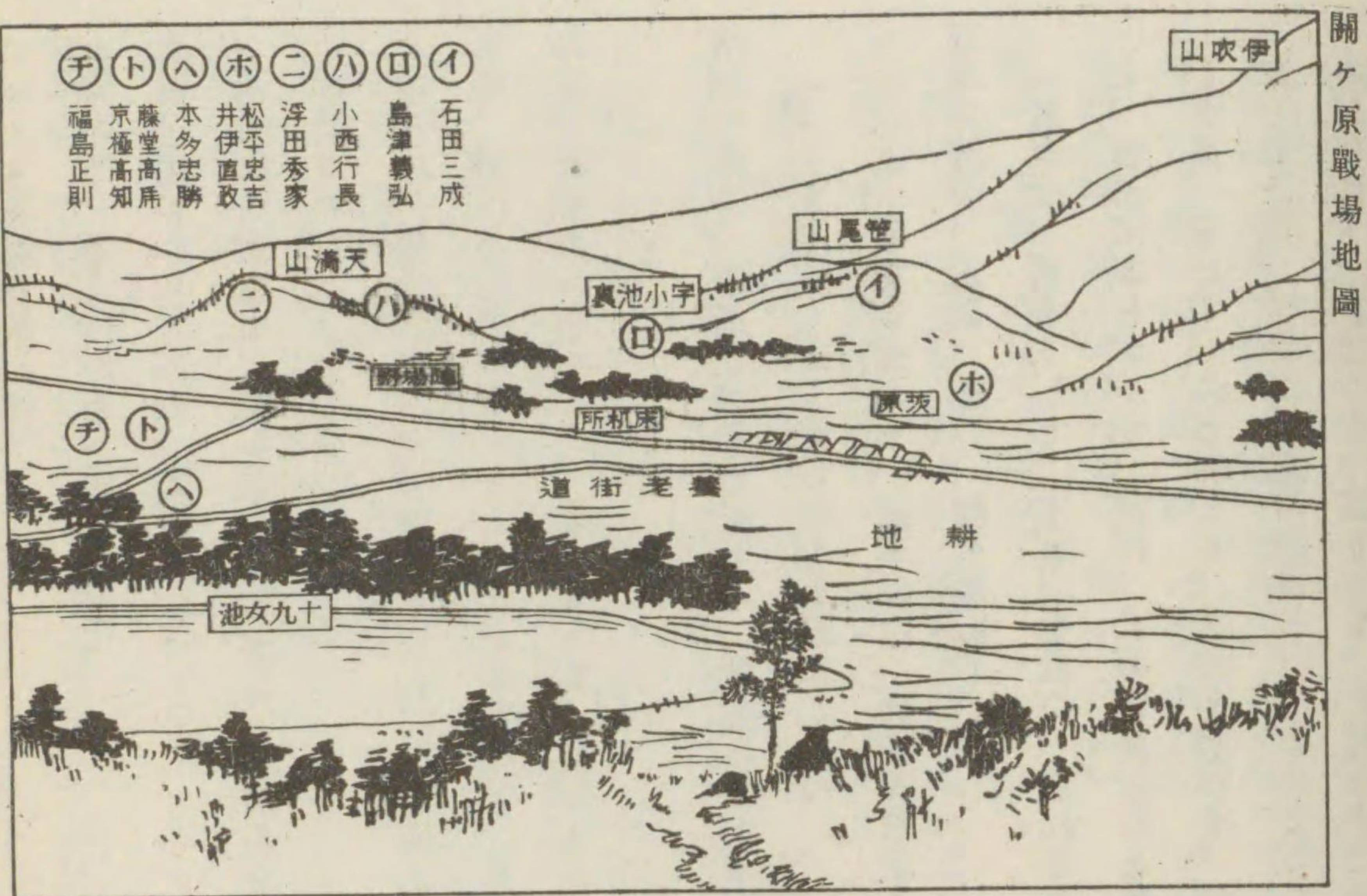
『流石は、徳川殿ぞ、實に、古今に稀なる名將かな』
と言ひつゝ、獨り、頻りに、感嘆すれば、福島正則、突と、膝を喜明の方へ、押し向けつゝ、

『這は、心得ざる左馬介、嘉明の申され條かな、我々を、斯くまで、待たせて、御出馬なきこと、何が其様に、名將に候ぞ』

仔細如何にと、詰り掛ければ、諸將、亦、皆、目を注ぐ、嘉明、打ち領づきつゝ、

『左ればなり、此度の動亂は、治部の逆謀とは言へ、表面は、御幼君の御爲めと稱して、諸侯を催促致し候ものならずや、此席の面々も、多くは、故太閤御取立ての人なれば、若しやとの御疑念より、迂濶に、御出馬あらざるものならん、此上は、我々の貳心なき證據を顯はし候はん、左すれば、早速、出馬致され候べし』
と説く、正則、聞いて、横手を拍ち、

『如何にも、其通りぞ、左りとも、心付かず、只管、御



『如何にも、一旦は、御兩所御申し含めの通りに、申さんかと存じ候ひしが、又翻つて、考へ候に、人もあらんに、態々、我等し

出馬を、催促したるこそ、愚かなる業なりけれ、此上は、犬山か、岐阜の城を、攻め落して、我々の貳心なき證據を、御覽に入れ候はん、村越、能くこそ、隠さず、申し呉れつれ、序に、兩三日、逗留して、軍の模様を、見られずや』

と言ひつゝ、扇を開きて、直吉を、打ち煽げば、直吉、忽ち、欣然として、

『某の當表へ参り候ひしこと、各々の義勇を勵まさん爲めの御使ひに外ならず、此上は、片時も早く、立ち歸りて、各々の御志を、申し上げ候はん、左すれば、早々、出馬あらせ給ふらん』

と言へば、諸將、實にもと思ひ、連判の誓詞を作りて、直吉に託す。

直吉、乃ち別れを告げて、宿所に歸れば、直政、忠勝の二人、續いて、訪ひ來り、

『如何なれば、我々の申し含めたることを、忝きて、有りの儘に、申されしぞ、其心底を、承はらん』
と詰り問へば、直吉、手を突きつゝ、

きを、御使に擇ばれ候こと、全く、御口上を、やつすやうなる才覺なきを、思し召しての御事と心付き、扱てこそ、有りの儘に、申し候ひしなれ』
と答ふ、二人、如何にもと思ひて、復た答めず。

直吉、急ぎ、江戸へ歸りて、此由を、復命すれば、家康、聞いて、笑壺に入り、

『日頃の粗忽者にも似ず、能くせしぞ』
と告げて、深く、其勞を稱ふ。

直吉、本と、三十郎と稱す、粗忽者を以て聞ゆ、或時、家康、卒然として、

『汝は、何と申すぞ』
と問へば、直吉、ハツと、頭を下げつゝ、

『村越』
と言ひしばかり、グツと、行き詰まりて、我が名前、口に

出でず、
『シテ、名前は、何と申す』

と重ねて、問はれて、益々窮し、不圖、側に居合はす堀尾茂助、吉晴の顔を見るより、

「エ、茂助と申し候」と答へて、額の冷汗を、押し拭ふ。

家康、覺えず、フツと、吹き出しつゝ、

「彼れの側へば、立ち寄るまじきぞ、人の名を奪ふ粗忽者ぞよ」

と言へば、居合はず人々、皆、ドツと、打ち笑ふ。

家康、斯かる粗忽者なれども、其正直なるを、見抜きて、此度の使者を、命ぜしに、果せるかな、其効あり。

八

清洲の諸將、家康の眞意を覺りて、前進の策を議す。

「犬山を攻めんか、將た岐阜を討たんか」

犬山には、稻葉貞通あり、岐阜には、織田秀信あり、皆、西軍に應ず、正則、先づ、膝を進めて、

「岐阜は、兵多くして、木曾川を阻つ、之れを攻めんこと、容易にあらず、今、我れ、犬山を攻むると言ひ觸らしなば、定めて、兵を分ちて、之れを助けん、我れ、其虚に乗じて、不意に、岐阜に逼らば、之れを抜かんこと、難からず、岐阜にして、陥らば、犬山の如きは、自か

ら潰え候はんのみ」

と説けば、諸將、之れを賛す。

岐阜攻撃の議、立どころに決す、乃ち軍を二手に分ちて、岐阜に進まんと欲す。

正則は、上流河田の渡より、岐阜の搦手に向ひ、輝政は、下流尾越の渡より、追手に向ふに決す。

河田の渡は、近く、且、徒歩にて、渡るべし、尾越の渡は、船ならでは、越ゆべからず、輝政、乃ち異議を唱へて、

「我等、左衛門大夫正則と與に、御先鋒を承はれるに、左衛門殿は、城に近き、上流に向はれ、我等は、道遠く、且、船渡りの下流に向ひ候こと、其意を得ず、輝政こそ、上流に向ひ候べけれ」

と迫る、忠勝、輝政に向ひて、

「戦の勝負に拘はらず、唯、其身の武功をのみ、心懸け給ふこと、御親族には、似合はしからず、兵部直政も、某も、此度の戦ひには、場所の善悪は、論じ申さざる覺悟に候ぞ」

と言へば、直政も、亦、正則に向ひて、

「ても、味方に取つても、大切の地に候なり」

と説く、三成、實にもと思ひ、直ちに、人を岐阜に遣はして、

「疾く、此方へ付き給へ、御承引なきに於ては、唯一揉みに、揉み潰し候べし」

と脅かしむ、季信、聞いて、驚き惧れ、一も二もなく、西軍に應ぜんと欲す、老臣木造具康、秀信の前に出で、

「君、何とて、西軍に従はんとは、思し給ふぞ、豊臣は、曾て御家に背き、徳川は、乃ち御味方に付き候はずや、義に於て、徳川を助け給はんこそ、當然に候なれ、況してや、豊臣の家來共に、驅使せられ給はんこと、右大臣家の御孫たる君の御恥辱なりと思し召さずや、情に於ても、東軍に屬き給はんこそ、然るべく候なれ」

切に、言葉盡くして、説き勸む。

然れども、秀信、躊躇して、決せず、更に、
「左らば、前田玄以の所存を開き給へ、玄以は、故殿信忠より、君を託せられ候へるもの、ヨモ、御不爲めを存じ候まし」

「三左衛門尉輝政の申さる、こと、其謂はれあり、當所は、左衛門殿の御所領なれば、船筏等の用意も易かるべし、然れば、上流へは、三左衛門尉殿、下流へは、左衛門殿、向ひ給はんこそ、然るべけれ」

と説く、正則、強ひて、争はず、

「我れと、三左衛門尉とは、與に御先鋒なれども、我れこそ、第一の先手に候なり、然るに、道遠く、大河多き下流に向ひ候ては、時時刻後れ候べし、斯くては、第一の先手たるべき面目を失ふ道理に候はずや、假令、城兵、上流へ出で候とも、先づ、戦ひを開かず、我等が、尾越を渡り、笠町へ亂入して、相圖の火の手を揚ぐるを待つて、戦ひを始むるならば、兎も角も、致し候はん」

と答ふ、輝政、聞いて、道理とせず。

議、此に決す、乃ち犬山に向ふと誓言して、二道より岐阜に向ふ。

九

岐阜は、東西要衝の地に在り、大谷吉隆、三成に向ひて、

「先づ、織田黄門を、手に付け候へ、岐阜は、敵に取つ

と説き、自から京師に到りて、其意見を叩けば、玄も、亦、

『東軍にこそ、付き給ふべけれ』

と答ふ、具康、乃ち、馳せて、岐阜に還れば、計らざりき、秀信、既に、業に、西軍に應じ居たらんとは。

具康、嘆息すれども、及ばず、乃ち、秀信を助けて、守備を修す。

十

清洲の諸將、二手に分れて、岐阜に進む。

下流の尾越には、福島正則、細川忠興、加藤嘉明、黒田長政、藤堂高虎、田中吉政、蜂須賀至鎮等、一萬六千人を以て向ふ、井伊直政、監軍たり。

上流の河田へは、池田輝政、淺野幸長、堀尾忠氏、一柳直盛、山内一豊、有馬豊氏、中村一榮等、一萬八千人を以て向ふ、本多忠勝、監軍たり。

諸將、大山を攻むると聲言す、間諜、之れを聞いて、急ぎ、岐阜に報ずれば、

『そは捨て置くべからず、疾く、人數を分けて、助くべし』

し』

俄かに、加藤貞泰等を、大山に遣はす、何ぞ計らん、東軍は、大山に向はずして、却つて、岐阜に来らんとは、

『素破や、敵押し寄せ來るぞ』

急に、防戦の用意を整ふ、具康、乃ち、秀信に向つて、

『當城は、要害、無比にして、兵も多く、糧食も、豊かに候へば、敵、何萬騎を以て、押し寄せ來り候とも、容易に落つべき虞候はず、其中には、石田、島津、小西等、大垣より、後詰め致し候べければ、味方の勝利、疑ふべくも候はず、固く、城を守りて、打つて出で給ふべからず』

と説けば、赤星内膳、膝を進めて、

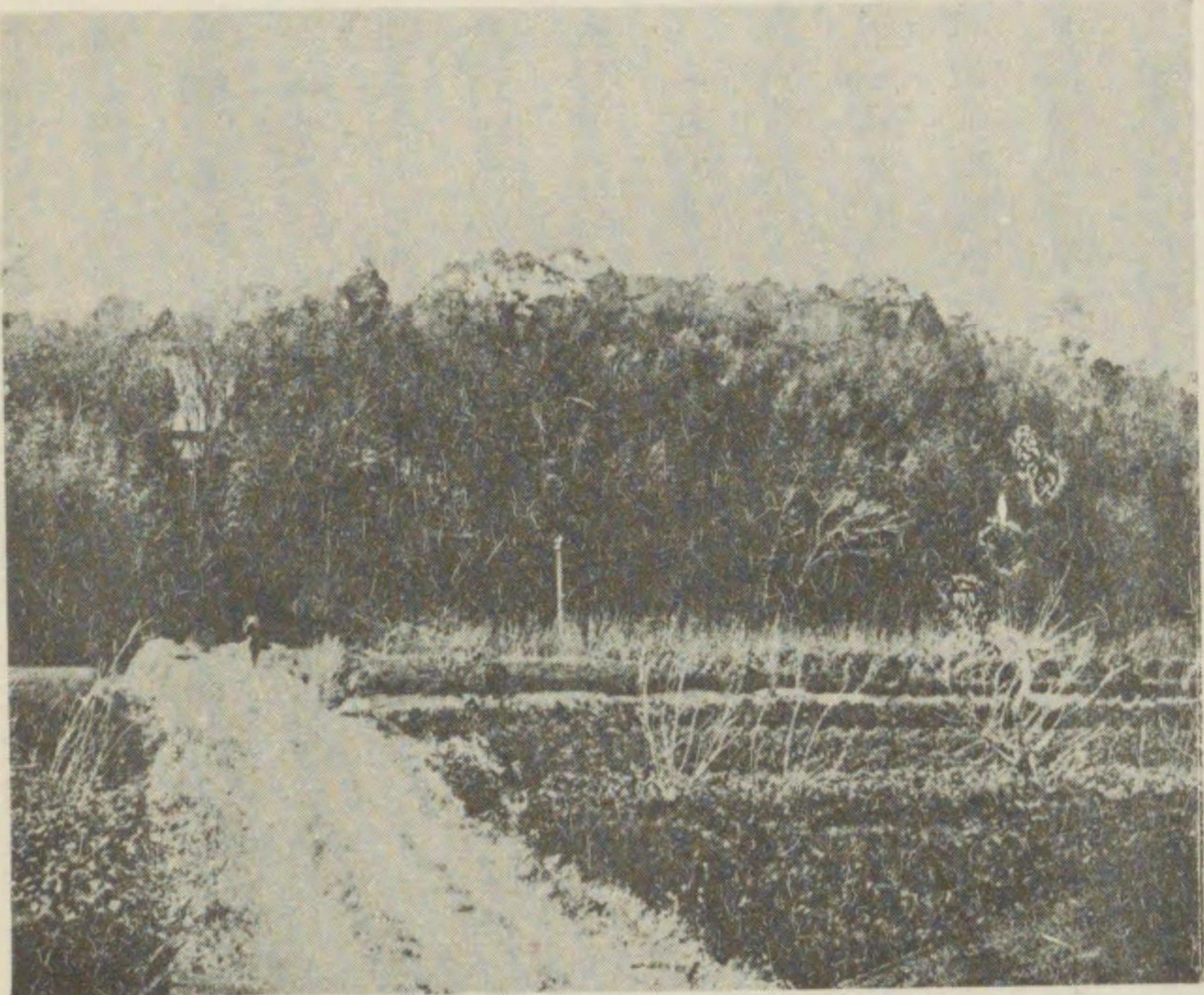
『そは異なることを、申さるゝものかな、昔より、籠城するは、勢ひの敵はざる時に限り候なり、一戦をも爲さずして、籠城せんこと、弓箭の手前、甚だ耻すべきことに候なり、御祖父信長公には、僅か八百餘人を以て、今川義元の四萬餘人を、切り崩し、剩さへ、義元的首を、擧げ給へること、君にも、知ろし召され候はずや、今や、

城中の人數は、一萬に餘り、敵の人數は、義元の軍に優り候とも覺えず、宜く進んで、敵を打ち崩し給ふべし、

萬一、戦ひに負け候はば、其時、籠城するも、何の晩く

岡山

岡山は美濃國不破郡赤坂町の南郊に在り關ヶ原の役東軍の主將徳川家康の駐屯せし處にして戦捷の後勝山と改む此寫真中の建物は浄土宗の紫雲山安樂寺なり



や候はん、疾く、出戦の御用意あらせ給へ』

と説く、秀信、庸劣、事理に通ぜず、

『内膳の申す所、我が意に叶へり、疾く、敵を撃ち破

つて、我が兵威を示すべし』と告げ、議、忽ち決す。

木道具康、百々綱家、中島惣右衛門等、二千餘人を以て、木曾川の北、米野附近に陣して、敵を待つ。秀信、亦、自から麾下六十餘人を以て、出で、川手村に陣す。

既にして、木曾川の南岸、敵の旗影、閃めき、人馬、現はる。

戦機、早、既に、迫り來る。

十一

八月二十一日、上流軍、進んで、河田の渡に抵る。川廣く、水急なり、敵軍、柵を前岸に結びて、陣す。

『上手や好き、下手や易き、何處をや、渡るべき』

諸軍、岸に上りて、水を望む。

忽ち、一隊の百姓、河原に進み來る、

『一柳殿や在はず、御領内の百姓共に候なり、川の勝手は、能く知りて候、イザ、御案内致し候はん』と呼はる、年若き一將、突と、馬を進めて出で、

『我れこそ、監物なれ、扱ては、汝等は、黒田の百姓共よな、今日の芳志、過分に思ぞ』

直盛、自から挨拶すれば、百姓、皆、喜び勇む、

『左らば、此方へこそ、進ませ給へ』

五六十人の百姓、サツと、川に飛び入り、人垣を作つて進む。

直盛、乃ちザブンと、川に乗り入る、

『此川の先陣は一柳監物直盛なり』

と大音聲に、呼はりつゝ、逆巻く波を蹴つて、前進す、

『素破や、殿には、瀬踏みし給ふぞ、續けや面々』

老臣大塚權太夫、部下を率ゐて、續く。

堀尾忠氏、遙かに、此體を見遣りて、憤然たり、

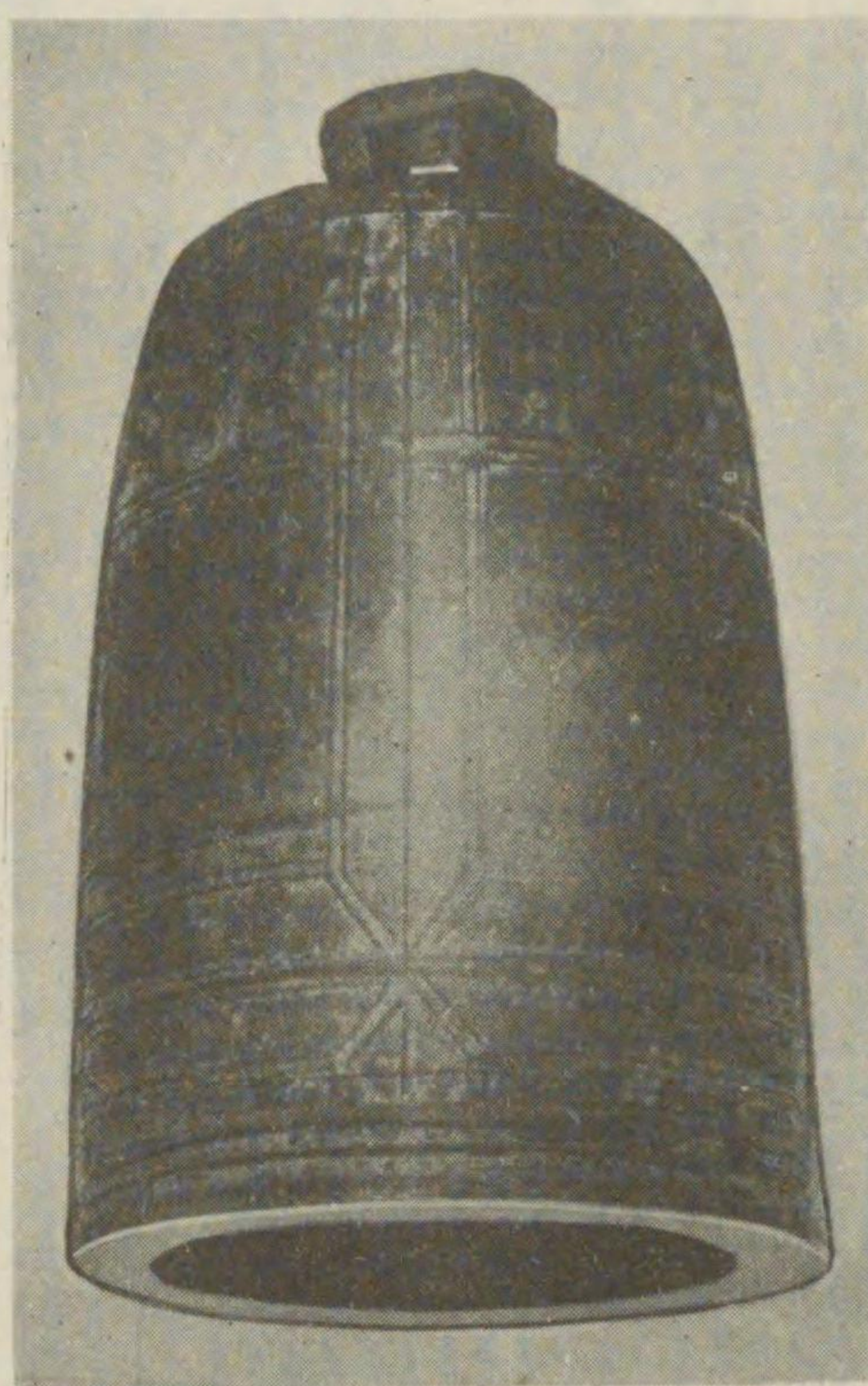
『扱は、一柳は、案内者ありて、川を渡るぞ、我が手の者共、彼れに劣るな』

と疾呼すれば、千八百餘人の兵士、我れ劣らじと、川に飛び入り、飛び入る。

輝政の弟長吉、兄の前に進みて、

『兄上は、此手の大將に候、一身の御働きは、如何に候

安樂寺の鐘
安樂寺は美濃國不破郡赤坂町の岡山に在り其梵鐘は大永二十六年の鑄造に係る元と播磨國平津庄生石社に在りしに關ヶ原の役西軍之れを斷らし來る東軍函獲して此寺に納むと稱せらる。



はん、某、代りて、進み候べし、イザ來れ一同』

と令し、自ら兄の部下を率ゐて、流を亂れば、淺野幸長、

山内一豊、有馬豊氏等、皆、我れもくと、乗り入る。

輝政、此體を見るより、殘兵を率ゐて、遙かの下手を渡る。

諸軍、上手を渡れば、下手は、流弱く、勢ひ緩るし、輝政、之れを察して、特に、下手を擇びて、渡る。

十二

木道具康、百々綱家等、此體を見て、士卒に向ひ、

『敵は、大軍にして、馬上の達者ぞ、無謀に戦はゞ、必ず、敗れん、イザ退け』

と令して、兵を退くること、三町ばかり、銃手を、岸頭に備へて、敵を待つ。

既にして、東軍、中流に進む。

具康、時分は好しと、指揮すれを下げば、銃手、一齊に、火蓋を切る。

彈丸、宛がら、急雨の如し、東軍、矢庭に、倒るゝもの、數十人。

然れども、兵は多く、將は猛し、銃聲を聞いて、意氣、益々振ふ、楯を翳し、鎧を傾けて、奮ひ進む。

一柳直盛の勢、眞先に、前岸に、躍り上る、敵兵、皆、大軍の方に、氣を取られて、復た小勢の直盛を顧みず、直盛、屹度、敵軍を、見渡しつゝ、

『此川の一番越は一柳監物直盛なるぞ』

と呼はりつゝ、部下三十騎ばかりを、提さげて、ドツと、敵中に突入す。

百々綱家の兵、イザヤ來れと、槍を合はす。

堀尾忠氏、池田長吉、此隙に、難なく、陸に上り、鯨波を作つて、無二無三に、敵を衝く。

戦闘、此に始まりぬ、兩軍、火花を散らしして、奮ひ戦ふ、直盛、益々、馬を進め、

『ソレ敵を逐ひ立てよ』

聲を勵まして、叱咤すれば、大塚權太夫、眞先きに進んで、敵の勇士武市善兵衛と戦ふ。

手練と、手練の槍先き、石火の如く、電光に似たり、勝敗、容易に決せず。

奮闘數刻、如何なる隙をや見けん、權太夫、曳とばかりに、槍を繰り出だせば、善兵衛、一聲、アツと、叫びて、仰向けに倒る。

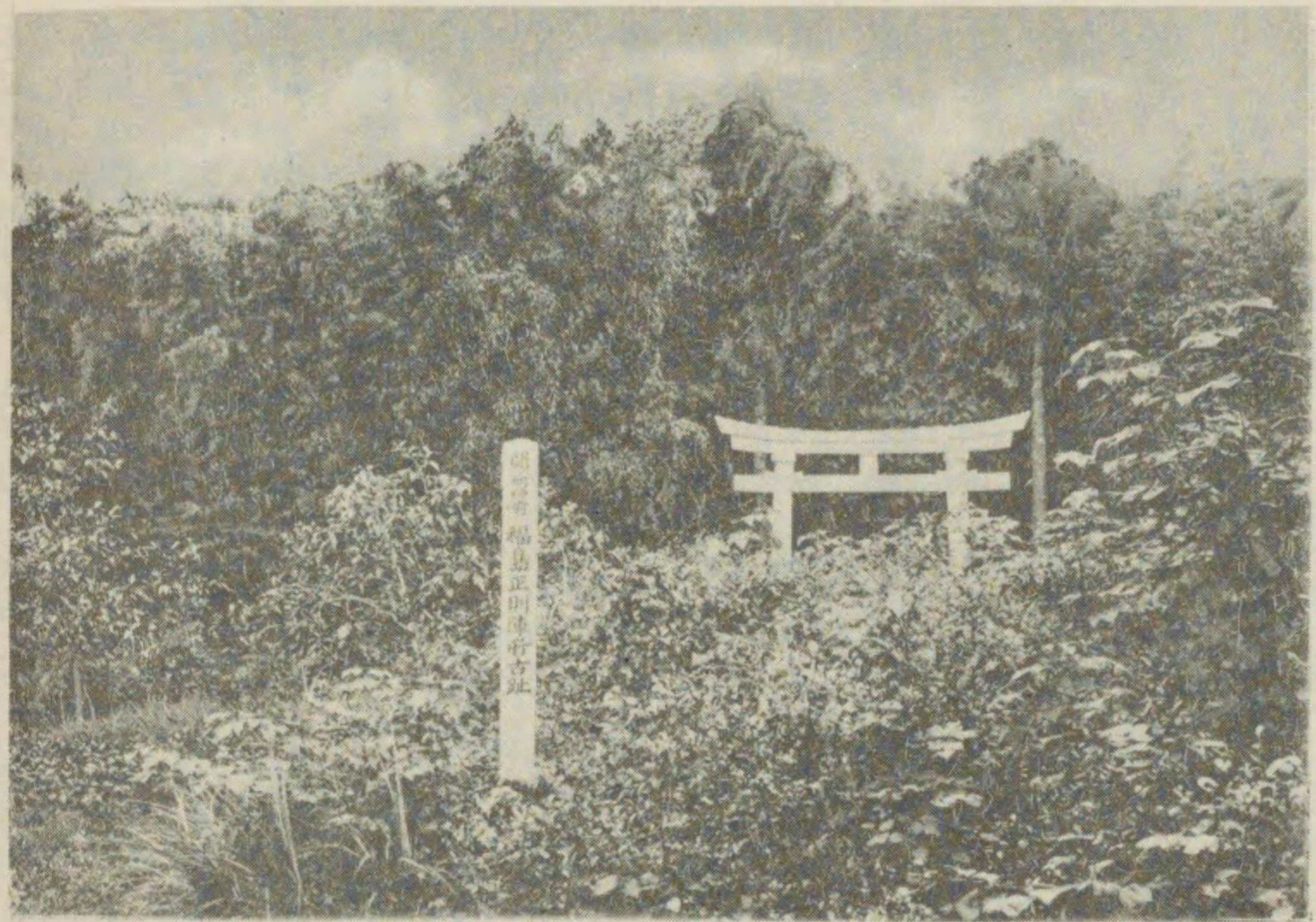
權太夫、進んで、首を取らんとする時、善兵衛の弟善四郎、サツと、槍を抜いて、繰り出だす。

權太夫、突と、身を換はしさま、抜き打ちに、斫り付くれば、哀れ、善四郎、眞二つとなつて、打ち倒る。

飯沼小勘平、斯くと見るより、大に怒り、大刀を揮うて、權大夫に、斫つて掛る。

直盛、遙かに、之れを見て、

關の明神前
關原村大字松尾の井上神社は一に關の明神と曰ふ其社前は東軍の將福島正則の陣を置きし處



『權太夫を討たすな、續け續け』と呼はりつゝ、駈け進む。百々綱家の部下、望み見て、遮ぎり闘ふ。戰鬪益々急なり。既にして、權太夫、

小勘平の爲めに討たる、垂井七兵衛、其首を取つて、還つて、秀信の實檢に、備へんとす。直盛、之れを見るより、憤然として、

『其首、戻せ、我れは、一柳監物なるぞ』

と叫びつゝ、疾風の如くに、駈け來り、ムツと、七兵衛を、横抱きに抱きて、其首を掻き切り、難なく、權太夫の首を、取り戻す。

直盛、益々進んで、敵中に突入し、當るを幸ひ、薙ぎ立て、斫り立て、敵を殺すこと數人、身も、亦、傷つく。

十三

岐阜勢、漸く色めく。

淺野幸長、大兵を率ゐて、進み戦ひ、池田長吉、亦、奮ひ闘ふ。

木造具康、百々綱家、拒ぎ戦へども、勢ひ敵せず、漸く、將さに敗れんとす。

飯沼小勘平、獨り、奮ひ戦ふ。

長吉、槍を捻つて、小勘平の腰を、突き貫き、走り寄りて、其首を取らんとす。

らん、皆、一死、城と與に、亡びんことを期す。

諸老臣、乃ち部署を定む。

京町口は、津田元房、千餘人を以て守り、追手七曲口は、木造具康、八百餘人を以て守り、搦手百曲口は、麾下の士、之れを守り、秀信の弟秀則、其指揮を司どる、楊木戸門には、中島惣右衛門の一隊あり、城、險にして、士卒、皆、死を以て守る、威風堂々、容易に、落つべしとも思はへず。

十五

下流軍は、尾越の渡に向ふ。

竹ヶ鼻城の杉浦五郎左衛門等、前岸に、柵を樹て、大砲を備へて、敵や來れと、待ち構ふ、東軍、勇と雖も、容易に、渡り得べからず。

監軍井伊直政の老臣木俣土佐、下手の民家を壊して、筏を造り、難なく、川を渡りて、横さまに、敵を撃つ。

五郎左衛門等、衆寡、敵せず、急に、兵を收めて、竹ヶ鼻城に還る。

福島正則、八千五百人を卒ゐて、之を逐ひ、進んで、城を圍む、黒田長政、細川忠興、亦、之れを援く。

小勘平、屈せず、ムツと、長吉に、引つ組む。長吉、忽ち、小勘平を取つて、控と投げ付くること五六間、家臣伊藤與兵衛、駈け寄つて、其首を取る。輝政、益々兵を指揮して、進む。百々綱家、先づ退く、木造具康、亦、退く。秀信の軍、大に慌ち恐れ、終に潰えて、走り還る。輝政等、進んで、芋島、新加納附近に到り、捷を江戸に報ず。

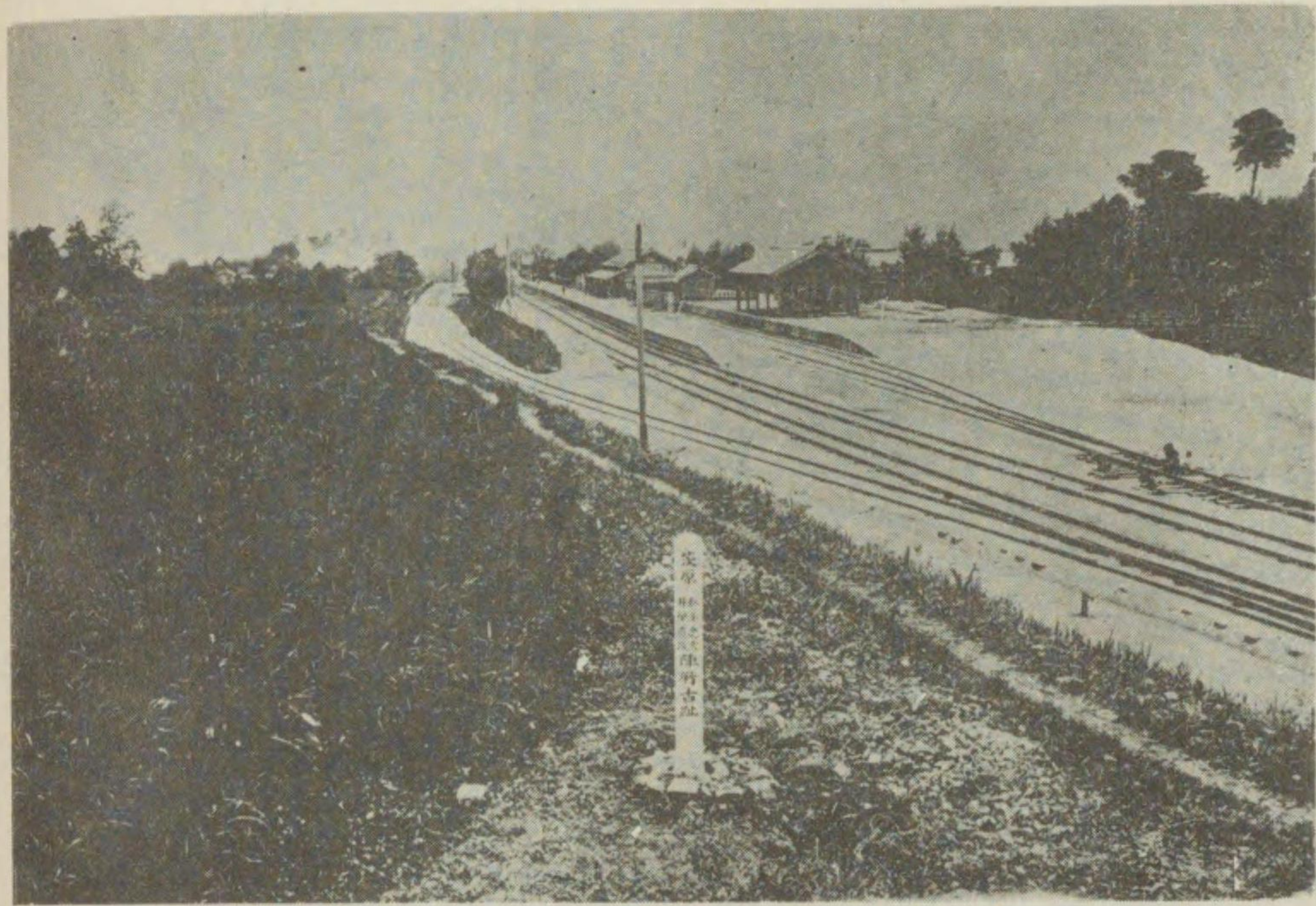
十四

秀信、城中に、遁れ還り、諸將士を會めて、盃を賜ひ、

『我れ、今日、諸老臣の意見を用ひずして、脆くも、敗軍を招き、我が祖父、我が父の武名を汚がしたるこそ、返すくも、口惜しき極みなれ、死すべき時に、死せざれば、死に優さる耻ありと申さずや、今は、早、覺悟を極めたるぞ、忠義を思ふ面々は、我れと與に、討死して、武名を、後世に傳へ候へ、持口々々の手配は、老臣共に於て、好きに計らひ候べし』

辭色、決然として、申し渡せば、諸將、誰かは、感激せざ

二の丸の守兵、門を開きて降る、乃ち進んで、本丸を攻め、
矢を放ち、
銃を發し、
息をも繼が
さず、攻め
立つ。
五郎左衛門、
力、敵せず、
火を放ちて、
自殺し、城、
乃ち陥る。
諸軍、更に、
進んで、太
郎堤、今の
佐波、鶉附
近に抵れ
ば、上流軍
の捷報、會、



茨田
關原村關ヶ原の茨田は東軍の將松平忠吉井伊直政の陣地を
置ける處

正則等、皆、憤ほる、
『三左衛門尉の遺約せしこそ、奇怪なれ、好しく、明
朝の城攻めには、彼等に、鼻を明けさすべきぞ』
籤を抽きて、順序を定め、火を民家に放ちて、岐阜に、押
し寄せんとす。

正則の老臣吉村又右衛門、進み立て、
『池田勢を出し抜き給はんとならば、放火は、暫らく、
見合はせ給へ、岐阜に、押し寄せば、鯨波を作つて、鐵
砲を、打ち掛け給ふべし、左すれば、池田勢は、此聲を
聞いて、馳せ付け候はん、其旗の見ゆるを待つて、火を
掛け給はゞ、池田勢は、烟火に支へられて、進むこと叶
ひ候まじ、其隙に、疾く、城を攻め落し給はゞ、手柄は、
自から當軍に歸し候べし』
と説けば、正則、掌を拍つて、喜び、
『此策、極めて、妙なり、左らば、急げ』
直に、兵を率ゐて、進んで、岐阜の城下に入る。

十六

東軍、犇々と、城に迫る。
正則の兵、眞先きに進み、細川忠興、加藤嘉明の兵、此れ
に續く。
吉村又右衛門、正則の先鋒たり、鯨波を作つて、京町口に、
押し寄す、是れぞ追手の第一門。
守將津田元房、銃を發し、木石を投じて、寄せ來る敵を倒
す。

元房、夙に、驍勇を以て著はる、手兵を提さげて、突出し、
大身槍を揮うて、武者十餘人を、突き倒す。
又右衛門、此體を見て、疾風の如くに、駈け來り、士卒を
勵まして、包み撃つ。
敵も、味方も、皆、勇猛、馬を八方に驅つて、喚きつ、叫
びつ、奮ひ戦ふ。
元房、機を見て、サツと、引き退く。
東軍、進んで、木戸に迫り、忽ち、突破して、中に入る。
元房、尙も、兵を指揮して戦ふ。
忠興の臣幸田次郎助、突と、進んで、元房と引つ組み、曳

曳、挑み戦ふこと少時、忽ち、撞と、馬より落つ。
元房、素早く、次郎助を、取つて押へて、其首を斬る。
次郎助の僚友柳田半助、怒つて、元房に迫る、元房の兵生
駒平三郎、遮り戦うて死す。
元房、今や、衆寡、敵せず、殘兵を率ゐて、馳せて、七曲
口に退く。

十七

東軍、更に、進んで、七曲口を攻む。
守將木造具康、部下を指揮して、拒ぐ、部下、皆、勇敢、
矢石を投じて、近づく敵の頭を碎く。
又右衛門、屈せず、士卒を勵まし、猛然として、肉薄
す。梶田新助、福島伯耆等、亦、挺身して戦ふ。
城兵本間五郎八、驍勇、比なし、長刀を揮うて、出で戦ひ、
斫つて、敵を倒すこと七八人、身も、亦、敵刃の下に墮る。
具康の兵奥田喜太郎、剛弓を把つて、櫓上に現はれ、矢を
注ぎ、矢を注ぎて、敵を射る、東兵、弦音に應じて、倒る
るもの十數人。
寄手、少しく怯む。

正則の臣大橋茂右衛門、星野又八郎、見て、切齒し、憤然として進む。

又八郎、刀を揮うて、敵の首を斫る、首、コロ／＼と轉びて、谷底に墜つ。

又八郎、見て、莞爾たり、又進んで、一級を獲。

城兵大岡角助、大岡角内、伊藤長八、和田孫太夫等、皆、死を決して、拒ぎ戦ふ。

正則、斯くと見るより、氣を焦らち、益々兵を督して、急に攻む。

具康、終に、敵せず、退いて、揚木戸門に入る。

津田元房、後かれて、來れば、門、既に鎖さる。

門を守るもの、内より、聲を掛けて、

『門を開かば、敵兵、附け入り致し候はん、塀を越えて、入り給へ』

と呼ばれば、元房、

『武士たるもの、争かて、然る卑怯の振舞をなすべきや、敵、來らば、潔よく、討死致し候はん』

馬を門外に、停めて、自若として立つ。

既にして、門、開かる、元房、突と、躍り入れれば、門、復たハタと、鎖さる。

十八

斯かる所へ、正則の兵、又突進し來る。忠興の兵、亦、來り迫る。

城兵中島傳右衛門、齋藤市左衛門、伴吉右衛門等、善く拒ぐ。

忽ち、忠興の陣中より、一士、躍り出で、

『我れこそは、澤村才八なれ、イデヤ、雌雄を決せん』

と呼ばりつゝ、槍を捻つて進み、傳右衛門等三人を、相手に、火花を散らして、奮ひ戦ふ。

才八、槍力、比なし、忽ち、市左衛門を、突いて、傷つく、

身も、亦、一創を負へども、屈せず、槍を捨て、傳右衛門と、引つ組み、俱に崖下に墜つ。

吉右衛門、槍を投じて、才八を突かんとす、手元、狂ひて、

傳右衛門の脇に中つ。

才八、得たりと、傳右衛門を、押し伏せて、其首を取る。

吉村又右衛門、馬を驅つて、突進し來り、進んで、櫓の下

に抵る。

城兵、櫓上に現はれ、長槍を把つて、突き下す。

又右衛門、忽ち、槍を攫み、其儘、櫓に上らんとす、城兵力、支へず、撞と、地に落つれば、又右衛門も、亦、倒れ、

矢庭に、躍り上りて、敵の首を取る。

長尾隼人も、亦、敵の突き下す槍を、たぐつて櫓上に躍り上り、忽ち、敵兵數人を倒す。

又右衛門、亦、續いて、登れば、諸兵、先きを争うて、登り、逃げ惑ふ敵を、逐うて、火を放つ、黒烟、忽ち、半天に、渦巻き騰る。

山風、煽り／＼と、火焰、城に向つて飛ぶ、形勢、今や、

益々急なり。

十九

八月二十三日、天、將さに明けなんとす。

池田輝政、岐阜に、逼らんとし、軍を進むること、一里ばかり。

忽ち聞く銃聲、頻りに起るを、

『扱ては、福島勢に、抜け駆けされしぞ、後くるゝな、

面々』

輝政、衆

を勵まし

勵まし、

馬を眞先

きに、進

めて馳す。

浅野幸長、

堀尾忠氏

等、亦、

我れ劣ら

じと、馬

を煽りて

進む。

既にして、

岐阜に近

づく。

十九女池
十九女池は關原村大字關ヶ原に在り池面四町歩ありて今は鯉鯉等の養殖場となる此池の西邊は東軍の將本多忠勝の陣を置きし處



京町口の戦ひ、今や、正に酣は。

輝政、心焦らちて、急に、迫らんとす。兵火、忽ち、諸所に起りて、黒烟、天を掩ふ、これぞ吉村又右衛門の放てるもの。

輝政等、今は、一步も進むこと叶はず、馬を駐めて、切齒すること少時。

幸長は、氣早やの將なり、

『左らば、他の口を、攻めん』

部下三千人を提げて、瑞龍寺山の砦に向ふ。

一柳直盛、井伊直政、亦、續いて進む。

瑞龍寺山の砦は、柏原彦右衛門、其弟内膳、及び河瀬左馬助、松田重太夫等、二千人を以て、之を守る。

砦は、山に據り、沼澤に臨む、要害、頗る堅固。

彦右衛門、東軍の來り迫るを聞くや、左馬助に、五百人を附して、外郭を守らしめ、又重太夫に、五百人を附して、稻葉山の砦を守らしむ。

幸長、五千餘人の兵を分つて、三隊となし、浅野左衛門、浅野右近をして、各、一千五百人を率ゐて、西南より、攻めしめ、自ら二千餘人を率ゐて、續き進む。

右近は、美濃の人、能く、地理を諳んず、瑞龍寺の東なる田間の小畦を、突進して、山に登り、高く馬標を掲げて、砦に迫る。

柏原内膳、砦を出て、突撃す。

左衛門、瑞龍寺の西なる瓜生口より、阪路を攀ちて進む、内膳の出づるを見て、横さまに、之れを衝く。

彦右衛門、亦、出で、戦ふ、兵鋒、頗る鋭し。

右近等、敗れて、退くこと一町餘。

幸長、見て、憤ほり、士卒を勵まし、鯨波を作つて進む。

右近等、亦、返り戦ふ。

彦右衛門兄弟、衆寡、敵せず、退いて、砦中に入り、ハタと、簀戸を閉ざす。

幸長の兵林水右衛門、攀ち登りて、簀戸の繩を斷ち、内より開きて、軍を導く。

幸長の兵、潮の如くに、侵し入る、直盛の兵、亦、續いて進む。

彦右衛門、自ら槍を提さげて、出で戦ひ、幸長の家臣杉澤

源之丞と戦うて死す。

其弟内膳、亦、奮闘して、亂軍の中に殞る。

左馬助、殘兵を率ゐて、砦を出で、山背より、岐阜城に走る。

瑞龍寺山の砦、乃ち陥る。

井伊直政、進んで、稻葉山の砦を攻め、一呼して、之れを奪ふ、重太夫、拒ぎ戦うて、敗れ死す。

兩砦の兵、死するもの、六百餘人、東軍の死者、此れに半ばす。

廿

輝政は、曾て岐阜城を領して、能く、其地理を知る、忽ち、自から領づく

『好し、左らば、水の手曲輪より、乗り入らん』

直に、軍を率ゐて、山下を迂回し、城の巽の方より進む。徑、窄くして、路險はし、樹木、聳えて、岩石、諸所に横はる。

士卒、皆、躊躇して、進まず。

『此處を越えずんば、争かて、城に入らるべきや、人に

後くるれば、武門の恥辱ぞ、疾く、進まずや』

輝政、憤然として、衆を叱咤し、自ら馬を下りて、先頭に進む。

建部内匠、池田玄蕃、若原左京等、我れ先きにと、競ひ進む。

城兵、險を恃みて、備へを怠る、輝政、大に喜び、直に、城中に突入して、天守閣を奪ふ。

天守閣は、信長の造れるもの、金を彫り、珠を鏤ばむ、

『我れ、一番乗の恩賞に、當城を受けん、火を掛くべからず、焼き拂ふべからず』

輝政、部下を戒めて、火を放たしめず。

田宮次郎右衛門、聞いて、此れを非とし、

『イヤ、天守は、是非に焼き給へ、之れを焼き拂はば、大垣の敵共は、力を落し、且、御當家一番乗の證據ともなり候べし、今にもあれ、追手の方に、火の手、揚がらば、一番乗の功は、福島の手、奪はれ候はん、疾く、火を放ち給へ』

言葉を盡くして、輝政、左思右考、心、未だ決せず。

忽ち、揚木戸門の方より、火の手、熾んに起る、

『ソレ御覽候へ』

次郎右衛門、頓足しつ、悔ゆ。

廿一

京極高知は、百曲口に向ふ。

秀信麾下の青年隊、逸りに逸りて防ぐ、勢ひ、極めて鋭し。既にして、黒烟、揚木戸門より起る。

青年隊、俄かに、心、憶して、皆、引き退く。

高知の兵、難なく、此處を破りて入る。

正則の兵、亦、二の丸を奪ふ。

諸門、皆、破る、東軍、盡く、本城に迫る。

秀信、本城に在り、只、うろくとするばかり、復た策の出づる所を知らず、勢、窮まつて、自殺せんとす。具康、駈け來つて、諫め止め、笠を塀上より、出だして、休戦を求む。

正則、之れを諾して、戦を止む。

秀信、自ら筆を把つて、將士の戦功あるものに、感状を與へ、小姓十四人を隨へて、城を出て、加納の圓徳寺に入り

て、髪を削る。

岐阜城、乃ち陥る。

廿二

諸將、皆、岐阜城に入る、將さに捷を江戸に報せんとし、正則を以て、先登第一とす。

輝政、聽かず、

『我れこそ、一番乘に候へ、我れの天守閣を、乗つ取りしは、揚木戸門の破れし前に在ること、誰人か、争ふべきや、此城、我が手にて、守護候べし』

と言へば、正則、大に怒る

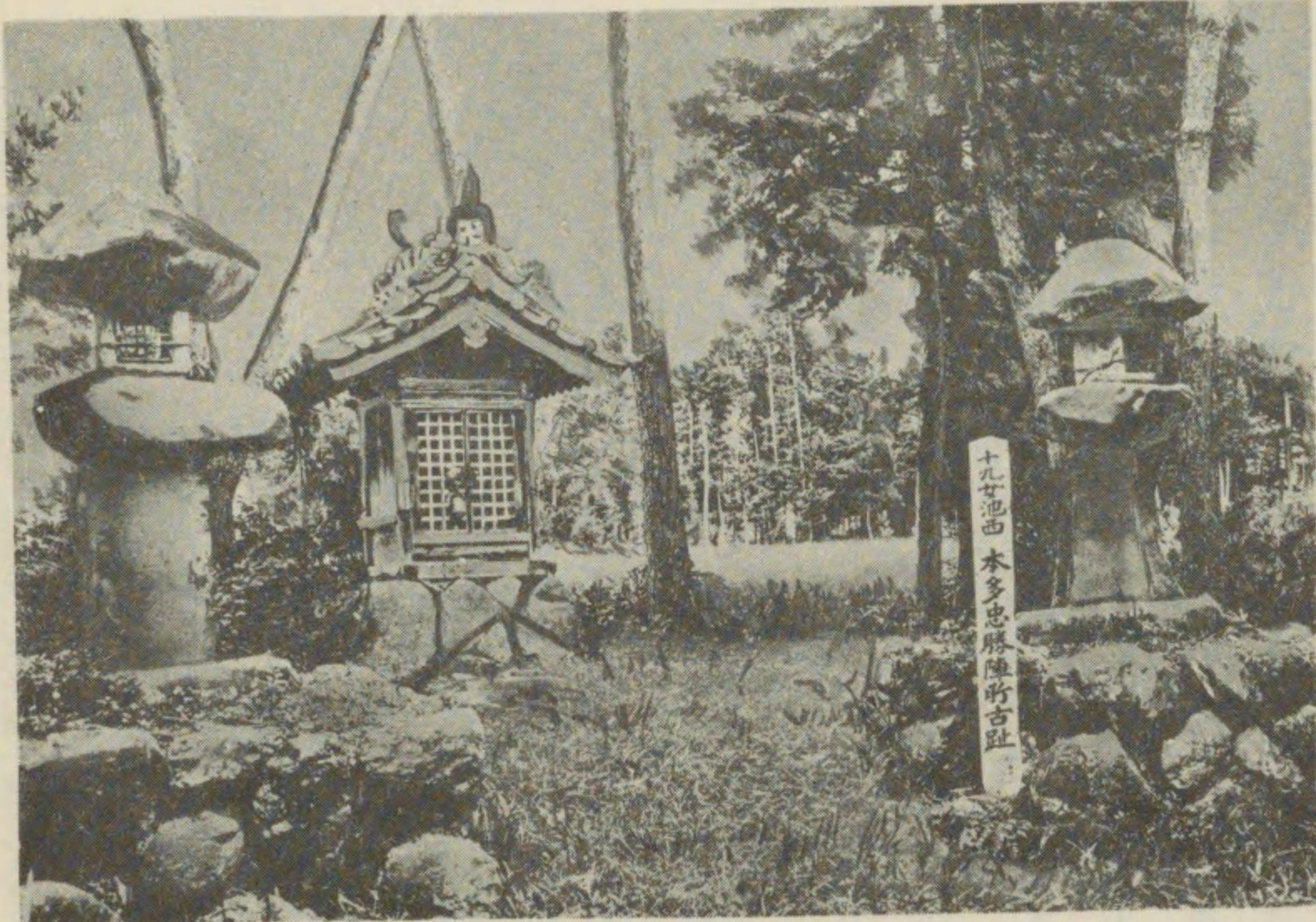
『扱てく、思ひも寄らざることかな、揚木戸門も、我が手にて破り、火の手も、我が手にて、揚げしこと、諸人の知る所、争かて、功を他人に譲り候べき』

と諍ひ、二人、辭色を、勵まして、罵り合ふ。

井伊直政、本多忠勝、間に立つて、宥むれども、尙、肯かず、加藤嘉明、徐かに、二人に向ひて、

『何事も、徳川殿の御爲めに候ぞ、互に、不承を怱へ給ふべし』

十九女池の西方
關原村大字關ヶ原に十九女池あり其西方は東軍の將本多忠勝の陣を置きし處



と諭す、

輝政は、

家康の女

婿なり、

『徳川

殿の御

爲めに、

怱へよ

とは、

差向き、

我れに

對して

の事に

候はん、

如何に

も、岐

早如き、

小城一

つ、攻め落したりとて、輝政の功名とするにも足り候はず、これは左衛門の所望に、任せ候べし』

潔よく、言ひ放てば、正則も、亦、心折れて、

『三左衛門尉の功名にせざる小城、殊には、闇將の秀信如きを、攻め落したりとて、左のみ手柄にもなり候はじ、

三左衛門尉の勝手に、任せ候はん』

と言ひ、争論、忽ち、此に止みぬ。

廿三

東軍の岐阜を攻むるや、藤堂高虎、黒田長政、田中吉政等、

大垣の援軍に備ふ。

援軍、更に、來らず、空しく、手を束ねて、岐阜の攻撃を、

傍觀す。

諸將、皆、切齒すれども、高虎、獨り、默然たり、偶々長

政來りて、高虎に向ひ、

『佐渡殿高虎今日の手に、合はざること、如何にも、残念至極に候はずや、左ればとて、今となつては、岐阜の

城へ、攻め懸かるも、味方の人數に、支へられて、進ま

れ候まじ、此儀、如何に思し給ふぞ』

と語り、無念の色、顔に形はる、高虎、膝を進めて、
『左ればなり、我れも、種々、工風を運らし候ひしが、
此に一策こそ候へ、大垣の後詰めなき上は、此方より、
進んで、合渡の渡を、押し渡り、直に進んで、赤坂の宿
を、堅め候はん、左すれば、岐阜の城攻めにも、優れる
功名手柄に候べし』

と説けば、長政、ハタと、横手を拍ちつ、

『そは、極めて、妙計なり、兵部大輔吉政にも、告げ知
らせ候へ、壯年の人を、出し抜かんも、本意にあらず、
左らば、某は、立ち還りて、備を出し候べし』

と述べ、喜び勇んで、陣に還り、老臣後藤基次を召して、
謀を談ず、基次は、老功の將なり、聲を潜めて、

『合渡の敵を、追ひ崩して、此川を越え候はんこと、一
段の儀とこそ存じ候へ、去りながら、今は、少し後れ候
とは申せ、君には、岐阜の城下へ、平押しに進みて、攻
め手に、加はり給へ、某は、御旗を預かりて、藤堂、田
中等と與に、合渡に向ひ候べし、城攻めにも、加はり、
川端の戦ひにも、加はり候はゞ、當度隨一の御動きにこ

そ候へ』

と説けば、長政、大に喜び、

『そは奇なり、妙なり、我れは、是れより、岐阜に、向
ひ候はん、汝は、手勢を以て、合渡に向ひ候へ』

と告げ、直ちに、部下を提さげ、揉みに揉んで、岐阜に、
馳せ付け、攻手の中に、加はりて、敵首を獲ること、數百
級。

廿四

高虎、急に、令を部下に傳へて、合渡に向ふ。

基次、乃ち部下八百餘騎を率ゐて、此れに續く。

吉政は、血氣壯んの將なり、

『何條、藤堂、黒田等に劣るべきや、疾く、進めよや』
部下を驅つて、川岸に押し寄す。

時に、雨、足りて、水、増さりぬ、長良川の激流、滔々と
して、岸を拍ち、巖を噛む。

遙かに、前岸を見渡せば、敵兵二千騎ばかり、堤を小楯に
取りて、陣を構ふ。

渡らんにも、渡るべからず、藤堂、黒田の諸軍、空しく、

と乞へば、僧、

『我等は、善惡共に、引導の役目なり、イデ、指南
致し候はん、此方へ、來給へかし』

自ら先きに立つて、上流の加賀島に向ふ、吉政、乃ち部下
二千五百人を率ゐて、此れに従ふ。

基次、望み見て、

『扱は、好き案内者を得たりと覺ゆるぞ、イザ、續けよ
者共』

と呼はり、亦、兵を率ゐて續く。

川岸を溯ること七八町、僧、忽ち、歩を停め、

『此處こそ、淺瀬に候へ、氣遣ひは候はず、イザ、渡り
給へ』

と教ゆ、吉政、聞くより、麾を把つて、打ち揮り、

『者共、續けや』

自ら眞先きに立つて、馬を乗り入る。

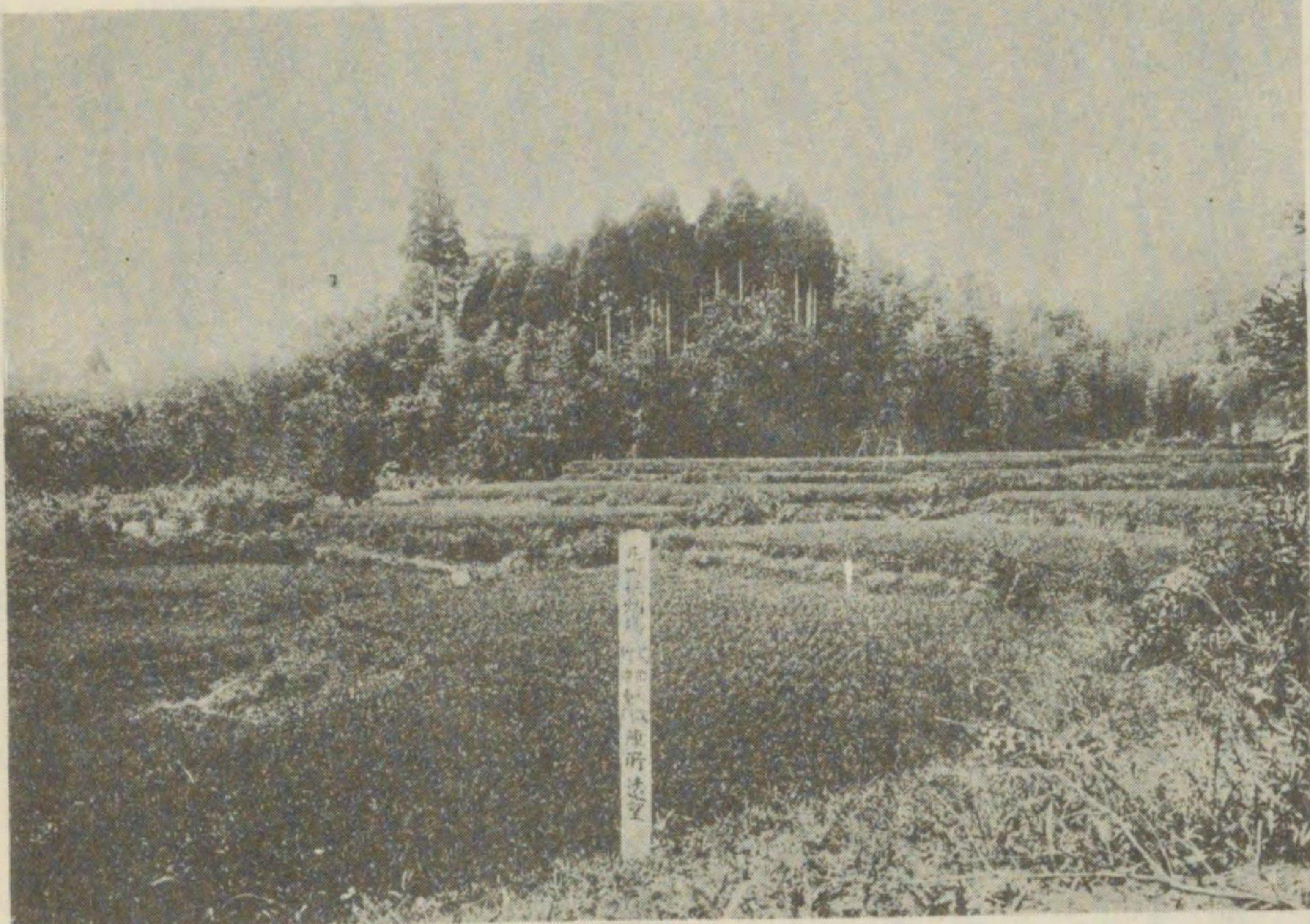
老臣宮城土佐、續いて、馬を乗り入るれば、坂本和泉も、
亦、駈け入りつ、

『主人の瀬踏みし給ふこそ、古今に稀なる例しなれ、

川面を望んで立つ。

丸山狼烟場

關原村關ヶ原の丸山狼烟場は東軍の將黒田長政竹中重門の陣
を置きし處



吉政、自
ら出て、
案内者を
索む、偶、
一僧に逢
うて、
『我れ
は、田
中兵部
大輔に
候ぞ、
願はく
は、我
れに、
淺瀬を
教へ候
へ』

續けや面々』

大音聲に呼ばれば、士卒、我れ後れじと、川に飛び入り、逆巻く流を切つて、進む。基次、扱てこそと、打ち領づき、黒田家の旗を、眞先きに、押し立て、進む。

廿五

高虎、諸將の上流に向ふを見て、唯一人、下流に向ふ、忽ち、川幅の廣き所に到りて、馬を停め、衆を顧みて、『此處こそ、渡る瀬なれ、急ぎ、渡り候へ』と令すれば、老臣服部作兵衛、深く訝かりつ、、『不知案内の川筋なるに、如何なれば、此所を渡る瀬なりと仰せ給ふぞ』

と問ふ、高虎、莞爾と笑みつ、、

『アレ見よ、此あたりに、馬の杳、數多あらずや、常々、渡る瀬なればこそ、駄馬の杳をも、脱ぎ捨つるなれ、疾くく、瀬踏みさせよ』

と呼はる、作兵衛、實にもと思ひ、

『如何にも、仰せの如くに候はん、左らば、瀬踏み致さ

せ候べし』

直に、水練の達人を擇びて、瀬踏みを命ず、其者、聞いて凌巡しつ、、

『こ、は名に負ふ木曾の大河に候なり、會て案内をも、存じ候はぬものを、争かて、迂濶に進まれ候べき』

と言へば、高虎、忽ち赫と怒り、

『汝、瀬踏みせずば、成敗すべきぞ』

刀の柄に、手を掛けつ、、叱咤す、其者、

『行くも、死し、留まるも、死し候よな、死は、一つにこそ候へ、左らば、瀬踏み致し候はん』

忽ち、ザンブと、川に飛び入り、進み進んで、向ふの岸に達す。

藤堂新七郎、同じく玄蕃、同じく仁右衛門、此體を見て、

『イザ渡れや』

齊しく、サツと、馬を乗り入る、高虎、麾を打ち揮りく、

『續けや〜』

勵聲叱咤すれば、部下二千八百餘人、皆、一齊に飛び入り、飛び入る。

上流、下流、一時に、流を亂して渡る、滔々たる士氣、水よりも鋭し。

廿六

石田三成の先鋒舞兵庫、高野越中等、來りて、合渡の渡を守る。

東軍の半ば渡るを待つて、熾んに、小銃を發す。

吉政の先鋒宮城土佐、坂本和泉は、老功の武者なり、

『まばらに、進めよ、重なりて、行くべからず、槍を揃へて、短兵、急に取り拉ぐは、此時ぞ、懸かれや、懸かれ』

殿しく、部下を指揮して、勇み進み、忽ち、前岸に跳り上り、跳り上りて、突進す。

戦端、此に開かれぬ。

三成の家臣杉江勘兵衛、藤田小右衛門、村山次郎兵衛の二人、槍を揮うて、堤の上に、驅け上り、

『言ひ甲斐なき味方の面々よな、イザ、我等に續いて、討死せよや』

と呼はりつ、、猛然として、奮進すれば、

『アレ討たすな、續けや者共』

舞兵庫、高野越中、士卒を鼓舞して、此れに續く。

吉政の部下、見て、益々奮ひ、鋒を揃へて、無二無三に、

突進し、見るく、敵數人を突き倒す。

杉江勘兵衛、大に怒り、三間の大身槍を、抜きく、奮

闘す、宛がら、猛虎の暴るゝが如し、忽ち、吉政の部下十

六人を、突き落す。

吉政の家臣平野六之丞、十文字の槍を捻つて、勘兵衛に、

突いて懸かる。

此方は、名に負ふ三勘兵衛杉江、渡邊、辻の一人、槍を揮ふこと、閃電の如し、六之丞、さしらひ兼ねて、次第々々に退く。

六之丞の従者、來つて、主人を、助けんとす、

『推參なり下郎』

勘兵衛、ハツタと、睨めつ、、槍を扱いて、従者を突き倒

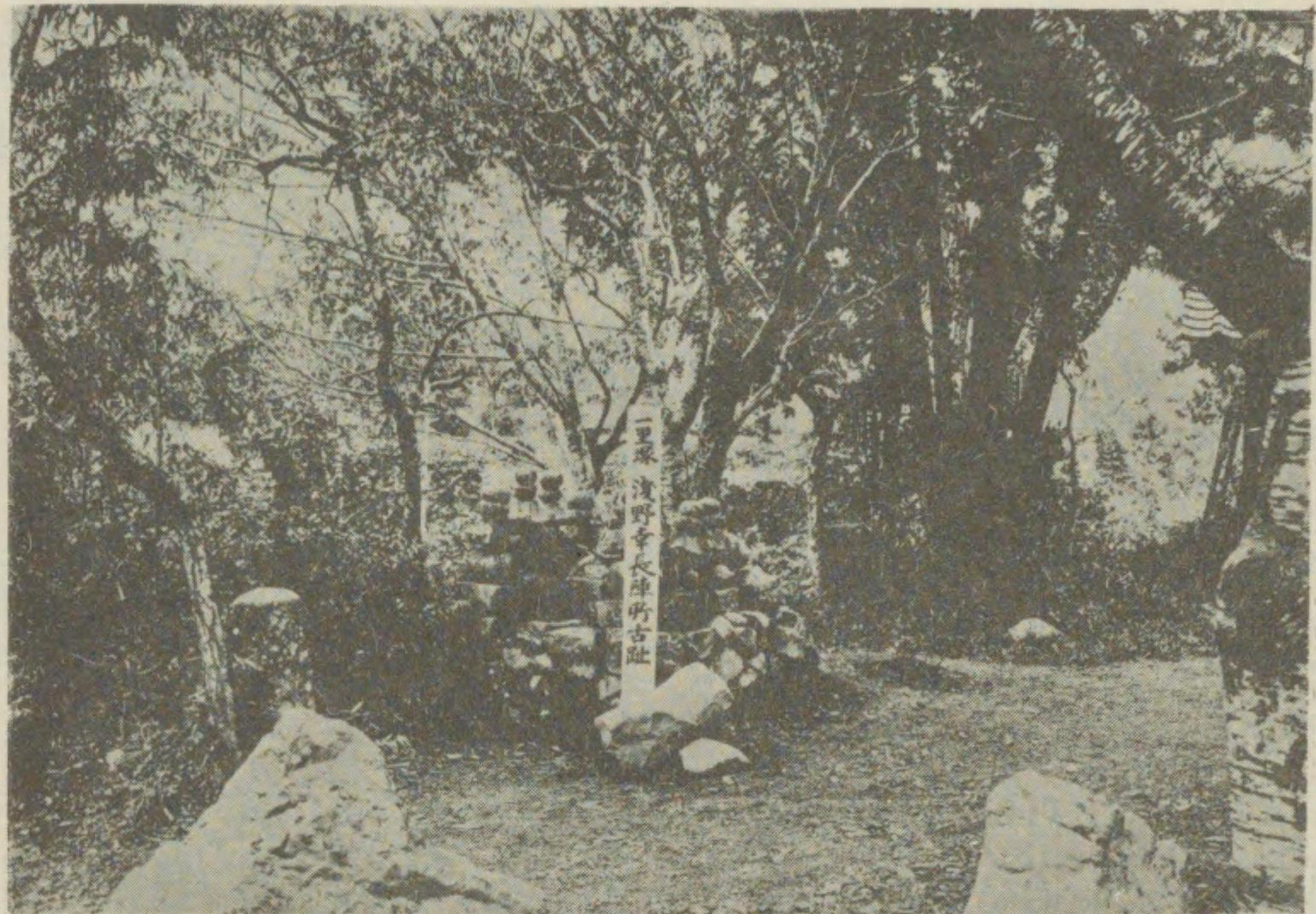
す。

六之丞、其隙を得たりと、勘兵衛を突き刺す、勘兵衛、屈

せず、槍を握つて、六之丞を、たぐり寄せ、刀を揮うて、

一里塚

關原村關ヶ原の一里塚は東軍の將淺野幸長の陣を置きし處



槍を揮うて、突いて、掛ければ、

其頭を研る。

『小積なり、勘兵衛』
是れも、亦、槍を合はす。

吉政の家臣辻勘兵衛、斯くと見るよ

勘兵衛と勘兵衛、人交ぜもせず、兩々、火花を散らして、奮ひ闘ふ、一は猛虎、一は飛龍、勝敗、容易に決せず。杉江の勘兵衛、數刻の戦に、身は傷つき、氣は疲る、槍先き、次第に鈍りて、ジリリくと、引き退く。

り、馬を飛ばして、驅け来る、是れも、

辻の勘兵衛、得たりと、勇を鼓すること一番、曳と一聲、槍を繰り出し、忽ち、相手の勘兵衛を、馬より、突き落す。吉政の家臣杉野長左衛門、西村太郎左衛門、月ヶ瀬近右衛門等、馬より、飛び下り、飛び下り、勢ひに乗じて、突いて懸かる。

亦、三勘兵衛の其一人、

石田勢、力、支へず、サツと、退くこと五六段。三成の家臣高宮新助、此有様を見て、大に怒り、死を決して、單騎、留まり戦ふ、村松勘之丞も、亦、驅け來りて、奮ひ闘ふ。

『勘兵衛、覺悟』

石田勢、復た振ふ。

サツと、

廿七

後藤基次、此體を見て、心憎くや、思ひけん、

『イデー、我等、此奴原を、逐ひ拂はん』

部下八百餘騎を提げて、猛然、驅け来る、勢ひ、疾風の野を捲くが如し。

『素破や、後藤又兵衛ぞ』

敵兵、大半月の指物を、見るより、意氣、俄かに沮む。

基次、勢ひに乗じて、敵を突破し、四方八方に、追ひ立て、追ひ廻はす。

高宮新助、怒つて、來り闘ふ、基次、サツと、刀を揮へば、

哀れ、新助、二つとなつて仆る。

『這は、口惜しやな』

村松勘之丞、槍を揮うて、基次の馬を、刺さんとす。

基次、突と、馬を反はしさま、眞甲を、打ち下せば、勘之丞、アツと叫んで、息絶えぬ。

基次、屹と、馬を立て直しつゝ、

『我れこそは、黒田甲斐守長政の家人後藤又兵衛基次なれ、軍は、斯くするものぞ』

サツと、敵中に、突入すれば、舞兵庫、高野越中等、今は、防ぎ戦はん勇氣もなく、皆、大垣を指して、退き走る。

時に、小西行長の部下、二千餘人、後詰として、大垣より、馳せ来る。

舞兵庫等の兵、走り來りて、頽れ懸ければ、行長の部下、亦、混雜す。

藤堂高虎の兵、機に乗じて、突進すれば、敵兵、驚き怖れて、皆、潰え走る。

高虎、勝に乗じて、益々追ひ迫り、首を取ること、二百餘級。

西軍、全く破る。

高虎、直に、進んで、赤坂に入り、即時に、使を馳せて、捷を江戸に報す。

廿八

これより先、東軍の岐阜を攻むるや、三成の將島猛勝、速かに、援軍を送らんことを勸む。

三成、唯、領づくのみ、

『岐阜は、城、堅くして、兵、多し、ヨモ、急に、落城することはあるまじ』

敢て、急に、兵を派せんともせず、猛勝、心、焦らつ、

『後れては、詮も候はず、左近、先づ、出發致し候べし』
直に、手勢を提さげて發す。
島津義弘、亦、起つ、

『左近の申すところ、道理ぞ、我等も、見繼ぎ候はん』
亦、兵を率ゐて、墨俣に向ふ。

三成、乃ち小西行長と與に、出で、澤渡村に抵れば、岐
阜の天に方りて、黒煙、高く、立ち騰る、

『扱ては、後れたるか、岐阜は、早、落城せしと覺ゆる
ぞ』

今更、悔恨すれども、甲斐あらず。

『此上は、合渡の渡を、防ぐこと、肝要ぞ』

家臣舞兵庫、高野越中をして、兵を率ゐて、出發せしむ。

三成、行長、尙、留まりて、澤渡に在り、義弘を、墨俣よ
り、招きて、軍議を凝らす。

俄頃にして、舞兵庫等、敗れ還る。

尋で、東軍、進んで、赤坂に向はんとするの報あり。

三成、聞いて、愕然たり、倉皇、兵を收めて、大垣に還ら
んとす、義弘、暫しと、押し留め、

直に、家臣を遣はして、兵を收めしむ。

廿九

東軍、合渡の敵を破りて、意氣、益々振ひ、更に、進んで、
墨俣の敵を、攘はんと欲す、後藤基次、聞いて、不可とし、

『墨俣の敵は、島津勢とこそ、承はり候へ、此方より、
攻むれば、堅く、防ぎ候はん、捨て置けば、頓て、引き
揚げ候べし、無益の軍をなして、味方を損し給ふべから
ず』

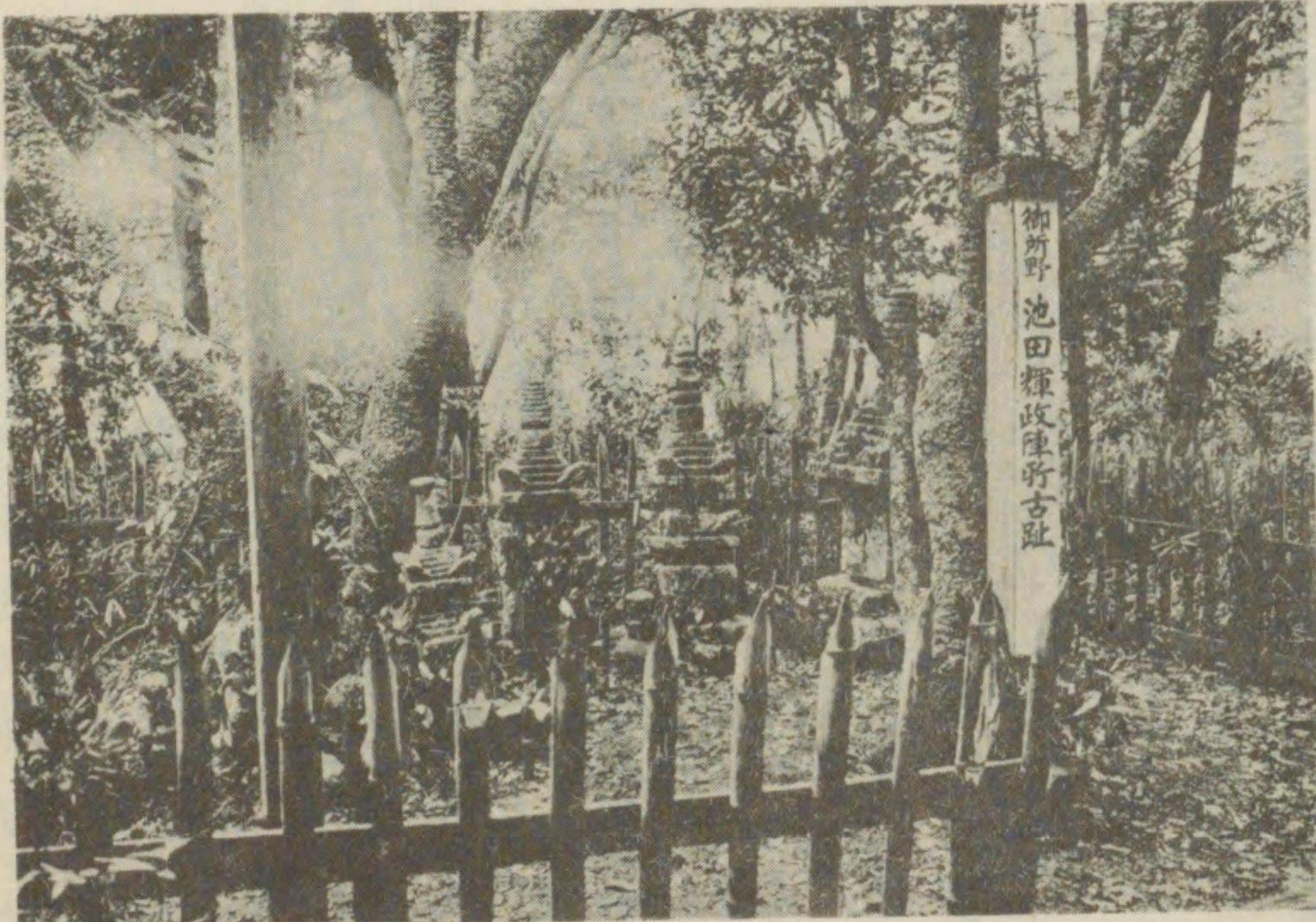
と説けば、諸將、實にもと、思ひて、止まる。

既にして、豊久、果して、兵を引いて還り、呂久川に抵り
て、叔父義弘と合し、暫く、堤上に留まりて、敵を待つ。

日暮るれども、敵、敢て、來らず、乃ち兵を率ゐて、大垣
に還る、三成、單騎、來り迎へ、

『兵庫頭殿、墨俣に向ひ給ひ、若しもの事あらば、一大
事と思ひ、扱てこそ、變らざる事とも、申し候ひしなれ、
是れも、皆、御身の上を案ずればこそ候、能くも、無
事に、引き揚げ給ひたれ』

言辭を盡くして、慰諭すれば、義弘、意、漸く釋けて、與



御所野
關ヶ原の附近なる垂井町字神田町の西數町に足利春王安王
の墓あり御所野と曰ふ東軍の將池田輝政の金谷河原の敵に
備へし處

『墨俣には、我が軍勢を殘し置き候ひぬ、先づ、之れを
引き揚げ候はん、暫し、御待ち候へ』
と述べ、自ら墨俣に、馳せ還らんとす、三成、首を打ち掉
りつ、、
『そは要らざることにこそ候へ、中務大輔島津豊久は追
つ付け、引き取り給ふべし、疾く、此處を、引き揚
げ候はん』
と告げ、直ちに、騎して、發せんとす。
義弘の臣新納彌太右衛門、川上久右衛門、其馬を控へて、
『兵庫頭義弘主従を見捨て、獨り、陣を拂ひ給はんは、
御卑怯に候はずや』
と止むれども、三成、尙、聽かずして、大垣に馳せ歸れば、
義弘、勃然として、忿り
『治部は、義を知らざる人かな、由なき人に、加擔せし
こそ、殘念なれ』
と言ひつ、跡見送りて、切齒すること、稍々久し、
『去りながら、今更、變心せんこと、武門の本意にあら
ず、此上は、疾く、墨俣の兵を、引き揚ぐべし』

に城中に
入る。

卅

岐阜陥お
り、合渡
破れ、赤
坂、亦、
敵の手中
に落つ、
三成、煩
悶、措く
能はず。
折柄、浮
田秀家、
一萬八千
餘人を率
ゐて、大
垣の城下

に着す。

三成、大に喜び、糧食、茶菓を贈りて、厚く犒^{わづら}ひ、推して、元帥となす、秀家、一策を進めて、

『敵は、合渡の戦に、人馬、皆、疲れ候はん、今夜、夜討ちを掛けて、追ひ崩し候べし』

と説く、三成、聞いて、小首を傾け、

『兎も角も、島津、小西に、謀り候はん』

と言へば、秀家、首を左右に、打ち掉りつ、

『イヤ〜、兵は、神速を貴ぶとこそ申し候へ、何條、

島津等に謀ることの候はん、我が一手にて、押し寄せ候

べし』

と言へども、三成、尙、従はず、

『あたりには、水田、多くして、夜討ちには、便宜悪しし、殊に、夜討ちは、小勢を以て、大軍を討つものこそ候へ、大軍を以て、小勢を討たんこと、何の夜討ちに

限り候べき、兎角は、諸軍の聚まるを待つて、勝負を、

一戦に決し候はん』

と述べて、之れを卻く、秀家、聞いて、憮然たり、

『味方の聚まるを待たば、敵も、亦、聚まり候はん、争かて、必勝を期せられ候べき、去りながら、若輩の某、強ひてとは申し候はず、唯、後日、後悔せらるゝことの候べし』

と言ひしばかり、復た敢て主張せず。

既にして、毛利秀元等、來りて、南宮山に陣し、大谷吉隆も、亦、來りて、藤下村に陣す。

西軍、總て十萬餘騎、將さに家康の來るを待つて、雌雄を、一舉に決せんと欲す。

卅一

家康、江戸に在り、岐阜、并に合渡の捷報を獲て、大に喜ぶ、

『左らば、我れ出馬せん』
軍を率ゐて進まんとす。

是より先き、秀忠は、兵三萬八千を率ゐ、八月二十四日を以て、宇都宮を發し、道を中山道に取つて進む、榊原康政、

先鋒たり、酒井家次、本多正信、大久保忠隣等、之れを助

家康、乃ち親から三萬二千を將ゐ、九月朔日を以て、江戸を發す、村串與左衛門、酒井作右衛門、金扇の馬標、葵章の旌旗を擎げて、馬前に在り。

近藤秀用、大久保忠教、槍手を率ゐ、渡邊守綱、伊奈昭綱等十五人、弓銃手を率ゆ。

下野守忠吉以下、三十餘將、此れに従ふ。

石川家成、家康の前に出で、

『今年は、西方の塞がりに候、方角を變へて進ませ給はんこそ、然るべけれ』

と曰せば、家康、莞爾として、笑みつ、

『西方、塞がらば、我れ、撃つて、開くべし』

と告げ、其儘、東海道より進む、凜たる威風、四邊を拂ふ、行く〜、神奈川、藤澤、小田原、三島、清見寺、島田、

中泉、白須賀、岡崎、熱田を過ぎ、十一日を以て、清洲に着す。

井伊直政、本多忠勝、赤阪より、來り迎ふ、家康、召し見て、其功を賞す。

中山道の軍、未だ來らず。

家康、清洲に留まること二日、十三日を以て、岐阜に着し、翌十四日、太田の渡を過ぐ。

瑞雲寺の僧、出で迎へて、大なる柿を献ず、家康、見て、ほゝえみ、

『大柿大垣我が手に入りしぞ、小性共、ソレ奪取り勝ちにせよ』

と言へば、左右、争ひ起ちて、柿を取る、臺、倒れて、柿、盡く落ち散る、僧、莞爾として、

『大柿大垣盡く、落ち候ひぬ』

と白す、家康、聞いて、快然たり、

『出陣の首途に、能くこそ、祝ひ呉れけれ、以後、柿寺と申し候へ』

と告げ、即座に、寺領十石を賜ふ。

進んで、呂久川に抵れば、池田、福島以下の諸將來り迎ふ、家康、やをら、輿中より出づ、

『此度の軍功、満足にこそ候へ、此上とも、頼み入り候ぞ』

と告げ、直ちに、諸將を率ゐて、赤阪に達し、營を岡山の

柴井

關原村關ヶ原の柴井は東軍の將藤堂高虎京極高知の陣を置く處



頂上に設けて、金扇の馬標、葵章旗七旒、白旗二十旒を、山上に建つ。大垣、此を距ること、五十餘町、城樓、市街、眼下に在り。

卅二

西軍の諸將、大垣

に在り、斥候、馳せ還りて、『岡山に、白旗、多く建ち並び候ひぬ、徳川殿の大軍、押し寄せ候ところ、覺ゆれ』と報ずれば、城中、聞いて、駭然たり、三成、忽ち、威丈高に、

『ナニ徳川の太軍、來れりとや、何條、左ることあるべきぞ、會津の押へには、一萬ばかりも、残しつらん、佐竹の押へにも、一萬を残すべし、江戸の留守居、諸城の守備にも、兵を残さば、跡は、ヨモ三萬には、過ぐべからず、争かて、自ら來つて、我が十萬の大軍に當るの勇氣あるべきや、若し、マコト徳川來りなば、それこそ、願ふ所の幸ひぞ、唯一撃ちに、撃ち拉ぎ呉れん、誰かある、徳川の旗色を、見覺え居るものあらば、疾く、馳せ行きて、見定め候へ』

と罵る、秀家の家臣進藤三右衛門は、元と、參河の武士なり、

『左らば、某、見て參り候はん』

直ちに、馬を驅つて、走り出づ、少焉ありて、喘ぎ、

馳せ還り、

『確かに、徳川殿に候なり、某、岡山近く、馳せ行きて、見定め候ひしに、七本の葵章の旗、金の扇の馬標、高く、掲げられて候、これぞ、紛れもなき内府公にこそ候なれ、但し、譜代の面々、半ばは見え候はず、定めて、中納言殿秀忠に隨ひて、中山道を責め上るにてぞ候はん、軍兵、凡、五萬人と見積りて候』

と報ずれば、憤然として、『扱ても、粗忽なる物見の仕様かな、若し、中納言に、人數を分けなば、益々小勢となるべき道理ならずや、何とて、此大軍の中に、押寄せ來らるべき、人を迷はすにも、程こそあれ』

と罵る、島勝猛も、亦、

『白旗は、金森父子―長近、可重―にこそ候へけれ、此頃、敵は、夜分、潛かに出て、晝間に、還り來り、大軍到着の状を、装ひ居り候なり、何の驚くことや候はん』と事もなげに、打ち消せども、諸將、尙、安んぜず、更に、斥候を派して、見せしむ、既にして、復た歸り來り、

『確かに、内府公に候なり、渡邊半藏守綱の旗指物は、能く見覺えて候、半藏は、内府公の持筒頭にて候へば、其來り居ること、正しく、内府公の來り居らる、證據にこそ候へ』

と報ずれば、諸將士、聞いて、益々危懼す。

三成、乃ち使者を、大阪に發して、輝元の出陣を促がす。使者、途中、東軍の爲めに、捕はれて、大阪に達せず、爾かも、三成等、之れを知らず。

卅三

今や、天下の形勢、兩分す。

美濃以東は、東軍に屬し、美濃以西は、西軍に應ず。

西軍の幹部は、大垣に在り、東軍の首腦は、岡山に在り。家康の岡山に來りてより、西軍、漸く動搖す、島勝猛、三成に向ひて、

『兎角、一戦して、我が威勢を、見せ候はずば、所詮、味方の動搖を鎮むること、叶ふまじく候、人數を出だして、敵を誘ひ、其容子を試み候はん』

と説けば、三成、

『ソレ好からん、疾くせよ』
と告げて、之れを許す、勝猛、乃ち蒲生郷舎さといふと與に、兵五百餘を率ゐて、池尻口より出で、兵を木戸、一色村の樹蔭に、伏せ置き、株瀬川を渡りて、中村一榮の陣前に到り、禾を刈りて、敵を誘ふ。刈田誘引は、敵を侮るの作法なり、一榮の兵、



關原村大字關ヶ原の平野は東軍の將脇坂安治の陣地なり

百餘を率ゐて、池尻口より出で、兵を木戸、一色村の樹蔭に、伏せ置き、株瀬川を渡りて、中村一榮の陣前に到り、禾を刈りて、敵を誘ふ。刈田誘引は、敵を侮るの作法なり、一榮の兵、

見て、怒ること甚だし、
『争かて、餘所に、見過ごすべきや』
一人、柵を踰えて、躍り出で、槍を揮うて、矢庭に、敵三人を、突き倒す。

西軍、見て、怒り、銃を縦ちて、之れを殫す。

一榮の兵、今は、堪へ得ず、柵を破りて、争ひ出づ、隊長野一色頼母、藪内匠も、亦、續いて出づ。

西軍、防ぎ戦ふこと少時、忽ち、佯はり敗れて退く、頼母の部下、進んで、之れを追ふ、隊伍、整然たり。

家康、戸板を、本營の屋上に載せて、其上に坐し、湯漬を喫しつゝ、戦を見る、是時、左右に向ひて、

『式部』一榮の兄一氏は、好き武士、多く持てり、あの作法、如何にも美事ぞ』

と褒む、既にして、敵兵、川を渡る、頼母の部下、亦、追うて、川を渡る、家康、見て、驚く、

『素破や、敗れん、疾く、呼び還せよ』
急に、命を軍使に傳ふ。

軍使、未だ達せず。

頼母の部下、進んで、笠縫の堤上に登る、頼母、驚いて、止めんとすれども、及ばず。

勝猛、郷舎の伏兵、俄かに起つて、銃を發つこと、急霰の如し。

銃止む、勇士二十騎、猛然、槍を揃へて、突進し來る。

頼母、川の此方に在り、

『今は、是れまでぞ、イザ、進んで、討死せん』

サツと、馬を乗り入る、内匠も、亦、續いて、川を渡る、

萩野虎之助、槍を揮うて、眞先に進む、兵士百餘人、亦、鯨波を發して、續いて進む。

勝猛の兵、又走る。

頼母の部下、益々追ひ迫り、隊伍、漸く亂れんとす、勝猛、郷舎、機を見て、急に、返り戦ふ。

頼母、内匠、亦、兵を指揮して、此れに當る、喊聲、雷の如し。

田中吉政、有馬豊氏の陣は、一榮の陣の左右に在り、此體を見て、蹶起しつゝ、

『素破や、中村勢は、敗北するぞ、軍令、嚴しとて、争

かて、見殺すことなるべきや、ソレ助けよ』

鯨波を作つて、株瀬川に、押し寄せ、流を渡りて、突進す。

浮田秀家の部將明石全登、本多但馬等、八百餘騎を率ゐて、勝猛等の後に備ふ、此に至りて、亦、來り戦ふ。

戦鬨、今や、益々急なり。

頼母の部下中村新助、河毛次郎兵衛等、三十八騎、奮闘して死し、諸兵、將さに潰え走らんとす、頼母、憤然として、

『今、引き取る程ならば、何とて、川を渡れるぞや、踏み留まりて、討死せよや』

と叱咤しつゝ、馬を八方に乗り廻はし、兵を勵まし、奮ひ闘ふ、忽ち、馬をい田の中に、乗り入れ、策てども策てども、更に、動かさず。

秀家の家臣淺香三左衛門、此體を見るより、

『好き敵かな』
サツと、馬を驅りて、來り迫る。

頼母、進退、自由ならず、終に、三左衛門の爲めに、討たる。

内匠、亦、奮闘して、傷つき、形勢、益々危し。

卅四

時に、井伊直政の陣中、人馬、俄かに動く、家康、見て、急に直政を召し、

「汝、何を爲さんとするぞ」

と問へば、直政、

「さればに候、味方、負色に見え候へば、某、驅け向ひて、一槍仕つらんとこそ、存じ候へ」

と答ふ、家康、首を掉りつゝ、

「イヤ〜、今日は、戦ふべき時にあらず、敵は、我れを誘うて、大垣を圍ませ、毛利、大谷の勢を以て、我が背後を絶たんとするの策略ぞ、汝一人、乗り出して、味方を、引き揚げ候へ」

と命ずれば、直政、ハツと答へ、唯一騎、馬を驅つて、馳せ出づ。

家康、又本多忠勝を召して、

「汝、手勢を押し出して、戦を分け候へ、疾くせよ」

と命ずれば、忠勝、咄嗟、千八百餘騎を提さげて、笠木に出で、一齊に、ドツと、鯨波を揚ぐ、

「扱は、本多ぞ、イザ、一戦して、引き取らん」

勝猛、將さに備を立て直さんとす。

折柄、直政、馬を驅つて、馳せ來り、三間の槍を揮うて、兩軍の中間を、乗り廻はし〜、聲を勵まして、

「引き取れや〜」

と呼ばれば、忠勝、突と兵を率ゐて、其間に、馳せ入る。勝猛、乃ち揚螺を吹きつゝ、

「引き取れや面々」

と呼はり、秀家の部下、先づ退き、勝猛等、亦、續いて退く。

直政、忠勝、亦、味方を纏めて還れば、家康、見て、

「我れに、兩翼あり、千里も、一飛びぞ、好く仕たり仕たり」

と告げて、深く、二人の功を賞す。

此役、西軍、首を獲ること、三百三十級、

「軍の手始め好きぞ」

三成、大に悦ぶ。

卅五

家康、最も野戦に長じ、夙に、海道第一の譽あり、敵を平野に誘ひて、之れを撃たんと欲す。

株瀬川の戦、終るや、家康、藤堂高虎を召して、

「明日は、敵を青野ヶ原に、誘き出だして、雌雄を、唯一戦に決すべし、其旨、計らひ候へ」

と命ずれば、高虎、ハタと、當惑しつゝ、

「斯かる大軍にては味方の進退さへ、心の儘には叶ひがたし、況して、城中に籠れる敵を計らんこと、容易には候はず」

と述べ、家康、聞いて、唯、笑ふのみ、復た何事をも言はず、

既にして、高虎、辭して出づ、家康、後を見送りつゝ、

「佐渡高虎は、老將にも似合はぬ策略の疎さよ」

と呟やき、俄かに、陣中に對して、

「明日は、大垣の押へに、池田、淺野等を、留め置き、其餘の諸勢を率ゐて、關ヶ原を、押し通り、途中、佐和山城を、攻め落して、大阪に到り、秀頼の近臣を、押し

籠めて、天下の太平を、計り候はん」

と觸れ示せば、諸將、皆、陣々に還りて、準備を整ふ。

西軍の間諜、馳せ還りて、之れを大垣に報ず。

卅六

家康、來つて、眼前に在り。

十四日の夜、三成諸將を大垣に聚めて、軍略を議す、秀家、膝を進めて、

「内府、既に出馬候からは、來つて、此城を攻むるも、不日の中に候はん、城兵、多く、守備、亦、全ければ、容易に落つべくも候はず、其中には、安藝黃門輝元も來り、大津、田邊に向へる諸將も、來り候はん、敵を城下に誘き寄せ、内外より、挟み撃たば、東軍を破らんこと、何の雜作も候はず、是ぞ、萬全の策にこそ候べけれ」

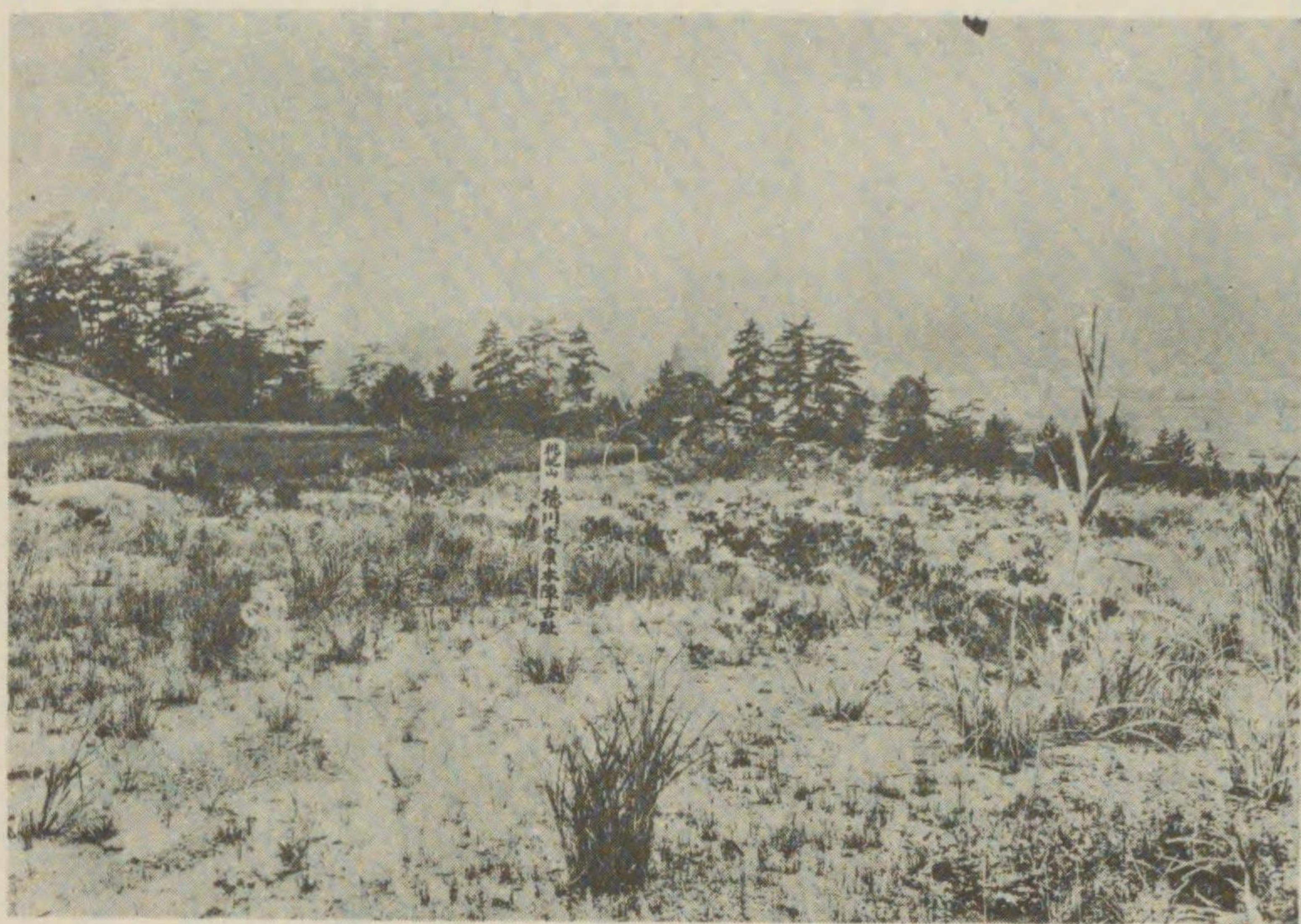
と説けば、大谷吉隆、長束正家、口を揃へて、

「此儀、最も然るべく候はん」

と贊す、三成、首を掉りて、聽かず、

桃配山

桃配山は關原村大字野上なる鶴籠山麓の小嶺なり徳川家康の岡山より本營を移して全軍を指揮せし處實に關ヶ原の東口に當る



へ候ものならずや、坐して、敵の來り攻むるを待たんに、天下の人心、皆、沮喪して、却つて、敵に從ひ候はん、小牧の役にも、故太閤、餘りに大事を取り過ぎ

給ひたればこそ、徳川の勝利となり候なれ、今又、何條、其過失を重ね候べきや、關ヶ原は、廣野にして、敵を待つに利あり、浮田黃門と、大谷刑部とは、關ヶ原に陣取りて、敵を待ち、毛利宰相「秀元」と、長束大藏とは、前面より、敵を誘き、某は、島津兵庫頭、小西攝津守と與に、菩提山の麓より、金生山「虚空藏山」に赴き、敵の背後に、廻り出で、前後より、挟み撃ち、其遁れ走るを追うて、呂久川に、押し落しなば、一舉して、大業を仕遂げ候はん、出戦の機、今日に在り、何とて、空しく籠城候べきや」
滔々、説き去り、説き來つて、眉軒がり、目昂がる、血氣の諸將、多く此議を贊す。
吉隆、正家等、固く不可とし、
「今日、平場の戦に於て、誰か内府に敵するもの、候はん、呉れくも、敵を城下に、誘き寄せんこそ、得策に候へ」
と説けども、三成、敢て、肯んぜず、
「我れこそ、大義に依つて、敵を討つものに候はずや、

何條、坐して、敵を待つ道理や候べき」

と言ひ、固く執つて、聽かず。

議、未だ決せず。

斯かる所へ、宮部兵部なるもの、岡山より、遁れ來る、是れぞ、三成の甘言に惑うて、内應を約せるもの、

「内通のこと、露顯に及ばんとせしより、漸く遁れ來り候ひぬ、内府公は、當城の押へに、池田、淺野の人數を、留め置き、佐和山城を、攻め落して、直ぐさま、大阪に、押し上らん結構に候なり」

と報ず、西軍の間諜、亦、來り報ずれば、三成、驚きつ、

「敵に背後を絶たれ候ては、一大事ぞ、疾く、關ヶ原に退いて、敵の來るを、待ち受け候はん」
と告ぐ、諸將、今は、異議なし、事乃ち決す。

卅七

島津義弘、其甥豊久を以て、

「東軍、遠く來りて、人馬、皆、疲れ候はん、今夜、夜討を仕掛け候は、必定、勝利に候べし、義弘、願はくは、先鋒を承はり候はん、若し、敗北しなば、其時、關

ヶ原に出づるも、晚くは候まじ」

と説かしむれば、島勝猛、末座より、進み出で、

「明日は、某、復た徳川の背中を見候べし、何とて、夜討に及び候べき」
と四邊を見廻はしつ、言ひ放つ、三成、亦、

「實に左近の申す通りぞ」

と告げて、之れを容れず、豊久、乃ち勝猛を見返りて、

「シテ徳川の背中を、見たることの候か」

と問へば、勝猛、傲然として、

「無論にこそ候へ、某、甲斐に仕へたる時、遠江にて、追ひたることの候なり」

と答ふ、豊久、聞いて、冷笑ひつ、

「今の徳川は、古の徳川には候はし、それを、一つに思ふは、杓子定規と申すものぞ」
と言ひ捨て、決然、袂を拂うて、起つて出づ。

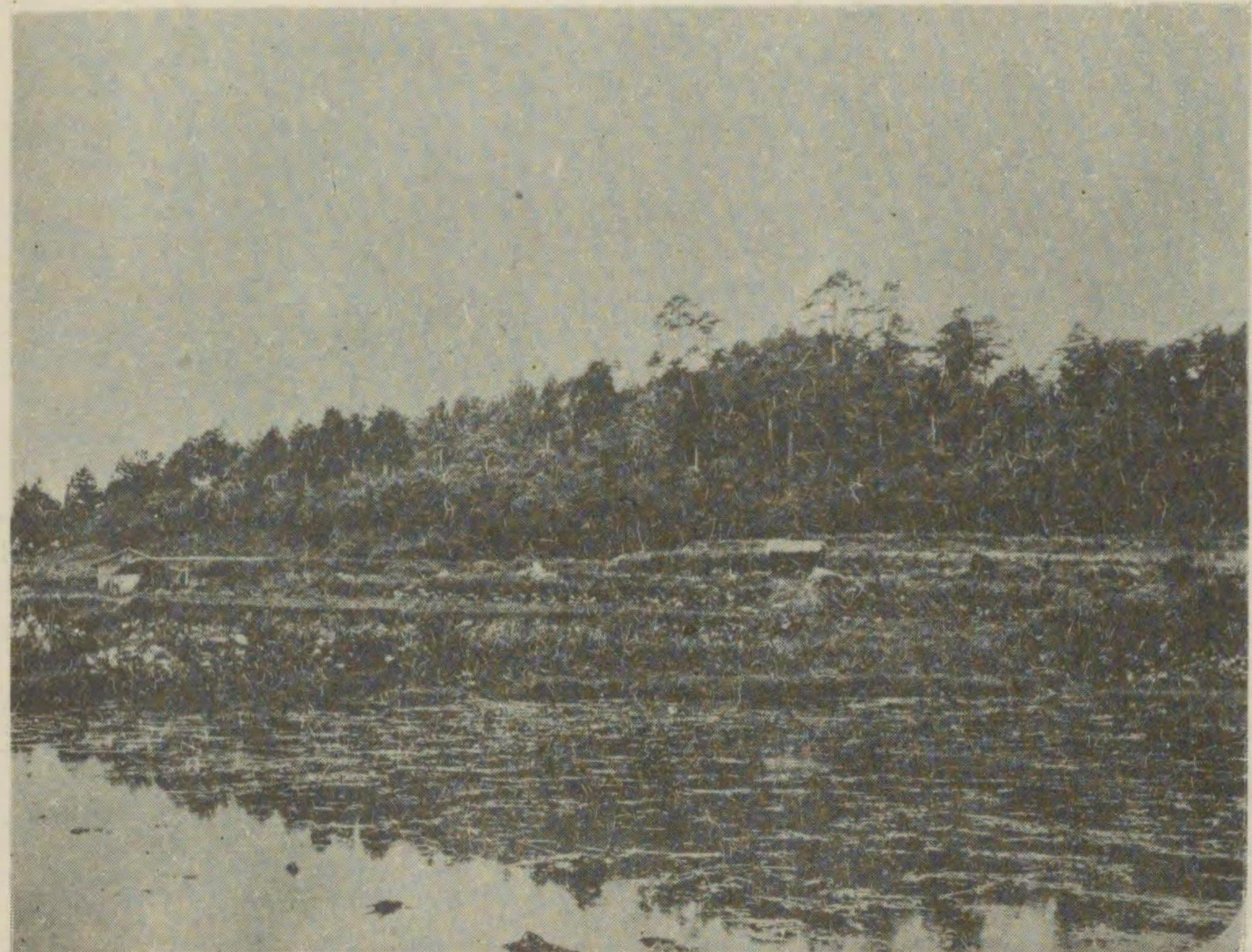
三成、乃ち其女婿福原長堯等に、大垣の留守を命じて、即夜、關ヶ原に向ふ。

第一番は、三成なり、第二番は、義弘なり、第三番は、行

長、第四番は、秀家なり。

笹尾山

笹尾山は關ヶ原驛の北端に在り西軍の將石田三成の陣營を置きたる處前面は關ヶ原を瞰下し兩軍の陣址歴々として指點すべし



時に、風起り、雨烈し、諸軍、皆、炬火を用ひず、唯、栗原山の篝火を、目當として進む、戊の刻、午後八時、に發して、

丑の下刻、三時、に關ヶ原に着す。

卅八

西軍、既に、大垣を出づ。

福島正則の斥候祖父江法齋、急ぎ、馳せ還りて、

「敵兵、大垣を出て候ひぬ」

と報ずれば、正則、覺えず、膝を乗り出だしつ、

「敵、出でしとや、如何にしてか知れる」

と問ふ、法齋、

「馬矢、多く落ち候ひぬ、某、握り試み候ひしに、尙、

暖味を帯びて候、察するに、敵、出で、より、未だ間も

候まじ」

と答ふれば、正則、蹶然として、起ちつ、

「さらば、出馬せん、汝、岡山に、馳せ行きて、内府に

報じ候へ、敵兵、大垣を退き候、正則、直に追ひ駈け候

はん、追つ付き次第、直に、攻撃致し候べし、疾く、

御旗を進め給へと申せ、早や往け」

と命ず、法齋、ハツと、答へて、馳せ出で、岡山に抵りて、

旨を報ず。

西尾光教、曾根の砦に在り、亦、使を岡山に遣はして、

「敵兵、大垣を出で、野口より、牧田路に向ひ候ひぬ」

と報ず、家康、幕中に在り、忽ち、ガバと、刎ね起きつ、

「扱ては、敵は、我が術中に落ちしぞ、我が勝利、疑ひ

なし、イザ立て」

と命じて、直に出陣の令を傳ふ。

家康、急ぎ、湯漬を喫し、甲冑を着し、出でて、胡牀に凭

る。

麾下の諸臣、其左右に列す、家康、徐ろに、長久手の戦事

を説き、

「汝等、長久手の合戦を知らずや、我れは、小勢なり、

敵は、秀吉なり、それすら、尙、安々と、勝利を得たる

にあらずや、今は、我が人数は多く、敵は、治部しきの

ものぞ、唯一戦に、撃ち滅ぼせや」

と告ぐ、衆、聞いて、皆、勇み立つ。

時に、雨歇み、雲散じて、破軍星の光輝、燦然たり。

既にして、雞聲喔々、山下の村より起る、

「ソレ出陣」

家康、命を下せば、全軍肅々、次を逐うて發す。

卅九

西軍、雨を衝いて、大垣を發す。

三成、單騎、馳せて、南宮山に抵り、毛利秀元に面して、

明日の戦事を約し、更に、松尾山に抵りて、小早川秀秋に

會ひ、進んで、笹尾に着し、東南に向ひて陣す、青竹を伐

つて、柵を前面に樹つること二重、以て東軍の騎突に備ふ。

三成の將島勝猛、蒲生郷舍等、左右に分れて、小池に陣し、

柵を樹て、銃を備ふ、總勢八千人。

義弘は、小池の神田に到り、亦、東南に向ひて、陣を敷く、

豊久、其先鋒たり、兵、凡三千人。

行長は、天満山の北に陣し、亦、東南に向ひて、備を設く、

兵二千人。

秀家は、其南に陣す、兵一萬八千餘人、隊を五段に分けて

備ふ。

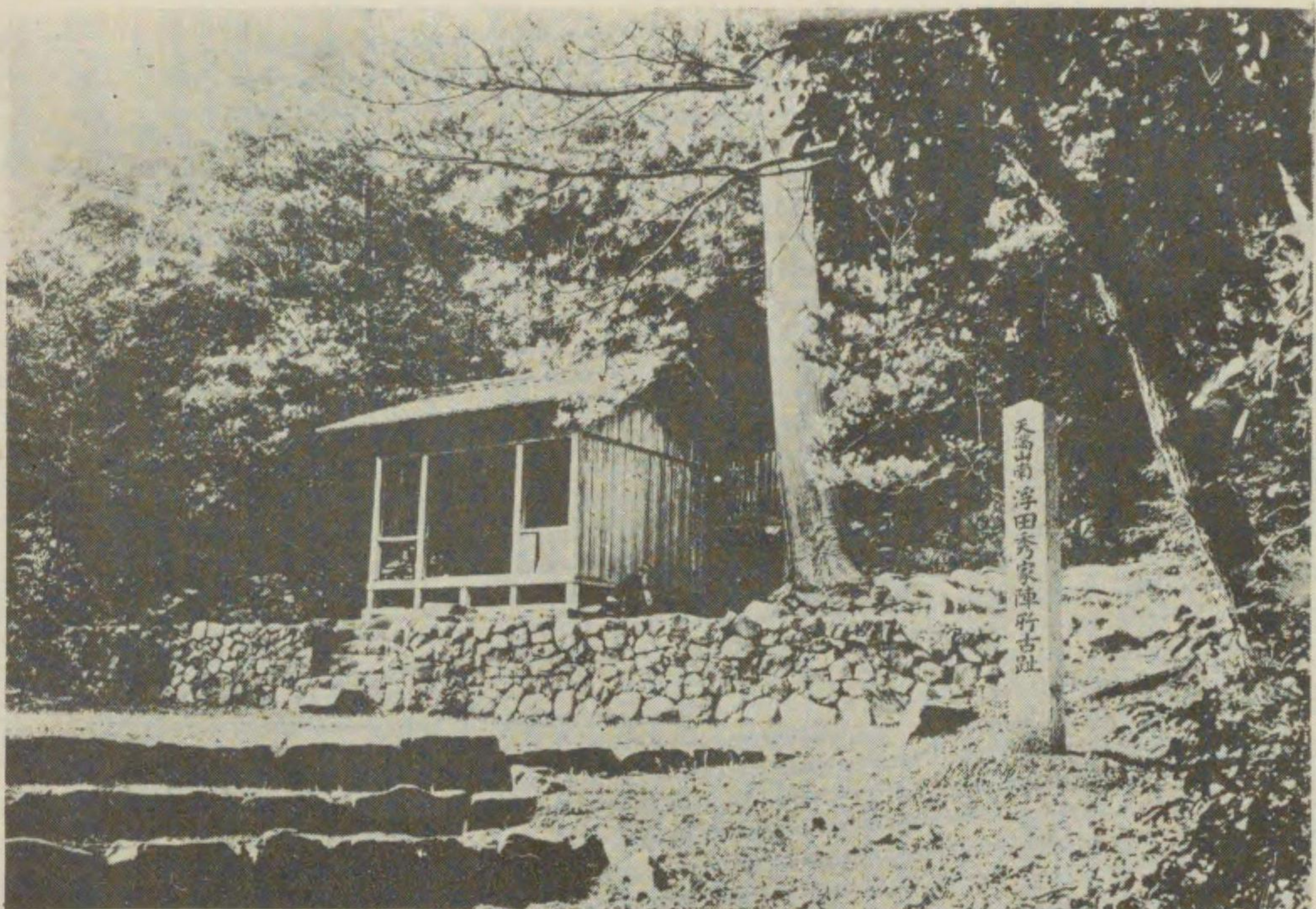
南宮山上には、毛利秀元、吉川廣家、毛利元政等在り、其

山下の栗原村には、長束正家、毛利勝永、長曾我部盛親、

安國寺惠瓊等在り、兵二萬八千餘、安濃津城を抜きて、來

天満山の南方

關原村大字松尾の北小關の南なる小丘を天満山と云ふ其南は西軍の將浮田秀秋の陣地なり



り會す。松尾山には、小早川秀秋、一萬五千を以て陣す、平岡重定、稻葉正成、松野主馬、石川佐左衛門等、先鋒たり。平野には、脇坂安治、小川祐忠、栃木元綱、赤座直保

あり、藤川臺には、大谷吉隆、戸田重政、平塚爲廣あり、兵、凡一萬餘人、吉隆、秀秋の心事を疑ひ、自ら精兵六百餘騎を擇びて、此れに備ふ。西軍、惣て十萬八千餘人、先づ、形勝の地を占めて、東軍を待つ。

四十

東軍の先鋒福島正則、先づ發し、關ヶ原驛の西なる大關に至り、關の明神の森を負うて、中山道の南に陣し、浮田秀家の陣と、相對す。加藤嘉明、筒井定次、田中吉政等、此れと並びて、中山道の北に列し、亦、秀家の陣と對す。

細川忠興、稻葉貞通、寺澤廣高、一柳直盛、戸川達安、浮田直盛等は、中山道の北なる中筋に、陣を列し、黒田長政、加藤貞泰、竹中重門は、其右に陣して、與に石田三成、島津義弘等に備ふ。

本多忠勝は、關ヶ原の左、十九女池つやがけの西に陣し、桑山直晴、其弟一直、猪子秋信、山名禪高等十餘將、三隊となつて、牧田道の東に、並列し、南宮山の兵、牧田道より、西襲し

來るに備ふ。

井伊直政は、松平忠吉と與に、茨原に陣し、織田有樂、其子長孝、舟越永景、佐久間安政、其弟勝之、古田重勝等四十餘將、四隊を作りて、順次整列す。

藤堂高虎、京極高知は、柴井に陣して、小早川秀秋、及び大谷吉隆等に備ふ。

池田輝政は、垂井驛の西南、御所野に陣し、淺野幸長は、一里塚に陣し、中村一榮、小出吉辰、生駒一正、蜂須賀至鎮、山内一豊、有馬豊氏等は、其右に列して、與に南宮山の敵に備ふ。

徳永壽昌、市橋長勝、横井伊織等は、金谷河原に陣して、遙に南宮山の兵を押ふ。

家康、牙旗を、桃配山ももばやしに建て、親しく、諸軍を指揮す、奥平信昌、牧野成康、大久保忠佐、高力清長、丹羽氏次、内藤信茂、其前衛たり、松平重勝、松平親正、水野忠高、中央に備へ、酒井重忠、永井直勝、青山直重、右に備へ、西尾吉次、阿部正次、酒井忠利、左に備ふ、本多康俊、本多重政、後備たり、酒井家次、本多忠政、安藤長信等、遊

撃たり。

惣計七萬五千餘人。

四十一

兩軍、野にも滿ち、山にも充つ、戰機、刻々に、迫り來る。時しも、九月十五日辰の刻二午前八時二宿霧、全く、霽れ去つて、日光、清く、輝やき渡る。

見渡せば、野は兵、山は旗、劍光、鎧色、キラ／＼と見く。家康、桃配山の本營に在りて、徐かに、敵の陣々を眺む。忽ち、一羽の青鷲、白旗の上を舞ひ、飛んで、敵陣の方に去る、伊奈昭綱、家康の前に跪きて、

『御吉例の鷲、見え候、今日の御一戰、必定、御勝利に候べし』

と白せば、家康、聞いて、莞爾として、ほゝゑむ。既にして、令を全軍に下し、

『敵を見れば、直ちに、撃てよ、唯一戰に、諸陣を、突き崩して、一人たりとも、餘すべからず』と勵ませば、諸軍、皆、大に振ふ。

家康、股肱の士を簡えらびて、目附となし、諸軍に配賦して、

其勇怯、勤惰を監す、伊丹兵庫、村越兵庫、河村助左衛門は、正則等の陣に到り、小坂助六、尼子善十郎、稻熊重左衛門、兼松又四郎は、忠興等の陣に到り、佐久間安政、同く源六、船越五郎右衛門は、直政等の陣に到り、奥平貞治は、松尾山に到りて、小早川秀秋を監す、秀秋、内應の約あり、故に、此の命あり。

折柄、黒田長政の家臣毛谷主水、主命を帯びて来る、家康、召し見て、

『敵の人数は、如何ばかりあるべきぞ』

と問へば、主水、ハツと、首を下げつゝ、

『さればに候、先づ、三萬ばかりも候はんか』

と答ふ、家康、聞いて、恠しみ、

『異なことを申すものかな、誰が目にも、十萬以上と見ゆるに』

と言へば、主水手を突きて、

『某は、唯、戦ふべき人数のみを申し候なり』

と白す、家康、ハタと、膝を拍ちつゝ、

『いしくも、申せしものかな』

欣然として、喜色を顯はす。

四十二

三成、笹尾に在りて、諸陣を瞰下す、東軍の深く敵地に侵入せるを見るや、忽ち、手を拍つて喜び、

『アレ見よ、敵は、南宮山を、後にして、進めるにあらずや、飛んで、火に入る夏の虫とは、此事ぞ、敵を誘き寄せて、南宮山の兵と、挟み撃たば、家康の首を見んこと、必定ぞ』

と傲語し、兵を按じて、敢て動かず。

何ぞ知らん、南宮山の吉川廣家、既に、業に、歎を家康に送り居たらんとは。

家康、近臣、及び使番を隨へて、桃配山を下り、十九女池の畔に抵りて、本多忠勝を召し、

『南宮山の敵は、如何あるべきぞ』

と問へば、忠勝、南宮山の方を、見上げつゝ、

『アノ通り、山上に控へ居るを見れば、別に、御氣遣ひも候まじ、若し、詐術ならば、山を下つて、陣取り候はん』

と白す、家康、聞いて、頷ぎきつゝ、

『實に、さこそあるべけれ』

名馬三國驪を與へて、遣り還へす。

家康、軍を進むること、半里ばかり、白旗十二旗を、關ヶ原の東端に樹て、進撃の令を、諸軍に傳ふ。

『素破や、徳川殿の出馬ぞ』

敵軍、見て、俄かに、動搖めく。

四十三

螺聲響き、鼓聲轟ろき、呐喊の聲、山岳に震ふ。

井伊直政、茨原に在り、

『今日の合戦は、我が手よりこそ、始むべけれ、若し、外様の面々より、始められなば、天下分目の合戦に、他家の武勇を、頼みたりと評されん、イデ、進發せん』

『今日は、御初陣に候、合戦の模様を見て、後學の爲めになし給ふべし』

と白し、直に忠吉を奉じて進み、福島正則の陣を躑えて、行かんとす。

正則の家臣可兒才藏、忽ち、

『今日の先陣は、我が主人左衛門大夫に候ぞ、開戦の前には、一人たりとも、通すこと、罷り成らず』

と誰何す、直政、何氣なく、

『仔細なし、下野守殿、井伊侍従、自から斥候するにて候ぞ』

と答ふれば、才藏、重ねて、

『斥候に候とや、さらば、多人数は、要り候まじ』

と呼はる、直政、時に、兵三百を率ゆ、

『さらば、人数を減らし候はん』

乃ち兵を老臣木俣右京に附し、十餘騎を以て、馳せて、西軍の先鋒を衝く。

戦鬪、愈々此に始まる。

四方の山々峰々、見物の老若、雲霞の如し。

四十四

福島正則、先陣に在り、直政の先づ戦を開けるを見て、憤然たり、

『扱ては、井伊に出し抜かれたるか、先陣、後陣もあら

天満山の北方
關原村大字松尾の北なる天満山の北は西軍の將小西行長の陣
を置きたる處



ばこそ、
無二無
三に、
敵を追
ひ立て
よ』
と令し、
八千五百
餘人を率
ゐ、浮田
秀家の大
軍を、目
蒐けて、
突進す。
秀家、平
生、正則
と相惡し
、斯く

と見るより、蹶然として起ち、
『イデ〜、福島と勝負を決せん』
二萬の大軍を帥ゐ、猛然として進む。
正則、驍勇、比なし、
『何の備が要るものぞ、唯、無體に、追ひ崩せよ』
塵を打ち揮り〜、衆を勵まし、唯一氣に、敵軍を突破せんとす。
秀家の家臣明石全登、長船紀伊等、士卒に令して、一齊に、銃を發つ、銃丸、飛んで、雨の如く、霰の如し。
正則の兵、楯を有せず、皆、冑を傾けて、突進す。
秀家、機を見ること敏し、
『素破や、敵は立ちすくめるぞ、ソレ駈け散らせよ』
奮然、聲を勵まして、指揮す。
士卒、何かは、振はざらん、全軍、潮の如くに殺到す。
正則の家臣尾關石見等、事ともせず、槍を揮うて、防ぎ戦ふ。
兩軍、或は進み、或は退き、勝敗、容易に決せず、呼聲、天地に震ふ。

秀家の麾下、銃を取つて、横合より撃つ、銃丸、虚發なし。
正則の陣、漸く亂る。

『敵は、早、浮足立ちしぞ、者共、懸かれや、懸かれ』
明石全登、士卒を勵まし〜、平押しに、押し寄す。

正則、馬を東西に驅つて、指揮すれども、衆寡、敵せず、士卒、先きを争うて潰ゆ。

秀家の兵、勢に乗じて、追撃すること、頗る急なり。
正則、覺えず、敗兵と與に、走ること數町。

既にして、正則、憤然、士卒を叱咤しつゝ、
『武士の、名を惜んで、討死するは、斯かる時ぞ、義に仗つて、命を捨てよ、何百年生きたればとて、何にかせん、進めや面々』

忽ち、馬首を回へして、敵陣に疾驅す。
斯くと見るより、尾關石見、森勘解由、大崎玄蕃、可兒才藏等、馬を驅つて、ドツと、駈け戻る。
長尾隼人、大橋茂右衛門、福島伯耆、同く丹波等、我れ後れじと、亦、引き返す。
士氣、復た振ふ、皆、一齊に、返り戦ひ、一呼、敵を突き

崩さんとす。
攻守の勢、忽ち變ず。
秀家、啗啞叱咤、衆を鼓舞して、奮ひ闘ふ。
兩々、相當りて、勝敗、尙、決せず。

四十五

戰爭、今や、諸所に起る。
藤堂高虎、京極高知の二隊は、進んで、大谷吉隆の陣を、銃撃す。
寺澤廣高、一柳直盛、戸川達安、浮田直盛の諸隊は、小西行長の陣を攻む。
田中吉政、生駒一正、加藤嘉明、金森長近、其子可重は、進んで、石田三成の陣を、攻撃す。
黒田長政、三成を獲んと欲し、精銳の士十五人を選びて、麾下に置く、
『我が麾下を離るまじきぞ、隊を離れて、戦は〜、大將の首を取るとも、手柄とはなさじ、唯、能く、我れに附いて、奮闘せよ』
關ヶ原の領主竹中重門を、嚮導とし、進んで、三成の側面

を撃つ。

銃聲、喊聲、山に響き、谷に應へて、殺氣、天地に滿つ。

四十六

生駒一正、田中吉政、金森長近父子等、進んで、三成の前隊に迫る。

島勝猛、蒲生郷舎、濠を鑿ち、柵を樹て、銃砲を發して、之れを防ぐ、東軍、逡巡、進む能はず、三成、急に、

『時分は、好きぞ、疾く、出て、戦ひ候へ』

と令すれば、勝猛、何をか、躊躇せん、直に、逞兵百人を率ゐて、柵外に突出す。

黒田長政、側面より、馳せ來り、馬を下り、槍を提げつゝ、敵陣を睨む。

勝猛、左手に、槍を取り、右手に、麾を採り、一呼して、突進せんと欲す。

長政の家臣菅政利、銃隊を率ゐて、小丘の上に在り、咄嗟に、命を傳ふ、

『ソレ撃て』

百銃、齊しく、發すれば、勝猛の部下、算を亂して倒る、

くと見るより、憤然、兵を勵まして、急に迫まる。

勝猛の從兵、倉皇、駈け來り、肩に掛けて、柵中に退く。

長政、銃を放ち、鬨を發して、挑み戦ふ。

巳の刻の頃ひ、三成、自ら前隊の陣に來りて、戦況を見る、

家臣高野越中、大山伯耆を召して、

『疾く往きて、關東勢の横合より、突き崩し候へ』

と命ずれば、越中等、兵二千人を率ゐて、馳せて、北山の麓に出づ。

家康、忽ち、之れを見て取り、使を本多忠勝の陣に遣はして、防禦を命ず、忠勝、乃ち織田有樂、古田重勝、船越永

景、佐久間安政等をして、迎へ戦はしむ。

有樂等、直ちに、軍を進めて、之れを撃破し、更に、進んで、三成の前隊に迫る。

勝猛、傷を包みて、戦を督す、是時、三成の前に、進み出で、

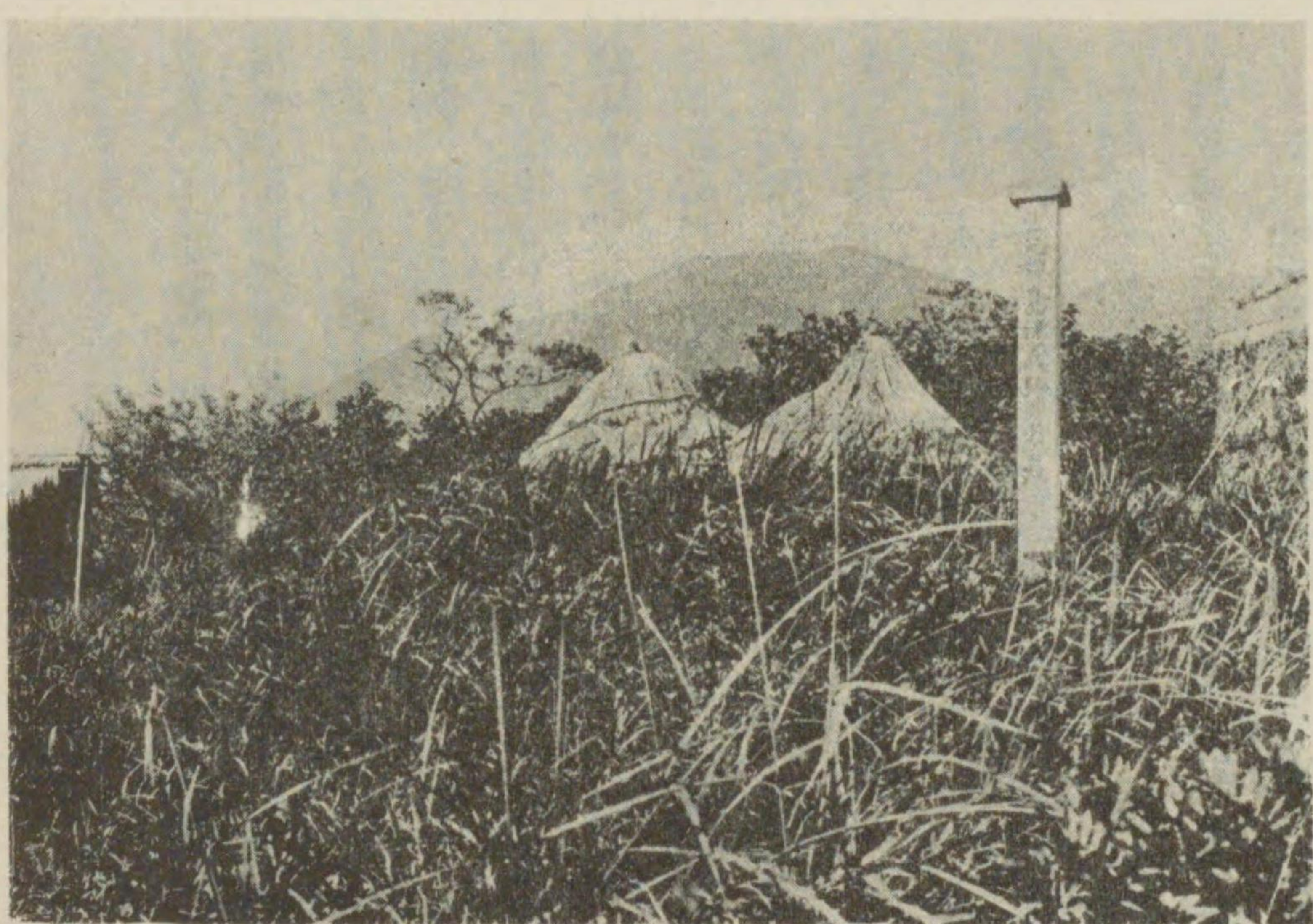
『アレ御覽候へ、敵の旗、數多、此方を指して、來り候、

大砲を以て、打ち攘ひ候はん』

と述べ、本營の大砲、五門を、曳き來りて、交々發射す、

小池神田

關原村小池の神田は西軍の將島津義弘の陣を置ける處此寫眞の遠山は伊吹山なり



勝猛、憤

然、馬を

驅つて、

進まんと

す、一丸、

忽ち、唸

りを發し

て、來つ

て、勝猛

に中る。

傷や重き、

場所や惡

しき、勝

猛、忽ち、

ドツと、

逆しまに、

地に落つ。

長政、斯

砲聲轟々、山谷に震ふ、東兵、皆、爲めに辟易す。

郷舎、蹶然として起つ、

『ソレ逐ひ候へ』

舞兵庫、北川平左衛門等と與に、柵を出でて、突撃す。

戦機、今や熟す。

三成、合圖の狼烟を揚げて、毛利秀元、小早川秀秋の進軍

を促がしつゝ、自ら麾下の兵を提げて、進撃し、雌雄を、

此一舉に、決せんと欲す。

田中吉政、見て奮ひ、其子長頼と與に、麾を揮りて、士卒

を勵まし、猛然として、敵軍を突撃す。

三成の兵、殊死して戦ふ、意氣猛烈、觸る所、皆、摧く。

吉政、敗れて退くこと、三町ばかり、一正の兵も、亦、退

く。

石河定政、獨り、取つて返し、大身槍を把つて、敵を叩き

伏せ、薙ぎ倒し、勇を振うて、血戦す。

吉政、之れを見て、返り戦ふ、一正も、亦、臂を振うて、

『勝負は、此一戦に在るべきぞ、倒るゝまで、戦ふべし』

と呼はりく、自ら馬首を回へして戦ふ、傷者も起ち、病

兵も起つ、士氣、亦、振ふ。
三成、眼前の敵を、突破し、更に、進んで、家康の麾下を、衝かんと欲す、奮撃突戦、人馬、皆、勇む。

四十七

戦鬪、今や、益々酣なり、人馬、東西に馳せ、旌旗、南北に動く、砂烟、砲烟、漠々として、天地を掩ふ。

西軍、動もすれば、東軍を驅逐せんとす。

午の上刻二午前十一時二家康、旗を進めて、陣を北國道二陣場野の中央床几場二に移す、三成、義弘の陣を距ること、僅かに五六町、敵軍の一舉一動、盡く、眸中に落つ、家康、機に應じ、變を察して、諸軍を指揮す。

交戦二時二今の四時間二午の刻に至るも、勝敗、尙、未だ決せず。

勝敗の決する所、一に、小早川秀秋の嚮背如何に在り。

三成、乃ち使を遣はして、促がす、秀秋、敢て動かさず、小西行長も、亦、促がす、秀秋、尙、動かさず。

四十八

松平忠吉、井伊直政の挺身、戦を開くや、細川忠興、稻葉

貞通、加藤貞泰等、亦、進んで、島津義弘の陣に迫る。

直政の家臣木俣土佐、鈴木重安、亦、各々銃卒を率ゐて、來り會す。

義弘、陣を小池の丘上に設け、胡牀に凭りて、泰然として、動かさず、士卒、亦、跪いて、命の下るを待つ。

義弘の意、本と、南宮山、松尾山の軍と與に、敵軍を挾撃せんと欲するに在り。

何事ぞ、秀元、山を下らず、秀秋も、亦、下らず、二人の心事、甚だ疑はしからんとは、

『我れ、出で、戦ひ、若し、二人の爲めに、後を突かれなば、千に一つも、勝利を得べからず、若かず、敵を近く引き寄せて、撃ち崩さんには』

家臣阿多盛淳、毛利元房を、三成の陣に遣はして、其意見を述べしむれば、三成、二使を、召し見て、

『毛利、小早川は、決して、異心あるべくも候はず、假有るとも、何程の事か候はん、我等、速かに、軍を進めて、敵を撃ち破らば、毛利等、皆、心を改めて、徳川を撃ち候べし、左のみ、御氣遣ひあるべからず』

と答へ、敢て、意に介せず。

既にして、三成の使者八十島助右衛門、義弘の前隊豊久の陣に來り、

『敵軍、既に迫り候ひぬ、三成、撃つて、出で候はん、

兵庫頭殿にも、疾く、御旗を進め給ふべし』

と述べたりて、馳せ還る。

義弘、尙、動かさず。

助右衛門、重ねて、來り促し、馬上より、使命を傳ふ。

豊久の家臣、怒つて、其無禮を叱す、助右衛門、慙ぢて、馳せ去る。

稍々ありて、三成、自ら來つて、固く請ふ、豊久、聽かず、

『今日の合戦に、争かて、前後左右を顧みるの邊候はん、

只、各々、存分に戦はんこそ、然るべけれ』

と答ふ、三成、強ゆる能はず、悄然として、引き還へす。

既にして、東軍、陣を鶴翼に張りて迫り、一舉、其前隊を、打ち崩さんと欲す。

義弘の家臣山田有榮、豊久と與に、前隊に在り、敢て、一丸を發せず、靜まり返へりて、敵を待つ。

東軍、突如として、眼前に顯はれ來る、有榮、一聲高く、

『ソレ撃て』

と呼ばれば、待ち設けたる銃手、一齊に、火蓋を切る。

指宿忠政、烟中より、突進し、矢庭に、前に進める敵を、斬つて落す。

『掛かれや、掛れ』

有榮、亦、奮進して、兵を勵ます、薩兵慄慄、敵中を突破して、進むこと三四町。

義弘は、西軍中の雄鎮なり、東軍、一撃して、粉碎せんと欲し、勇を奮うて戦ふ、兵鋒、甚だ鋭し。

豊久諸銃を連發し、其怯むを待つて、槍を揮うて、突撃す、敵を退くること一町餘、進んで、力を有榮に戮はさんとす。

忠興等、屈せず、交る、來り戦ふ、甲退けば、乙代り、乙去れば、丙、亦、來る。

豊久、連戦連撃、呼吸を繼ぐべき隙さへあらず。

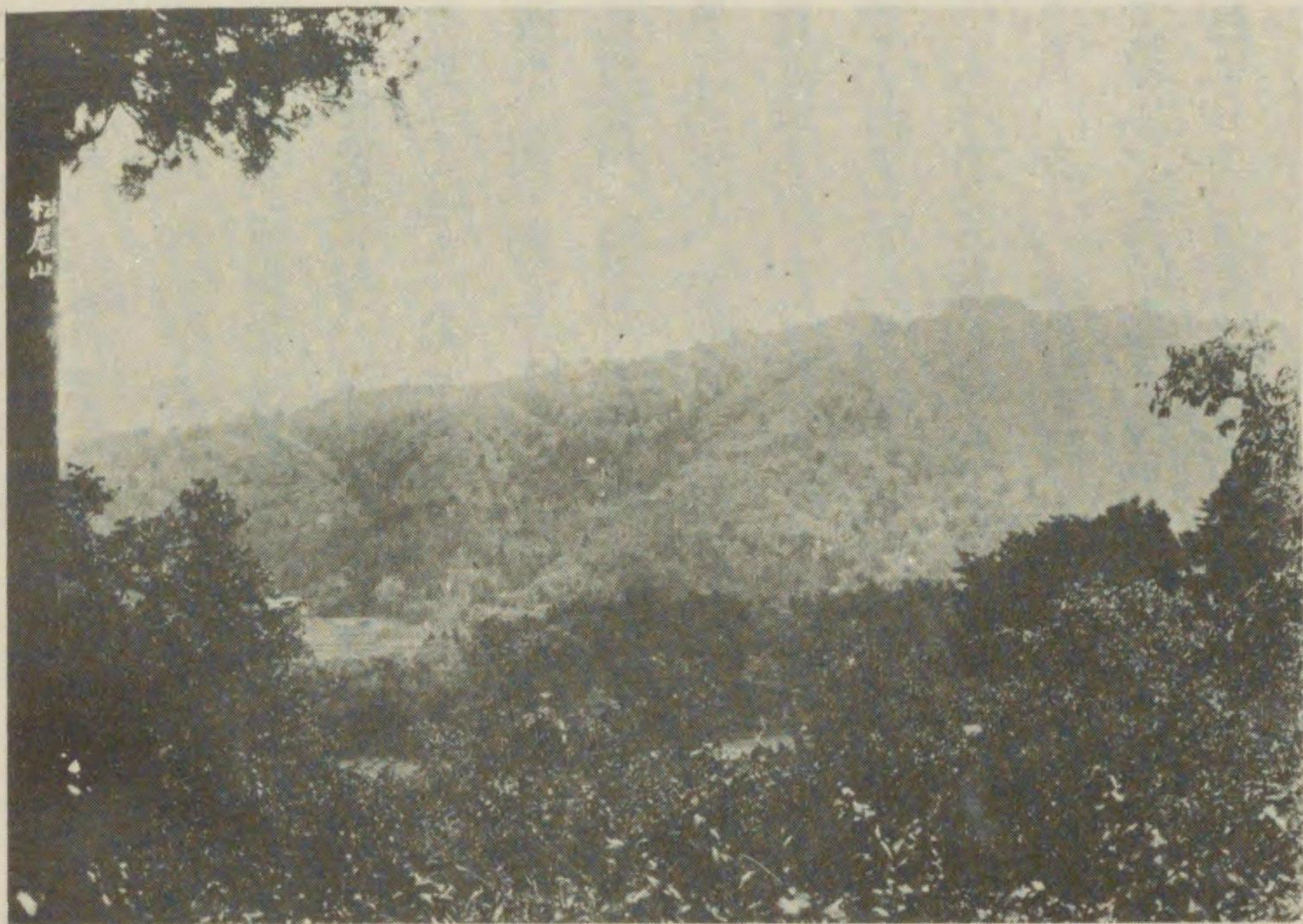
是時、義弘、やをら、胡牀を立つ、鎧を取つて、肩に投げ掛け、麾下を提げて、猛然として、撃つて出づ。

『素破や、島津ぞ』

東軍、銃を放ち、砲を發し、大鼓を鳴らして、競ひ迫る。

松尾山

松尾山は關原村大字松尾に在り小早川秀秋西軍に従うて此處に來り陣し暫く形勢を觀望せし處



兩軍の旗幟、益々振ふ。彼れ進み、我れ迫る、相距ること、僅かに數間。義弘の家臣久保之盛、自ら名乗りて、突進す、兩軍、白刃を揮うて、接戦し、劍戟、

相觸れて、憂々聲あり。

激戦數刻、人倒れ、馬斃る、鮮血、流れて、泉の如し。

四十九

東將寺澤廣高、一柳直盛、戸川達安、浮田直盛の、小西行長に迫るや、行長、兵を三段に分ちて防ぐ、木戸作左衛門、小西主殿、先陣に在り、安達藤太、小西清左衛門、第二陣に在り、行長、自ら第三陣を率ゐて、最後に控ゆ。

東軍の諸隊、競ひ進み、來りて、寺谷川の岸に現はる、作左衛門等、一齊に、銃を發して、之れを撃つ。

東軍、敢て怯まず、流を亂りて、迫り來る。

兩軍の鋒、既に接す、追ひつ、返しつ、火水となりて、挑み戦ふ。

東軍の勢、頗る銳し、行長の先鋒、動もすれば、退かんとす。

行長、此體を、望み見て、憤然たり、

『今日は、天下分目の合戦ぞ、死すとも、此處を引くまじきぞ』

急ぎ、令を第二陣に傳ふれば、安達藤太、小西清左衛門、

乃ち進んで、敵に當る。

戦鬪、刻一刻より烈し。

五十

毛利秀元、南宮山に在り、其先鋒吉川廣家、深く宗家の傾覆せんことを憂ひ、密かに、黒田長政に頼りて、款を家康に送る。

小早川秀秋、松尾山に在り、心、頗る三成に平かならず、

亦、藤堂高虎の勧めに依りて、東軍に應じ、機を見て、大

谷吉隆を、下り撃たんことを約す。

脇坂安治、小川祐忠、赤座直保、栃木元綱の四將、平野に

陣す、亦、高虎の勧めに従ひて、東軍に應ず。

西軍挾撃の策、乃ち破る、然かも、三成、未だ之れを悟らず。

既にして、戦鬪、各所に起る、秀元等、自若として、山を下らず。

安國寺惠瓊、南宮山に抵りて、秀元に面し、

『合戦、既に始まり候ひぬ、疾く、山を下り、合圖の狼烟を待つて、進撃し給ふべし』

と説けば、秀元、去り氣なく、

『我れは、若輩の身なり、軍事は、總て藏人、廣家に任し候ひぬ、直々、藏人に打合せ候へ』

と答ふ、惠瓊、眉を蹙めつ、

『君は、故太閤の御養子に候はずや、豊臣家危急存亡の今日、萬事を、藏人殿に任せて、其爲す儘に、捨て置き給ひなば、恐らく、不忠不義の譏を招き給はん、篤と、

思案し給ふべし』

と説けば、秀元、辭、塞がりて、

『左らば、東軍の後を襲ひ候べし』

と答ふ、惠瓊、聞いて、大に喜び、直に、陣所に還る。

秀元、乃ち使を廣家の陣に送りて、

『關東の將士は、皆、人質を棄て候はずや、我れも、福原左近、關東に質たりしを棄て、敵の背後を襲ひ候はん、疾く、用意致し候へ』

と促せども、廣家、敢て従はず。

既にして、戦鬪、漸く酣はなり。

忽ち、三發の烽火、高く揚がる、是れぞ、三成の進撃を促

がせるもの。

左れども、廣家、尙、敢て動かず。

長東正家、毛利勝永、長曾我部盛親、安國寺惠瓊等、南宮山下に在り、池田輝政、淺野幸長等と、銃を發して戦ふ、烽火の起るを見て、急に、軍を進めんと欲し、使を馳せて、秀元の出馬を促がす。

秀元、此れに應ぜんと欲す。

廣家、甲を釋きて、坐して、動かず 秀元、復た奈何ともすべからず、

『先づ、兵糧をつかひて、進發せん』

躊躇して、時を移す、世に之れを『宰相殿の穀辨當』と稱して、傳笑す。

既にして、秀元、使を正家、惠瓊の二人に送りて、

『我れ、進軍せんと欲するも、先鋒吉川藏人、宍戸備前等、兵を進め候はず、是非こそ候はね』

と報すれば、二人、深く狐疑し、躊躇して、軍を進めず。

五十一

大谷吉隆、眼は盲すれども、心は盲せず、早くも、秀秋の

心事を、觀破し、屢々使を遣はして、出馬を促がす。

安國寺惠瓊も、促がし、三成、行長も、亦、促がす。

秀秋、唯、成程々と答ふるのみ、敢て、山を下らず。

家康の家臣奥平貞治、松尾山に在りて、秀秋の舉止を監す、關ヶ原の形勢を見て、急に、吉隆の陣を撃たんことを促がす。

秀秋、亦、動かず。

黒田長政の家臣大久保猪之助、亦、來つて、秀秋の陣に在り、其先鋒平岡重定の前に到り、ムツと、草摺を攫みつ、

『合戦は、疾く、始まり候はずや、何故、裏切の下知を傳へ給はざる、若し、甲斐守長政を欺き給は、弓矢八幡、刺し違へて、死し申すべし』

劍を按じて、屹と、詰り掛かる。

重定、敢て驚かず、

『進撃の鹽合は、我等に任し給へ、御氣遣ひあるべからず』

と答へ、瞬きもせて、ヂツと、山下の戦況を、觀望す。

秀秋の心事は、敵も疑ひ、味方も疑ふ、東軍、西軍、與に、

そ、存ぜられ候へ、努め、御油斷あるべからず』

と言へば、吉隆、打ち領づきつ、

『我れも、左こそと察し、屢々催促すれども、更に、動く氣色も候はず、若し愈々變心候は、貴殿と、武州』

重定』と、我等とは、餘の敵を、打捨て、秀秋を打取り候はん、實に、憎きは、秀秋にこそ候なれ』

と答へ、憤激の色、顔に露はる。

家康の家臣久保島彌兵衛、馳せて、家康の本營に來り、

『金吾殿には、未だに裏切の模様、見え候はず、毛利宰相殿も、心元なく候なり』

と白す、二人、若し、内應せずんば、東軍の勝利、得て望むべからず。

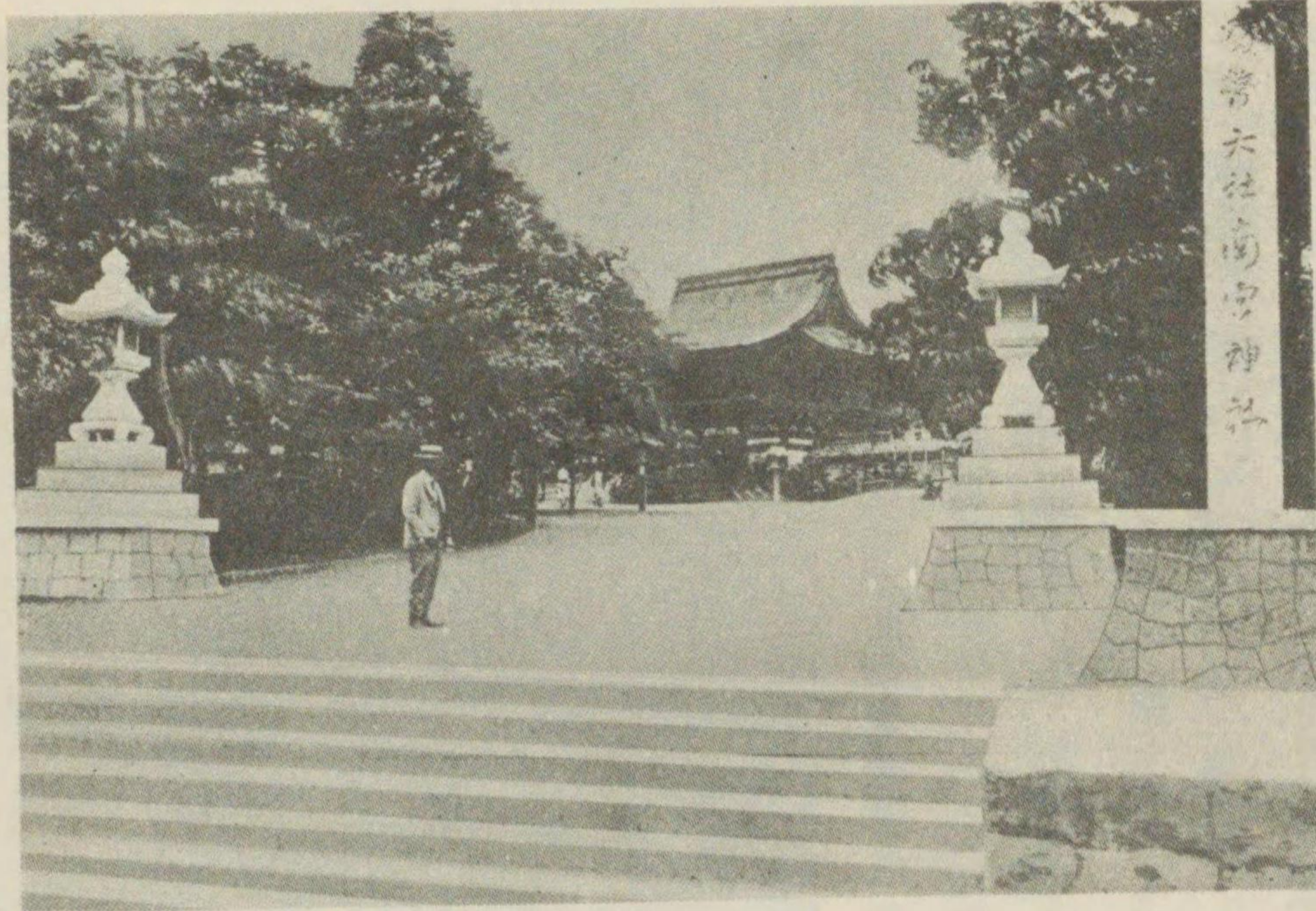
家康、危きに臨めば、指を嚙むの癖あり、此時、頻りに、指を嚙みつ、

『扱ては、小悴奴に、計られしか』
無念々々と叫ぶこと再三、稍々ありて、キツと、彌兵衛に向ひ、

『兎も角も、秀秋の陣に向ひて、誘ひの鐵砲を、打ち見

南宮山

南宮山は不破郡宮代村に在り南宮神社は金山彦命を祀る國中の一の宮にして今は官幣中社たり關ヶ原の役毛利秀元の陣せし處



心も心ならず。

平塚爲廣、

戸田重政と與に、吉隆と並びて、

藤川の臺に陣す、此時、

吉隆の前に抵りて、

『金吾殿』

秀秋』の舉動、

何とも、其意を得

候はず、確かに、

一心とこ

よ』

と告げ、命じて、葦毛の馬を賜ふ。
彌兵衛、乃ち銃隊を率ゐて、松尾山に向ひ、秀秋の陣を、目蒐けて、銃を發すること數次。

五十二

秀秋、山下の銃聲を聞いて、ムックと起つ、

『今は、一刻も、猶豫すべからず、イザヤ、刑部||吉隆||の陣に、撃ち掛かれ』

と令し、直に、村上右兵衛を馳せて、進撃の令を、先鋒に傳ふ。

松野主馬、亦、先鋒に在り、此命を聞きて、肯んぜず、

『此期に及んで、關東に屬くは、正しく、楯裏の返忠と申すものなれ、武門の恥辱、此上や候べき、西軍を撃たんと思さば、撃ち給へ、某は、飽くまでも、東軍と戦つて、討死致し候べし』

苦り切つて、言ひ放つ、右兵衛、徐かに、

『臣として、主命に肯くの法や候べき、特に、主公の内應は、今日に始まりしことには候はず、疾くく、兵を

進め候へ』

と諭せば、主馬、今は、是非に及ばず、兵を率ゐて、澁々、山を下る、左れども、武士の意氣地、敢て西軍を撃つを屑しとせず、故らに、避けて、戰鬪に加はらず||役、終りて後、髪を削りて、僧となり、京師の黒田に住す||

松尾山の旗幟、俄かに、動き始む。

先鋒平岡重定、稻葉正成の兩人、各々一隊の兵を提さげ、ドツと、鯨波を揚げて、西北に突下す、勢、轉丸の如し。

吉隆の家臣湯淺五助、急ぎ、吉隆に向ひて、

『君、御用意あらせ候へ、筑前勢、押し寄せ候ひぬ』

と白せば、吉隆、敢て驚かず、

『扱ては、愈々裏切りせしか、關東の輩は、左して、憎しとも思はず、只、憎きは、秀秋にこそあれ』

と言ひつゝ、急に、圓陣を作つて、敵の迫るを待つ。

小早川勢、見るく、既に近づく、六百の銃手、一齊に、

丸を放てば、諸兵、烟氣を冒して、突進し來る。

吉隆、轎中に坐し、四方を放ちて、士卒を指揮す、五助、又、

『敵の先陣、既に近づき候ひぬ』

と白せば、吉隆、憤然として、

『イザく、金吾奴を、討ち取つて、我が恨みを霽すべし、先手の敵を、追ひ崩して、無二無三に、麾下へ突き入れよ、ソレ撃て』

と令す、銃手、皆、折り敷きて、丸を放てば、彈丸、飛ん

奥平貞治の墓

奥平貞治の墓は關ヶ原の隣邑玉村に在り關ヶ原役東軍に従ひ大谷刑部少輔吉隆と戦ひて陣歿せるもの



で、敵の眉間を貫き、胸板を洞く。

小早川勢、忽ち、打ちすくめられて、進まず。

吉隆、耳を傾むけて、聽くこと暫時、

『敵陣の物音、俄かに鎮まる、必定、進み兼ねしと覺ゆるぞ、ソレ此機會に、槍を入れよ』

と令すれば、吉隆の先鋒、皆、槍を提さげて起ち、鋒を揃へて、颯然として、馳突す。

平塚爲廣、六十餘騎を以て、側面より迫り、脇目も振らず、奮ひ撃つ。

將は名將、兵は精兵、颯馳電撃、無二無三に、突き立て、突き懸かる。

小早川勢、衆と雖も、争かて、此決死の敵に、當り得べき、忽ち、突き崩されて、サツと、引き退くこと數町。

『ソレ遁がすな、進めや進め』

吉隆の家臣若林八兵衛、衆を勵ましく、眞先きに、馳せ進めば、全軍、皆、競うて、追ひ登る。

奥平貞治、來つて、軍を監す、此體を見て、切齒しつゝ、『扱ても、見苦しきる負けざまかな、イデヤ、敵兵を喰

ひ留めん』

唯一騎、踏み留まりて、奮戦す。
吉隆の部下、鋒を擧めて、群がり迫る、貞治勇奮敵を殺し、身も、亦、終に殞る、田中勘左衛門、布目新平等、戦死するもの、三百七十餘人。

秀秋、山上に在り、先鋒の敗れ退くを見て、憤ほり、

『敵は小勢ぞ、アレ打ち取れよ』

更に、新手を派して、下り撃つ。

先鋒重定、正成、亦、勢を得て、還り戦ふ。

戸田重政、斯くと見るより、五百騎を以て、小早川勢を衝く。

吉隆、敵復た來ると聞いて、冷笑ひつゝ、

『小賢かしき軍振りかな、ソレ懸かれ』

と令し、銃を打ち掛け、槍を揃へて進む。

爲廣、亦、銃丸を浴せ掛くること、雨の如し。

小早川勢、力、支へず、又潰え走る。

五十三

藤堂高虎、京極高知と與に、吉隆の子吉勝、甥木下頼繼と、

戦を交ゆ、松尾山の戦況を、望み見て、心、焦ら立ち、平野の陣に對して、旗を振ること、二たび、三たび。

脇坂安治、柄木元綱、小川祐忠、赤座直保の四將、平野に在り、

『左らば、刑部を撃ち候はん』

忽ち、五千騎を以て、戈を倒まにして、吉隆の背後を衝く。

秀秋の先鋒、此體を見て、氣勢、復た振ふ、

『敵を撃ち砕くは、此時ぞ、返せや』

急に、取つて返して、三面より、包み撃つ。

吉隆、智勇、群に抜けども、争かて、此十數倍の大敵に、

當り得べき、部下、苦戦して、多く死す。

吉隆、味方の呼聲、漸く減じ、敵の喊聲、漸く迫るを聞き

て、

『扱ては、味方は、早、敗れけるか、左らば、快よく、

最後の戦せん』

殘兵を勵まし、轎を乗り廻はして、奮ひ戦ふ。

爲廣、奮闘數刻、身疲れ、力衰ふ、槍を揮うて、秀秋の臣

横田半介を殞し、其首を取つて、吉隆に贈り、

『冥土の土産として、首一つ進上候、最早、御生害あらせ候へ』

と告げ、別に、

名の爲めに捨つる命は惜からじ

終にとまらぬ浮世とおもへば、

との和歌を送る、吉隆、豫め、死期を示さんことを、爲廣

に屬す、故に、此報あり、吉隆、使に向ひ、

『因幡殿爲廣の芳志、辱けなし、追つ付け、冥土に

於て、再會致し候はん』

と答へ、且、

契あらば六のちまたに暫し待て

おくれ先だつことはありとも

との返歌を贈る、爲廣、見て、領づき、二たび、馬を驅つ

て、敵中に突入し、

『平塚因幡守の最期を見よや』

と呼はり、小川祐忠の部下榎井太兵衛と、戦ふこと、

數合、力、盡きて、終に討たる。

是に至りて、吉隆、亦、死を決す、

『斯くなるも、皆、金吾奴の致す所ぞ』

盲ひたる眼を、睜はりて、松尾山の方を、見詰むること少

時、

『見よ、三年の内には、必ず、今日の恨を報ゆるべ

きぞ』

と言ひつゝ、キリキリと、齒を切む。

後二年、秀秋、病んで歿す、嗣、無くして、國、除かる、

人、以て吉隆の祟となす。

折柄、湯淺五助、亦、敵の首を提さげて、驅け來り、無念

の涙を、ハラハラと落しつゝ、

『無念に候、主公、變心者の爲めに、打ち崩されて、因

幡守殿以下、大方討たれ候ひぬ、此事、御知らせ申さん

爲めに、馳せ還り候なり』

と言へば、吉隆、

『ア、徳川一統の世とこそ成りけれ、天命の歸する所、

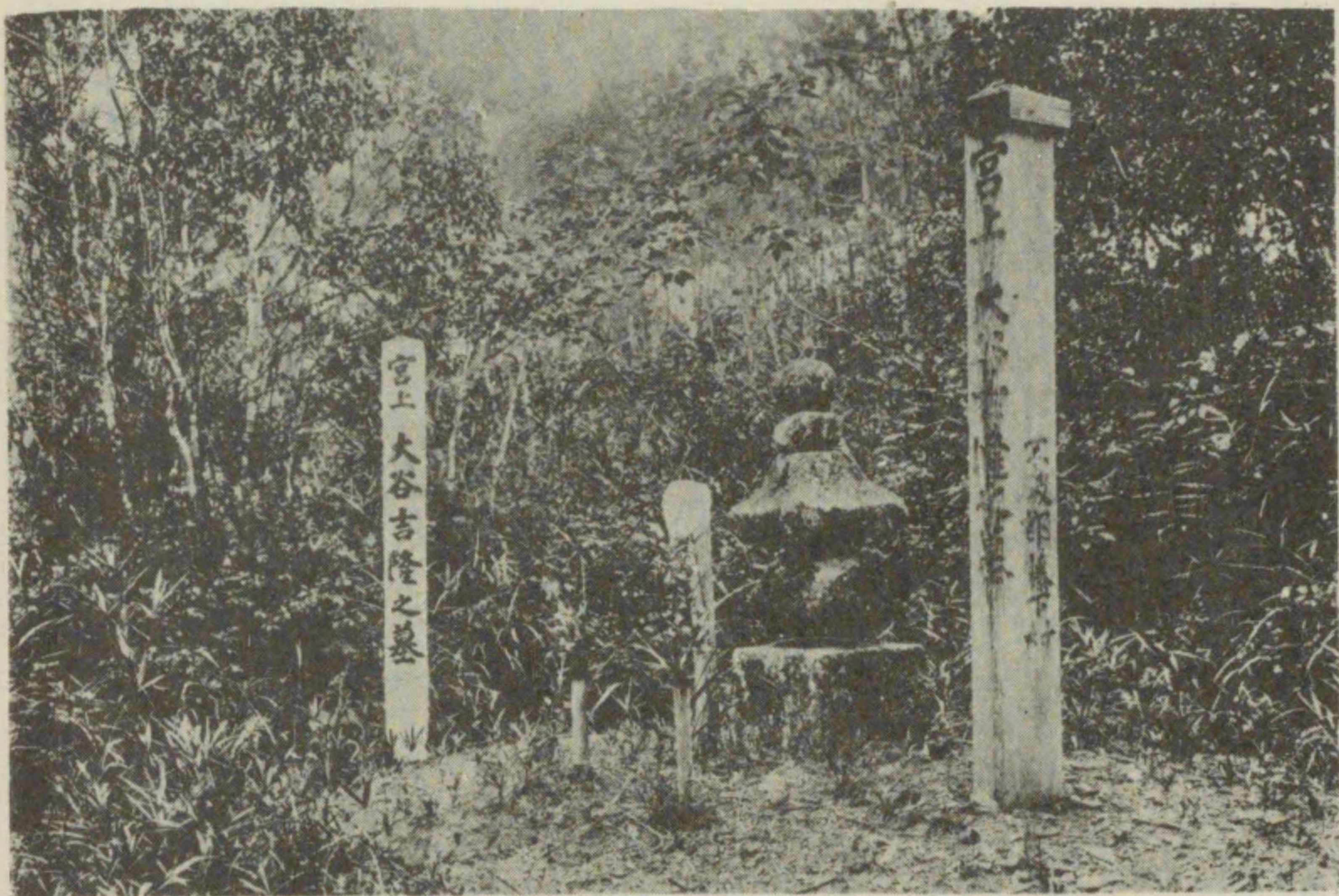
是非もなし』

やをら、轎より出で、胡牀に凭り、鎧、直衣を、脱ぎ捨

て、右手に、小刀を執り、

大谷吉隆の墓

關原村大字藤下宇宮上に在り東軍の將藤堂高虎の建つところ其側に吉隆の老臣湯淺五助隆貞の墓あり五助は主の首を匿して後敵軍を衝きて戦死せしもの



「虎を
畫きて、
猫に類
すると
は、我
が生涯
の所業
なりけ
り」
と言ひつ
つ、莞爾
として、
打ちほ、
ゑむ、
「敵、
我が首
を獲な
ば、必

ず獄門に掛けん、能くく、隠し候へ、イザ介錯」
刀を取り直して、腹、搔つさばけば、五助、サツと、其首
を、打ち落す、三浦喜太夫、手早く、羽織に包みて水田、
の泥中に埋め、亦、屠腹して死す。

五助以下、二百五十餘人、皆、敵軍を衝きて、戦死す。
吉勝、頼繼の二人、高虎、高知と戦ふ、吉隆の死を聞いて、
憤ほり、

「左らば、甲合戦せばや」
急に、軍を還して、秀秋を撃たんと欲す。

從卒、多く遁れ、敵の尾撃、甚だ急なり、島左京、正田角
右衛門等、皆、戦死し、後に留まるもの、僅かに二十餘騎。
吉勝、頼繼、相見て、慨然たり、

「今は、是れまでに候なり」
北方の山中に入りて、自殺せんとす、從兵、皆、諫むれば、
乃ち去つて、北國に遁がる。

吉隆、既に敗れて、藤川以西、復た西軍なし。
諸將、戦捷の餘威に乗じて、進んで、西軍を討つ、高虎、
高知は、三成に迫り、秀秋、安治等は、秀家の軍を撃つ。

東軍、益々振ひ、西軍、益々沮む。

五十四

松尾山の旌旗、西北に向つて下るや、家康、見て、大に喜
び、急に、軍使を、四方に馳せて、東軍の諸將に報す。
諸軍、喜び勇む、皆、一齊に、鯨波を發し、貝を吹き、鼓
を打つ、其聲、天地に震ふ。

時に、行長の先陣、二陣、俱に、東軍と戦ふ、勝敗、未だ
決せず。

小早川秀秋の、大谷吉隆を下り撃つを見るや、皆、愕然と
して驚く、

「ソレ裏切りぞ、今は、敵ふまじ」

先陣、先づ退く。

第二陣、支へ止めんとすれども、能はず、又走り退く。

行長、見て切齒す、

「言ひ甲斐なき者共かな、何とて、進んで、死せざる」

聲を勵まして、叱咤すれども、士卒、耳にも懸けず、先き
を争うて、潰え退く。

東軍、勢に乗じて、嚴しく、追ひ來る、

「左らば、備を立て直さん」

行長、命じて、兵を退くること三町餘、弓銃を連射して、
防ぎ戦はんと欲す。

敗兵、類れ懸かりて、制すべからず。

行長、平生、鄙吝にして、下に薄し、士卒、皆、死志なく、
本隊の兵、亦、戦はずして、走り退く。

行長の軍、全く敗る。

廣高等、北ぐるを追ふこと數町、忽ち、轉じて、天満山の
南方に向ひ、側面より、進んで、浮田秀家の麾下を、攻撃
す。

五十五

家康、西軍の色めくを見て、咄嗟に、惣進撃の令を下す、

「懸かれや懸かれ、惣軍、一時に懸かれ、敵を撃ち碎く
は、此時ぞ」

麾を揮うて、疾呼すれば、諸軍、鯨波を發して、奮ひ進む。
麾下の將士、亦、競うて、敵軍に迫る。

意氣、迸しつて、天に冲す。

三成、初めより、奮戦、最も力む、遙かに白旗を望み見て、

意氣、益々昂がる、

『アレこそ、徳川なれ、イデヤ、麾下に、突き入つて、雌雄を決せん』

親ら麾下の兵、二千人を提さげ、溪流を渡り、林逕を過ぎ、北山の麓に出で、馬を小丘の上に立て、將さに横さまに、東軍を衝かんとす。

大山伯耆、大場土佐、前隊に在り、後藤又助、古茂多伊織、百々宮内、麻田但馬、北川平左衛門、林半助等、左右に在り、皆、勇武絶倫の士。

家康、望み見て、急に、命を本多忠勝に傳へ、

『アレに見ゆるは、治部ぞ、疾く、馳せ向つて、追ひ崩せよ』

と促せば、忠勝、唯して起ち、桑山直晴、山城季宗、野々村雅成の三隊を統べて、馳せて、北山に向ふ、

『敵の張本、彼處に在り、汝等、皆、我れと與に、討死せよ』

名馬三國驪に跨がり、蜻蛉切の槍を提さげ、會釋もなく、敵軍の正中に突入し、四角八面に、突き立て、薙ぎ立つ。

勇將の下は、皆、勇士、我れ劣らじと、競ひ進み、右を衝き、左を撃ち、荒れに、荒れて、斫り廻はる、

『扱ても、水際立てる軍振りかな』

敵も、味方も、皆、感嘆す。

忠勝の二男忠朝、生年十八、従うて、本營に在り、急ぎ、家康の前に出で、

『父忠勝の合戦、大事に見え候ひぬ、御免蒙りて、馳せ参じ候はゞや』

と請へば、家康、言下に、

『神妙ぞ、疾く往け』

と許す、忠朝、ハツと答へて、躍り上り、ヒラリと、馬に打ち跨がりさま、一鞭、烈しく、策てば、鐵蹄、忽ち、空を蹴つて、馳せ進む、

『我れこそ、本多中務大輔忠勝の二男、同苗出雲守忠朝なれ、イザ、我が手並を、見よや』

三尺有餘の太刀を、打ち揮り、目に餘る敵中に突進し、當るに任せて、斫り倒し、薙ぎ倒し、進み進んで、父の方に向ふ。

三成の家臣甲賀源内、馬を驅つて、馳せ來り、ムツと、忠朝に、引つ組む。

忠朝、剛勇比なし、イキナリ、源内の鎧の上帯を把つて、頭上高く、差し上げ、一聲、曳と叫んで、投げ付くること三丈餘り、敵兵、此れに觸れて、死するもの三人。

敵兵、恐れて、バツと、逃げ散る。

忠勝父子、三成を討たずんば、已まじと、益々勇を振うて、突進す、扇の旗差物、縦横自在に、敵の軍中を、駆け廻はること、半時ばかり、宛がら、無人の郷を、行くが如し。鋭鋒、當るべからず、三成の勇士、多く倒さる、三成、切齒すれども、及ばず、終に、兵を、元の陣地に引きて、呼吸を繼ぐ。

忠勝、乃ち轉じて、島津義弘の陣を突き、桑山直晴等は、分れて、浮田直家の營を襲ふ。

五十六

吉隆の敗れ死するや、戸田重政、亦、大に敗れ、圍を破りて、馳せて、三成の陣に到る、從兵、僅かに十餘人。重政、具さに、秀秋反撃の狀を告げ、更に、進んで、家康

の麾下を、突かんと欲す。

忽ち、東將津田信成に會ふ、乃ち、槍を捻つて、此れに當る。

信成の乗馬、白刃の光に、駭きて、逸す、重政、馬を驅つて、之れを逐ふ。

織田長孝、斯くと見るより、聲を掛けて、戦を挑む、

『我れは、織田河内守長孝なり、來つて、勝負を決せよ』
槍を抜きて、追ひ來る、重政、乃ち馬首を回へして戦ふ。接戦十數合、長孝、忽ち、曳と喚いて、重政の前額を、突き貫ぬく。

剛氣の重政、暫しも、鞍に堪り得ず、忽ち、控と、地上に墜つ。

長孝の從兵、透かさず、折り重なりて、其首を齧る。

五十七

小早川秀秋、既に、吉隆を殪し、更に、進んで、秀家の陣に迫る。

秀家、既に、其旗幟を見て、勃然として、怒り、
『アレこそ、人面獸心の秀秋なれ、イデヤ、我れ、馳せ

陣場野
陣場野は關ヶ原驛と小關との間に在り戰酣なる時徳川家康の本營を桃配山より移して全軍を指揮せし處



向ひて、討ち果さん』
馬を驅つて、秀秋の陣を、衝かんと欲す。
老臣明石全登、轡を按へて、
『君は、總大將の御身分に候はずや、何とて、然る匹

夫の振舞をなし給ふぞ、思ひ止まり給ふべし』
と諫むれば、秀家、首を掉つて、肯かず、
『秀秋は、心を變じ、輝元は、約に違うて、兵を出ださず、秀元までも、兩端を懐けるにあらずや、今日、味方の敗る、も、斯かる奴輩のあればこそ、一死、故太閤の恩誼に報ゆるは、今日なれ、ソコ放せ、何條、此儘、止むべきや』
鐘を煽りて、馳せ出でんとす、
全登、尙も、緊かと、馬の口を取つて、放さず、
『大老、奉行、皆、關東に降り候とも、君にして、在はさば、豊臣の御家は、尙、傾き候まじ、宜しく、備前、美作の兵を擧つて、關東に當り給ふべし、若し、志を得ずんば、岡山の城に、立て籠り、天下の兵を、引き受けて、快よく、一戦し、城を枕に討死し給はんこそ、武門の本懐に候べけれ、何とて、死を急ぎ給ふことや候』
言を盡くし、理を悉くして、説き勸む。
秀家、默然として、沈思すること、稍、久し、
『實にや、汝の申す通りぞ、左らば、一先づ、此處を落

ち延ぶべし』

近臣數人を従へ、馳せて、伊吹山に入る。
全登、跡見送りて、獨り領づく、
『今は、心安し、イデ、快よく、一戦せん』
秀家に代りて、自ら兵を指揮し、奮うて、敵の大軍を衝く。勝ち誇りたる東軍、事ともせず、四方より、押つ取り圍んで、嚴しく攻め立つ。
全登、衆寡、敵せず、漸く、一方の血路を開きて、遁れ走る。
歸りて、岡山に到れば、無念、城兵の關東に降りてより後、既に三日。
五十八
三成の、忠勝の爲めに破られて、本陣に退くや、黒田長政、田中吉政、生駒一正等、益々銳氣を鼓して、來り迫る。
藤堂高虎、京極高知の兩軍、亦、吉隆を破りて、來り加はり、一擧して、三成を倒さんとす、軍氣、益々振ふ。
三成、拒ぎ戦へども、敵せず、士卒、走りては、復た回し、散じて、復た聚まる。

三成の先鋒蒲生郷舎、尙、胡牀に凭りて、兵を指揮す、是に至りて、蹶然、地を蹴つて起つ、
『馬牽けや、者共』
ヒラリと、鞍に打ち跨がり、太刀を振り翳して、敵中に突入し、荒れに荒れて、奮ひ闘ふ、宛がら、阿修羅の如し。
既にして、馬傷つきて斃る、乃ち徒歩となつて、進み戦ふ。一將あり、馬を馳せて、行き過ぐ、郷舎、刀を背後に隠して、馳せ近づく、

『それに渡らせ給ふは、織田殿に有樂に候はずや、我れは、蒲生飛騨守に仕へし横山喜内、今は、石田治部少輔に仕へて、蒲生備中郷舎と申し候なり、君、我れを見知り給ふべし』
と呼ばれば、其人、忽ち、馬を駐めて、
『如何にも、我れは、有樂なり、扱ては、汝は、備中なりしか、好くこそ、我れに逢ひけれ、内府に乞うて、一命を助け遣はすべきぞ、イザ、我れに隨ひ來れ』
と言へば、郷舎、忽ち、呵々と笑ふ、
『君は、信長公の御舍弟にも似合はぬ明盲かな、我れ、

何條、人に頼つて、命を助かり候はんや、イザヤ、冥土の土産に、君の御首級を、申し受け候はん』
サツと、刀を揮うて、横に拂へば、憂然、鎧に觸れて、聲あり。

有樂、不意を打たれて、思はず、馬より落つ。
郷舎、得たりと、躍り掛かりて、斬らんとす。

有樂の従士澤井久藏、矢庭に、槍を繰り出して、郷舎を突く。

郷舎突と、身を沈ませて、足を拂へば、久藏、忽ち、撞と、倒れ伏す。

千賀又藏、來つて、後に在り、其隙に乗じて、グサと、郷舎を、突き貫く、士卒、群がり來りて、其首を取る。

五十九

島勝猛、慨然として、部下に向ひ、

『今や、戦、既に敗る、苟くも、武名を、天下に知られて、三成には、過ぎたる家來よと、世に稱へられたる身の、争かて、暗々、亂軍の中に、討たるべきや、是れより、徳川殿の麾下に、駈け入つて、思ふさまに、切り死

せんと存ずるなり、去らんと思ふものは、去れ、死せんと思ふものは、我れと與に、來れ』
と呼はる、部下百餘人、誰れかは、生を願はん、皆、俱に、死せんことを誓ふ、

『左らば來れ』

圓陣を作つて、突進し、一呼して、京極高知の兵を、突破し、更に、進んで、生駒一正の兵を、撃破す。

前方を見れば、白旗、風に翻へる、

『アレこそ、願ふ所の敵ぞ、ソレ懸かれ』

勝猛、猛然、馬を驅つて、家康の麾下に向ふ。

東軍、見て、四方より、包み撃ち、餘さじ、漏さじと、揉み立て、薙ぎ立つ。

勝猛、勇を奮うて、縦横に戦ふ、馬、墮るれば、敵の馬を奮うて跨り、刀、折るれば、敵の刀を取つて闘ふ。

激戦數刻、士卒、殆んど殲く、剩すところ、僅かに八人。

『今は、是れまでぞ』

終に、奮闘して死す。

或は言ふ、勝猛、圍を破つて、故郷、對馬に遁がると、未

だ其是非如何を知らず。

北川平左衛門、殊死して戦ひ、敵を倒すこと數十人、去つて、往く所を知らず。

股肱の勇士、殆んど盡く、

『今は、奈何ともすべからず、若かず、一先づ、此處を去つて、再舉を計らんには』

三成、走つて、伊吹山に入る、衆、亦、皆、潰え散す。

長政、重門、北ぐるを追うて、進むこと十數町、山腹に至つて止む。

六十

西軍の形勢、益々非なり。

小西行長、先づ敗れ、浮田秀家、石田三成、亦、敗れ走る。是に於て、東軍の諸將、皆、島津義弘の陣に、迫り來る、宛がら、怒濤の堤を決するが如し。

孤軍、援なしと雖も、義弘、少しも屈せず、尙も、兵を勵まして、奮ひ戦ひ、群がる敵を、切り靡けくつ、東に進む。

家康、軍使を、直政、忠勝の陣に馳せて、

『島津勢は、必死を極めし體なるぞ、小勢と雖も、若し、侮らば、味方を損せん、疾く、諸將に下知して、追ひ崩し候へ』

と命ずれば、二人、言に應じて起つ。

銃手、數隊を、眞先に備へて、入れ換へく、銃を發つ、銃丸、飛び去り、飛び來つて、小歇みもなく、觸るゝもの、皆、墮る。

見るく、士卒、半ば失せて、餘すところ、僅かに數百、

義弘、猛と雖も、奈何ともすべからず、デリリくと、伊吹山の方に退く。

東軍、見て益々勇む、

『ソレ追ひ崩せよ』

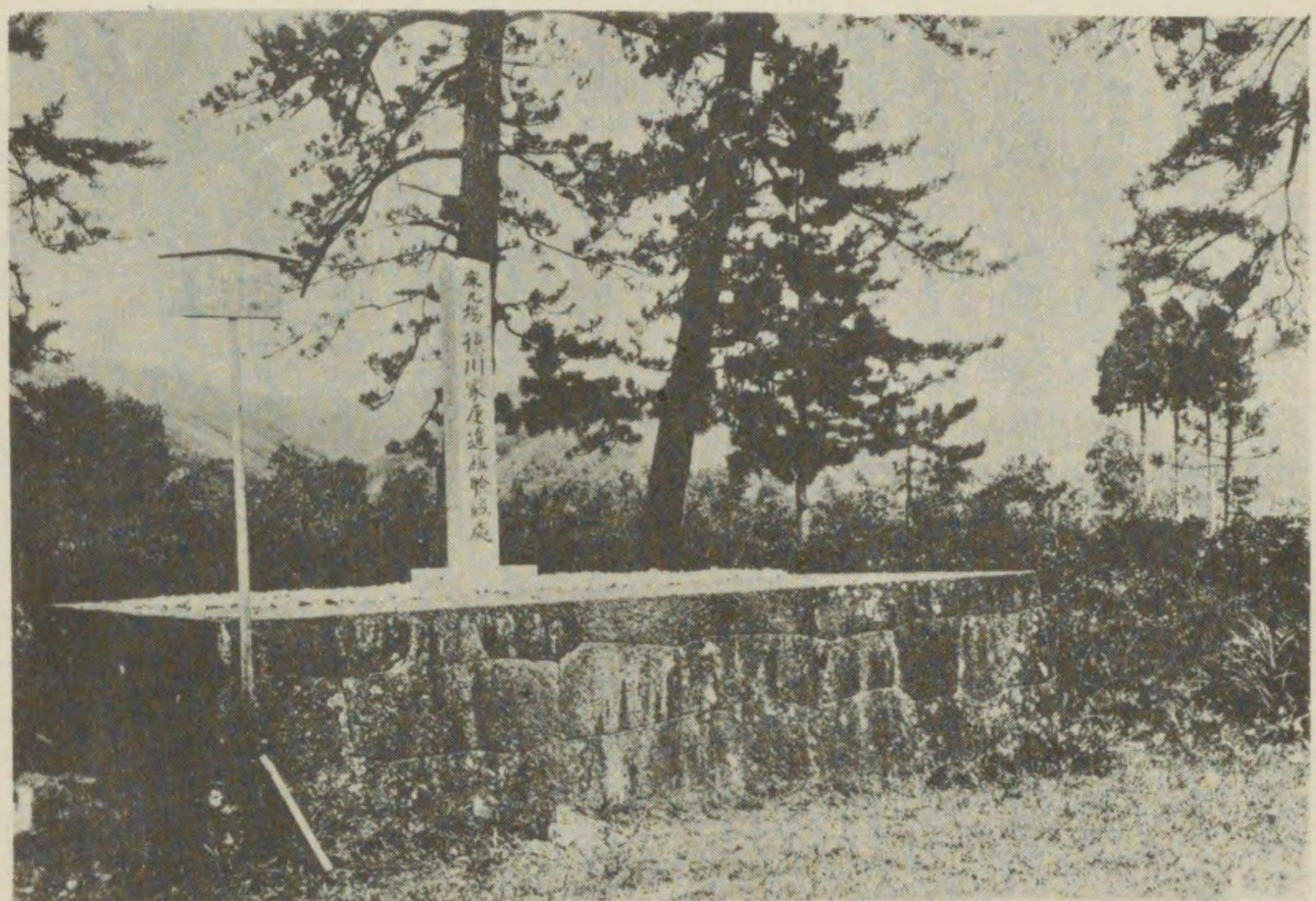
槍を揮ひ、長刀を把つて、肉薄し來る。

義弘の家臣川上左京亮、川上四郎兵衛、久保七兵衛、押川六兵衛、川上久右衛門の五士、大に怒り、槍を揃へて、回戦ひ、大音聲に、名乗り掛けく、矢庭に、敵騎五六人を突き落す。

東軍、衆を恃みて、事ともせず、我れ先きにと、競ひ掛か

床几場

此れは關ヶ原陣場野の床几場にして徳川家康の床几にかゝり敵の首級を實檢せし處其標石に「徳川家康進旗驗誠處」とあり



り、群がり掛かる。五士、今は、槍を揮はん餘地もあらず、
「イデヤ、討死せん、ココ一寸も引くまじきぞ」
突と、右の足を折り敷き、槍の石突

を、大地に、突立きてつゝ、ハツタと、敵を睨む。先鋒の諸兵、亦、皆、折り敷き、槍衾を作つて、敵を待つ。義弘、馬を乗り出し、麾を揮り立て、大聲を揚げて、
「懸かれ〜」
と疾呼すれば、五士、聲に應じて、躍り上り、槍を揃へて、ドツと、突進し、群がる敵兵を、突き立て、突き倒す。敵兵、皆、辟易す。

世に、之れを小返こかへしの五本槍と稱ふ。
義弘、進んで、福島正之の兵を、突破し、更に、敵中を突進すること一町餘、陣を小丘の上に立て、餐を傳ふ。四方を見渡せば、敵の大軍、野に充ち、山に滿つ、劍光、旗影、見れども、果てしを知らず。
義弘、慨然として、島津豊久、阿多盛淳の二人を召し、
「我れ、弓矢を執つてより、五十餘年、朝鮮、唐土にまで、武名を轟かしながら、あたら、石田等の愚將に與みして、老後の耻辱を招きしこそ、無念なれ、アレ見よ、前には、徳川の太軍あり、後には、伊吹の大險あり、我が麾下の勇士、今や、僅かに百人に過ぎじ、争かて、安々

と、此處を過ぎらるべきや、我が覺悟は、極めたるぞや」と告ぐ、悲憤の色、其面に顯はる、既にして、屹と、東の方を望みつゝ、

「アレなる東の備こそ、徳川の麾下なれ、今一度、此大軍を駈け破り、我が武威を示して、討死せん」

と言へば、豊久、冑を脱し、兩手を突きつゝ、

「今日、御討死遊ばされんこと、御家の爲めに、然るべからず、御必死の時は、豊久、君の御命に、代り奉つらん、一先づ、此處を落ちさせ給ふべし」

と諫むれば、義弘、首を左右に、打ち掉りつゝ、

「左ばかりの道理は、誰れか辨へざらん、左れども、篤と、考へ見よ、譜代の臣下、數百人を殺して、我れ、何ぞ、獨り活くべきや、況してや、此疲れたる小勢を以て、遠く、西國まで、無事に立ち還らんこと、思ひも寄らず、見苦しき最期を、遂げんよりは、此處にて、討死せんこそ、武士たるもの、面目なれ」

固く思ひ極めて、復た聽き入るべき氣色もあらず、豊久、尙も、面を犯しつゝ、

「何とて、物の道理に迷ひ給へる、今日の合戦は、秀頼公の御爲めに、止みがたき義戦にこそ候へ、石田等の非謀に與みせるものには候はず、此儀、徳川殿にも、知り給ふべし、御歸國の後、和議を申し入れ給はんか、徳川殿は、少將君忠恒の御爲めに、不俱戴天の誓にて候、和議を求めんにも、求めがたく、終に、合戦に及ばせ給ふべし、斯くては、鎌倉右大將以來、連綿たる御家も、斷絶致候はん、御先祖への御不孝、此上も候まじ」
と諫む、思ひ餘りて、涙、ハラ〜と、膝に落つ。
盛淳も、亦、勸む。

義弘、瞑目沈思すること少時、忽ち、打ち領きつゝ、
「如何にも、兩人の申す通りぞ、左らば、此處を、落ち延びん」

急に、其意を變へし、手づから、陣羽織を取つて、豊久に賜へば、
「某には、御旗をこそ、下し賜へ」
盛淳、自ら旗を請ふ、是れぞ、義弘に代つて、死せんと欲するもの。

『此處より、京都に上るには、三つの道筋ありと聞く、何れの道か、好かるべき』

義弘、左右を顧みて問へば、後醍醐宗重、進み出で、

『徳川殿の御手段は、袋の口を結ぶの策略にこそ候へ、筑前黄門殿秀秋以下の大勢を以て、西軍の遁路を塞ぎ、伊吹路に追ひ入れたる上、先手の勢を以て、追撃すべき手段とこそ、覚え候へ、伊吹路に懸かり候程のものは、誰か助かり候はん、今明日には、皆、亡び候べし、御人数、乏しと雖も、雑兵を加へ候はゞ、尙數百人は候はん、敵中を切り通して、駒野へ掛かり、伊勢路より、御歸國あらせ給へ、是れぞ、安全の策に候はん』

と説く、義弘、聞いて喜び、

『いしくも、申せしものかな、計略は、密なるを好しとす、秘すべし』

直に令を軍中に下して、

『是れより、敵中を切り通して、大垣城に籠るべし、何れも、粉骨して、働き候へ』

と告ぐ、士卒、聞いて、皆、振ふ。

時、恰かも、未の下刻午後三時雲低れ、雨濺ぎて、暗惨の色、天地を鎖す。

六十一

義弘、兵を三隊に分つ、豊久、第一軍を率ゐ、盛淳、第二軍を率ひ、義弘、自ら第三軍を統ぶ。

發するに臨みて、義弘、一首の和歌を詠ず、

急ぐなよ又急ぐなよ世の中を

定まる風の吹かぬ限りは

二かへり、三かへり、朗々、高く、低く、吟ずれば、將士、皆、鎧の袖を沾ほす。

義弘、突と、胡牀を離れて、馬に跨がる。

前方を望み見れば、東軍、列を正し、隊を整へ、鯨波を作つて、犇々と迫る。

義弘の兵、亦、ドツと、鯨波を合はす、

『死ぬるも、生きるも、諸共ぞ、進めや者共』

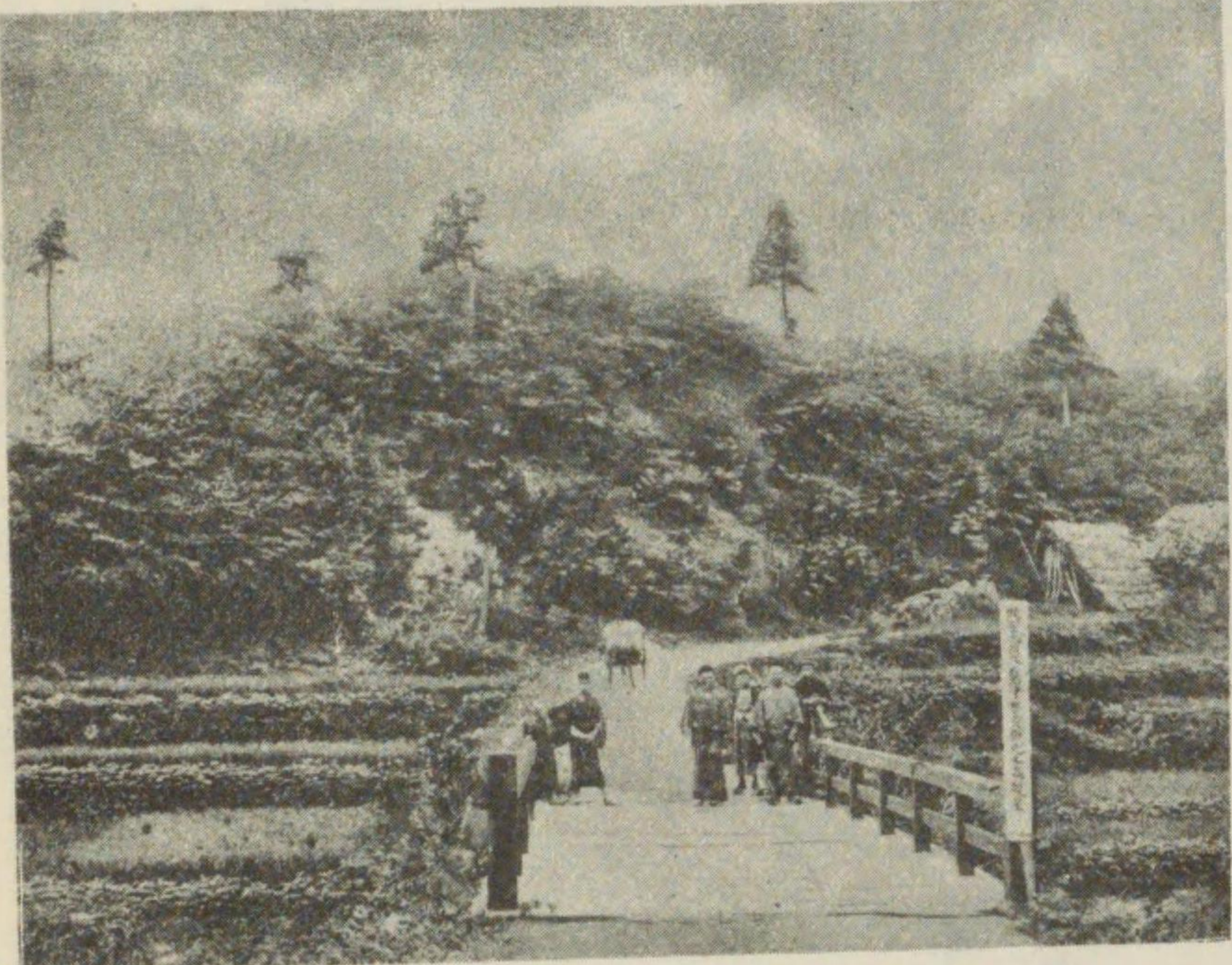
颯と、風を斫つて、急坂を、馳せ下れば、草も、木も、一時に揺めく。

忽ち、嵩に掛かつて、目に餘まる敵の大軍中に、突き入り、

右を撃ち、左を突き、五百の士卒、唯、一團となつて戦ふ。兵鋒猛烈、向ふところ、皆、躡き、觸るゝところ、皆、碎く。

鳥頭坂

鳥頭坂は關ヶ原の南端牧田街道に當り多良谷の咽喉なり西軍の將島津義弘の姪豊久の兵敗れて退却する時追撃軍を拒ぎて戦死せし處



豊久、盛淳等、固く死

を決す、敵を追ひ崩し崩して、益々

進む。

山田有榮、指宿直政等、

三十餘人、先きを争う

て、進み戦ふ。

東軍、皆、沮み、家康

の麾下、亦、

見て動く。

時に、雲影、益々深く、雨聲、益々急なり、喊聲、叫聲、風に捲かれて飛ぶ。

義弘の兵、益々振ふ。

豊久、腰に挟める猩々緋の陣羽織を取つて、手早く着し、大刀を打ち揮り、敵を斫つて落すこと、數十騎。

豊久の勇士十三騎、亦、鋒を揃へて、敵を斫り捲る。

斯かる所へ、忠吉、直政等、宙を飛んで、突進し來り、直に、義弘の麾下を衝く。

義弘の家臣中馬大藏兵衛、指宿直政、義弘を守護して、拒ぎ戦ふ。

敵の矢丸、雨より繁し。

義弘の馬、忽ち、傷つきて斃る、乃ち徒歩となつて進む。

大藏兵衛、其手を取り、直政、其腰を押す、桂太郎兵衛、

菱川源兵衛、頼娃彌一郎、山田有榮、伊勢平左衛門、後醍醐院喜兵衛、木脇休作等、前後左右の敵を、突き退け、追ひ拂ひ、ココを先途と、防ぎ戦ふ。

り、一軍、散ずれば、一軍、又迫る。
義弘の兵、益々奮ひ、且つ戦ひ、且つ進み、家康の本營を掠めて、過ぎんとす。
家康、見て感嘆す、

『島津入道の働きこそ、目覺ましかれ、イデヤ、此必死の鋒尖を、碎き呉れん』

鞍の前輪を、打ち叩き、

『懸かれ〜』

と指揮すれば、麾下の勇士、皆、猛然として、進み戦ふ、鋭氣、當るべからず。

義弘、乃ち其前面を過ぎて、西貝塚に到り、筒井定次の老臣中坊飛驒の兵を、突破して、其三男三四郎を斬り、更に、進んで、烏頭坂に抵る。

忠吉、直政の兵、益々迫り、忠勝、亦、兵を率ゐ、來つて、義弘の軍を衝く。

義弘の兵、銃を放ちて、忠勝を打つ。

忠勝の馬、丸に中りて斃る、更に、他馬に跨がりて、又進む。

義弘、漸く急なり。

豊久、突進して、遮り戦ふ。

忠勝、麾下の勇士を、指揮して、豊久を圍むこと數重、彼方は、島津中務大輔、此方は、本多中務大輔と、火花を散らして、挑み戦ふ。

忠勝の麾下、皆、勇猛、八方より、槍を集めて、突き懸り、サツと、豊久を、槍玉に掛けて、突き上げ、突き下すこと七八度、猩々緋の陣羽織、見る／＼、寸断々々に、裂けて

烏頭坂の木標

關ヶ原の南端烏頭坂は西軍の將島津義弘の苦戦せし處木標あり「島津豊久戦死所」と記す



飛ぶ。

時に、秀秋、亦、追ひ來る、小田原の浪士笠原藤左衛門、其先鋒に在り、直に進んで、豊久の首を取る。

豊久の勇士十三騎、亦、皆、血戦して、其死屍の前後に墮る。

惨烈、今古に比なし。

義弘、間を得て、南方に遁がる、こと七八町。

忠勝の兵、豊久の首を、槍に貫ぬき、

『島津中務大輔を、討ち取つたり』

大音聲に呼はりつゝ、又義弘を追ふ。

直政、聞いて、

『左らば、我れは、兵庫頭を、討ち取らん』

兵を勵まし／＼、進んで、義弘に迫る。

義弘、益々急なり、

盛淳、愈々死を決す、

『今こそ、御名を犯し奉つりて、死すべけれ』

櫓の旗を、眞先きに、押し立て、部下數十人を率ゐて、回り戦ふ、

『島津兵庫入道、運盡きて、此に討死す、之れを見て、

武士の手下とせよや』

ドツと、喚めいて、突いて掛ければ、直政の兵、亦、勇を鼓して戦ふ。

松倉重政の家臣山本義純、直政の先鋒木俣右京の隊に屬す、槍を抜いて、盛淳に、突き掛け、忽ち、グザと、突き落す、

『我れこそ、島津兵庫頭を、討ち取つたれ』

首を取つて、深く喜ぶ、既にして、其陣羽織を、檢すれば、紋章、全く異なる、

『扱ては、身代りなりしか』

槍を取つて、復た逐ふ。

直政、亦、忠吉と與に、義弘を追ふこと、甚だ急なり。

毛利覺右衛門以下、拒ぎ戦うて、死するもの大半。

六十二

義弘、生死の境を、出入すること數回、左右を見廻せば、付き隨ふもの、僅かに八十餘人、皆、或は、傷つき、或は、疲れ、物の用に立つべきもの、幾許もあらず。

敵陣、尙、近く、敵兵、尙、多し、義弘、乃ち馬蹄を早めて過ぐ。

忽ち、人馬の聲、背後より迫る。

義弘、顧みて見れば、百餘騎の赤隊、白旗、赤旗を、眞先きに押し立て、追ひ来る。

義弘の危急、今や極まる、

『イデヤ、君に代つて、武勇の名を、末代に遺し候はん』

川上左京亮、川上四郎兵衛、久保七兵衛、押川六兵衛等、馬より、飛び降り、太刀袈を作つて、待ち構ふ。

眞先きに進めるは忠吉、此れに續ける直政、各、槍を提げて、疾驅し来る。

左京亮等、機を見て、突つ立ち上り、名乗り掛けて、奮闘す。

忠吉、血氣、燃ゆるばかり、矢庭に、敵兵五六人を、突き倒し、更に、進んで、義弘に迫る。

九州の浪士松井三郎兵衛、従うて、義弘の隊に在り、忽ち、馬を驅つて、躍り出で、槍を揮うて、忠吉に當る、猛將と勇士、互に、秘術を盡して、奮戦すること數合。

三郎兵衛、忽ち、ヤツと叫びて、槍を繰り出し、忠吉の鍔籠手の邊を突く。

忠吉、思はず、馬より落つれば、三郎兵衛、續いて、飛び下り、ムツと、組み敷きて、首を搔かんとす。

忠吉の家臣龜井九兵衛、斯くと見るより、慌て、駈け來り、イキナリ、三郎兵衛を斬つて倒す。

義弘の兵、怒つて、來り迫る。

忠吉、馬逸して、徒歩にて戦ふ。

直政の臣隈部彌五右衛門、駈け來つて、己れの馬を進めんとす。

武藤六太夫、續いて來り、ヒラリと、馬より飛び下る、

『御邊は、足不自由ぞ、馬なくては、進まれ候まじ、某の馬をこそ、參らすべけれ』

忠吉を、己れの馬に、扶け乗せて退く。

直政、馬を乗り廻はしく、遮ぎる敵兵を、突き退けて、義弘を逐ふ。

義弘の從兵、茅草の陰に潛み、小銃十三挺を並べて、之れを待つ

直政、單騎、益、追ひ迫る。

義弘、見て下知す、

『アレこそ大將ぞ、ソレ撃ち落せよ』

川上四郎兵衛の從士柏原源藏、矢庭に、火蓋を切つて落せば、彈丸、飛んで、直政の臂に中る。

直政、忽ち、カラリと、槍を落す。

大久保將監、急ぎ、槍を拾うて、進めんとす。

直政、又撞と、馬より墜つ。

朝比奈藤右衛門、齋藤半兵衛、左右より、駈け寄つて、扶け起せば、既に氣絶す、乃ち傍の民家に昇き入れて、手當を加ふ。

義弘、間に乘じて、多羅山に走る。

稍、ありて、直政、忽ち、呼吸を吹き返す、

『兵庫頭、何處に在る』

蹶起して、復た逐はんとす、其遠く去れるを見て、乃ち止まる。

六十三

長束正家、長曾我部盛親、毛利勝永、安國寺惠瓊等、南宮

山下の栗原村に陣す。

毛利秀元の、山を下らざるを見て、敢て、兵を動かさず。未の刻、午後二時の頃、正家の斥候、馳せ來りて、

『味方、總敗軍に及び候、疾く、御用意あらせ候へ』と報ずれば、諸軍、聞いて、色を失ふ。

時に、南宮山の兵、俄然として、鯨波を發す。

諸軍、益々驚きて、潰えんとす。

東軍、機を見て、來り迫る、

『軍は、早、勝てり、功名は、仕勝ちぞ、進めや進め』勇氣凛々、先きを争うて、進み撃つ。

惠瓊、衆を勵まして、拒ぎ戦へども、敵せず、先づ、伊吹路に、走り退く。

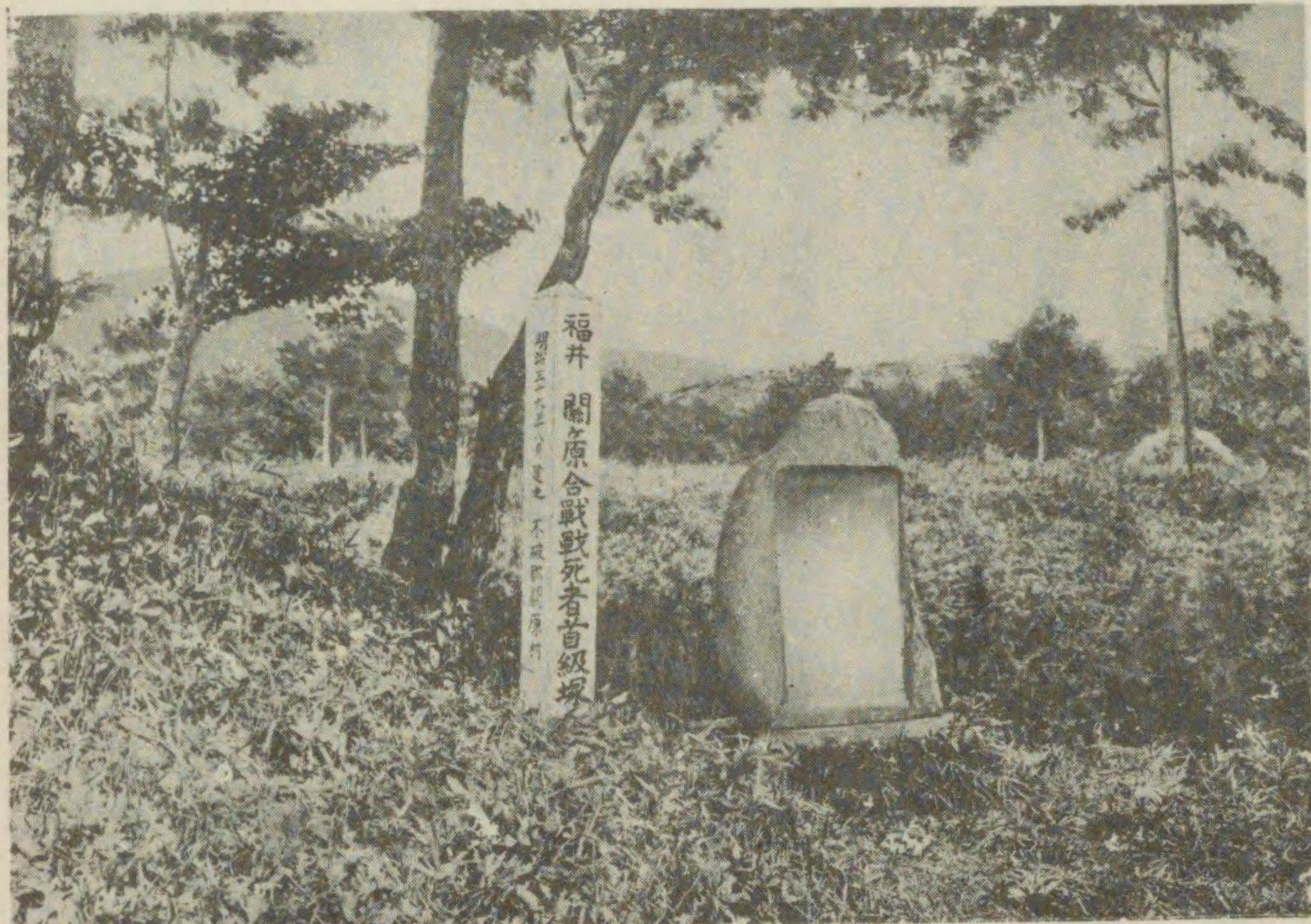
正家等、尙、留まり戦ふ、其家臣松田金七、熊手を以て、敵を引き寄せ、撃つて倒すこと數十人、敵兵、皆、膽を奪はる。

既にして、西軍、皆、關ヶ原を遁れ去り、東軍の旌旗、山野を掩ふ。

正家等の兵、大に恐れ、皆、兵器を棄て、伊勢路に、遁

關ヶ原の首塚

關ヶ原宇福井に在り關ヶ原の役東西兩軍の戦死者約四萬の首級を埋めし處傍に備前の儒員近藤篤の撰せる首級墳碑を建つ



れ去る。

東軍、逐うて、首を獲ること、八十一。

六十四 西軍、今や、全く敗る。

家康、乃ち陣を藤川の臺に移し、悠然として、胡牀に凭る、俄かに、

左右を顧みて、

『疾く冑を持ち來れ』
と命ず、侍臣、乃ち冑を捧ぐれば、家康、手づから、取つて被ぶり、

『勝つて、冑の緒を締むるとは、此事ぞ』
と言ひつゝ、快然として、高く笑ふ。

頓て、式を具へて、首級を検す、敵の首を獲ること、三萬二千六百餘級。
東軍の死者、四千に上らず、將帥の死せるもの、一人もなし。

六十五

關ヶ原の戦、全く終る。

長政、先づ、來つて、戦捷を賀す、家康、其手を執つて、

『甲斐殿||長政||今日の大捷は、全く、御邊の力に候ぞ』
と謝し、自ら佩べる吉光の短刀を、脱して贈る、秀秋、廣家の内應せしもの、長政與つて、力あればなり。

忠勝、尋いで、來り賀す、刀痕、鎧に満ちて、扇の旗差物、寸断々々に裂く、

『今更のことにはあらねど、此度の働き、別して、感じ入りしぞ』

家康、深く其功を賞し、坐側に留めて、諸將士を、延き見

る。
忠朝も、亦、來り謁す、刀身、反つて、鞘に入らざること五六寸。

忠吉、傷を裹んで來り、進んで、松浦三郎兵衛の首を獻す。直政、續いて、來り賀す、家康、突と、胡牀を離れて立ち、

『傷は、如何ぞ』

手づから、藥を取つて、傷に付け、其餘を、忠吉に與ふ、直政、忠吉の勇氣を賞して、

『逸物の子は、逸物とは、實に、野州殿の御事にこそ候へ』

と申せば、家康、莞爾として、

『其は、飼人の力ぞ』

と言ひつゝ、笑む、飼人とは、直政を指す、忠吉は、實に、其女婿なり。

忠勝、盛んに、諸將の功を賞し、

『今日の御働き、實に拔軍に候なり』

と言へば、正則、忠勝の方に向ひて、

『中務殿||忠勝||の軍振り、聞きしにも優りて、美事候』
と讚す、忠勝、

『其は、敵の弱かりし爲めにこそ候べけれ』

洒然として、誇れる色もあらず。

正則、又家康に向つて、

『天下の勝敗を、半日に決し給へること、誠に前代未聞にこそ候へ』

と申せば、岡江雪、亦、進み出で、

『唯今の有様、誠に天の明けたる心地仕つり候ひぬ、勝鬨を揚げ給ふべし』

と白す、家康、首を掉つて、肯かず、

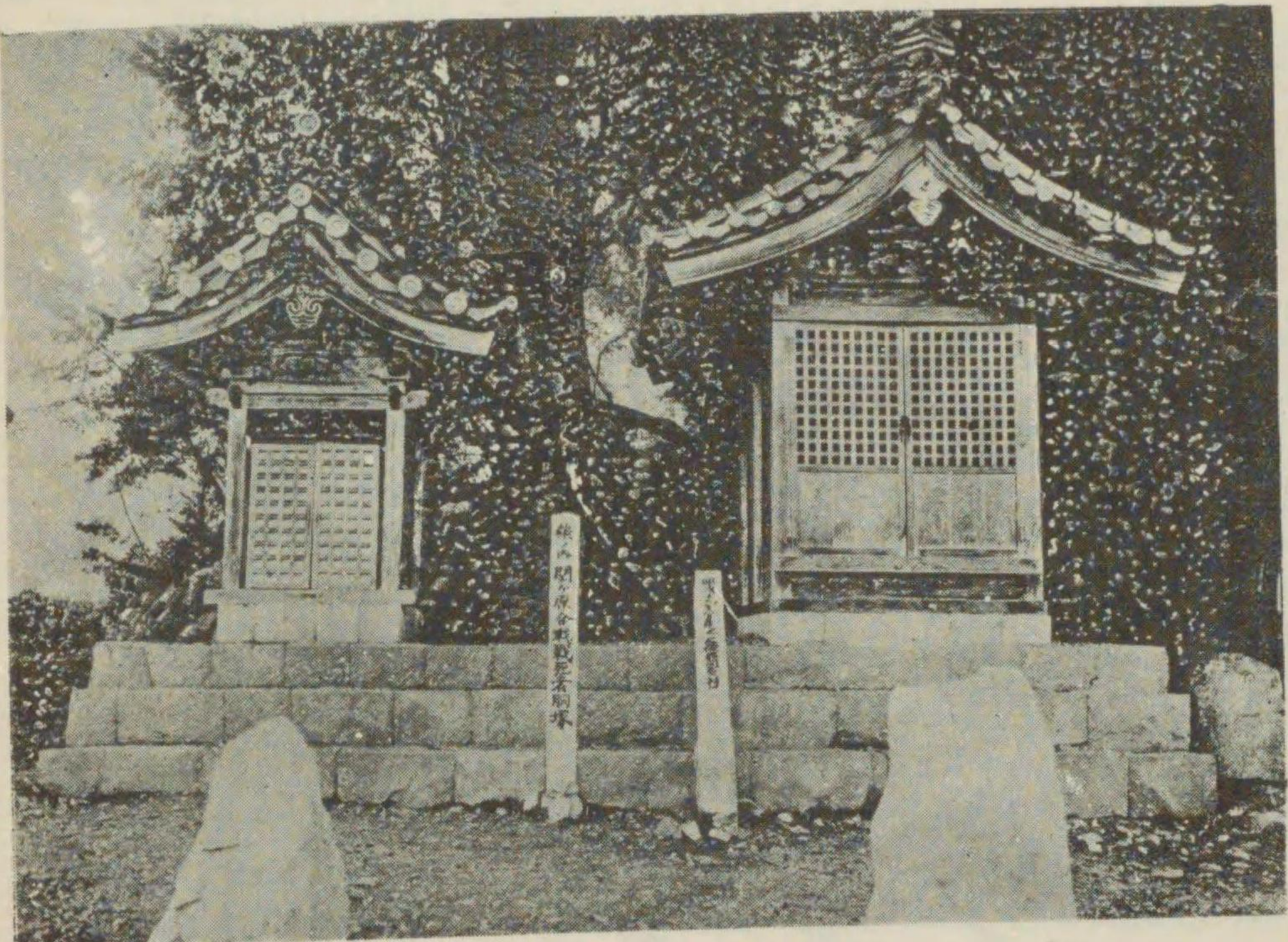
『イヤ〜、勝鬨は無用ぞ、家康、各々の働きに依つて、今日の勝利をこそ得つれ、其妻子、皆、大阪に在るを思へば、心苦しき、限りなし、追つ付け、人質を取り返したる上にて、揚ぐるこそ、然るべけれ』

と告ぐ、諸將、聞いて、涙を垂る。

諸將士、皆、來れども、秀秋、獨り來らず。

關ヶ原の胴塚

關ヶ原字柴井に在り關ヶ原役に於ける戦死者の胴を埋めし處塚上に一櫻樹を栽う



家康、乃ち村越直吉を遣はして招く。秀秋、喜びて、脇阪安治と與に來り、膝行しつゝ、家康の前に進む。正則、見て、長政に向ひ、『扱ても、金

吾殿の見苦しきよ』

と呼ばば、長政、亦、小聲にて、

『無理も候はじ、鷹の前の雉子に候ものを』

と評す、家康、秀秋を見て、胡牀を離れ、冑の緒をのみ解きて、

『金吾殿、弓矢の禮儀、神妙候』

と會釋すれば、秀秋、兩手を、芝の上に突きつゝ、戰捷を賀し、且、伏見攻撃の罪を謝す、家康、乃ち

『好き鹽合に、助勢せられて、軍功、莫大に候、逆もの事に、江州佐和山に、馳せ向ひて、彼の城を、攻め落し給ふべし』

と告げ、更に、安治に向ひて、

『中務殿、安治にも、力を添へ候』

と命ず、秀秋、乃ち佐和山を屠つて、前罪を償はんと欲す。吉川廣家、南宮山より、使者を長政の許に馳せて、

『秀元、參向候はん筈なれども、父輝元、大阪に候、子として、先んせんこと、儀に候はず、他日、御目通りの機も候はん』

と告げ、乃ち山を下りて、西に歸る、長政、正則の二人、秀元を留めて、人質となさんと欲し、間道より、馳せて、前路に廻り、宴を設けて、秀元を饗す。

秀元、脅力、群を抜く、態と、酔へる振りして、ガイと、正則の手を振り、

『何れ、大阪にて、御目に懸かり候はん』

と談り、其儘袂を拂うて去る。

此夜、家康、藤川の臺に宿す。

秀秋、安治等は、直に、佐和山に向ひ、直政、亦、尋いで發す。

其餘の諸軍、皆、野營を關ヶ原に張る。

風雨、山野を打つて、吶喊の如し、戦士、幾回か、夢や破らん。

六十六

江州佐和山は、三成の居城なり。

家康、一舉して、之れを抜かんと欲し、十六日拂曉、藤川の臺を發して、旗を磨針嶺に進む。

諸將、鳥居本より、二手に分れて、佐和山に向ふ、小早川

秀秋、脇阪安治、栃木元綱、小川祐忠等は、篝尾口に進み、田中義政、宮部長熙は、水之手口に進む、井伊直政、軍を監す。

佐和山の城中には、三成の父晴成あり、兄重成あり、子重家あり、重成の子朝成あり、岳父宇田貞頼あり、大阪の援兵長谷川守知、赤松則英、亦、在り。

關ヶ原の敗報を聞いて、皆、色を失ふ、

『關ヶ原の合戦、既に敗るゝからは、此城を守ればとて、何の益かあるべき、あたら、忠義の武士を殺さんは、不憫ぞ、只、我等のみこそ、討死すべけれ』

晴成、士卒を會め、旨を諭して、遣り還す、留まりて、與に死せんことを願ふもの、二千八百餘人。

乃ち部署を定む。

晴成等は、本丸を守り、山田上野介は、篝尾を守り、川瀬織部は、北の丸を守る。

東軍、既に、城に迫る、家康、更に、旗を城南野波村の平野山に進めて、戦を観る。

正午、秀秋の先鋒、先づ進んで、正門を攻め、鯨波を作つ

て、山下に迫る。

城將山田上野介、士卒を勵まし、銃を發し、弓を放ちて、拒ぎ戦ふ、秀秋の兵、倒るゝもの、算なし。

秀秋、意とせず、名馬白波に跨がり、自ら陣頭に進んで、指揮す、士卒勇奮、皆、屍を踰えて、突進す。

形勢、甚だ急なり、上野介、使を本丸に遣はして、援を求む。

晴成、乃ち長谷川守知、赤松則英を遣る、守知、初めより、意を東軍に屬す、是に至り、箭書を、秀秋の陣に送りて、内應を約す。

既にして、事、露はる。

晴成、怒つて、守知を殺さんと欲す、守知、水口より、遁れ出で、秀秋の陣に投ず。

秀秋の兵、益々迫る、上野介衆寡、敵せず、夜に乗じて、城を脱す、則英、乃ち退きて、本丸に入る。

吉政等、進んで、水之手口を攻む、川瀬織部等、能く拒ぐ。

吉政、士卒を鼓舞し、鯨波を作つて、猛撃す、織部等、亦、恐れて、本丸に退く。

直政、城中、漸く色めくを察し、船越景直を召して、

『城兵は、早、弱りし體なるぞ、疾く、馳せ往きて、諭し見よ』

と命ず、景直、乃ち馬を馳せて、城門の際に到り、櫓を見上げて、大音聲に、

『城中の方に、物申さん、津田清幽入道の在はさば、對面せん』

と呼はる、清幽は、曾て家康の幕下に屬せるもの、馳せて、晴成の許に至りて、故を告ぐれば、晴成、沈思すること霎時、

『兎も角も、出で、對面候へ』

と告ぐ、清幽、乃ち急ぎ出で、面會すれば、景直、

『治部殿には、既に、關ヶ原に於て、討死し給ひぬ、何時まで、此城を守り給へばとて、争かて、開運の時節候はん、大將分だけ、切腹し給はゞ、其餘の士卒、妻子は、盡く助命せられ候べし、篤と思案し給へかし』

と諭し、關ヶ原に於て捕へたる三成の銃隊長青木市左衛門を送りて、西軍敗績の證となす。

『左らば、大將と、評議致し候はん』

清幽、乃ち市左衛門を伴ひて、城中に入り、具さに、旨を晴成に告ぐ。

晴成、嘆嗟すること、稍々久し、頓て、清幽を以て、

『若し、城兵の命を助け給はゞ、明日、速かに、城を明け渡し候べし』

と答へ、景直、馳せ還つて、直政に報ずれば、直政、直に、使を馳せて、家康に申す。

城の運命、今や、且日に迫る。

會々城兵林庄右衛門、大音新助の二人、俄かに、叛きて、火を糧庫に縱つ。

秀秋、吉政等、之れを望み見、急に、諸門を破りて、侵入し、火を樓櫓に縱ちて、本丸に迫る。

城中、皆、驚き噪ぐ。

晴成、重成、重家、朝成等、復た奈如ともすべからず、乃ち天守閣に登り、妻子を手双して、自殺す。

三成の家臣土田桃雲、奥に駈け入つて、三成の妻子を殺し、晴成以下の死屍を、聚めて、火を縱ち、

『三界、固より、火宅なり、イデヤ、火中に投じて、最期を遂げん』

自ら腹を十文字に掻き切つて、臟腑を攫み出だし、其儘、火中に、躍り入つて死す。

貞頼も、亦、自殺す。

三成の一族、悉く亡び、城、乃ち陥る。

清幽、降を勧めらるれども、從はず、其子重氏等十一人と與に、突出し、安治の士を擒へて、質となし、悠然として、敵中を過ぐ。

家康、其勇を愛し、召し見て、慰藉し、盡く、之れを赦す。

家康、戍兵を、佐和山城に置きて、陣を永原に移す。

吉政をして、三成を搜索せしめ、正則、長政、幸長をして、京都を守衛せしむ。

六十七

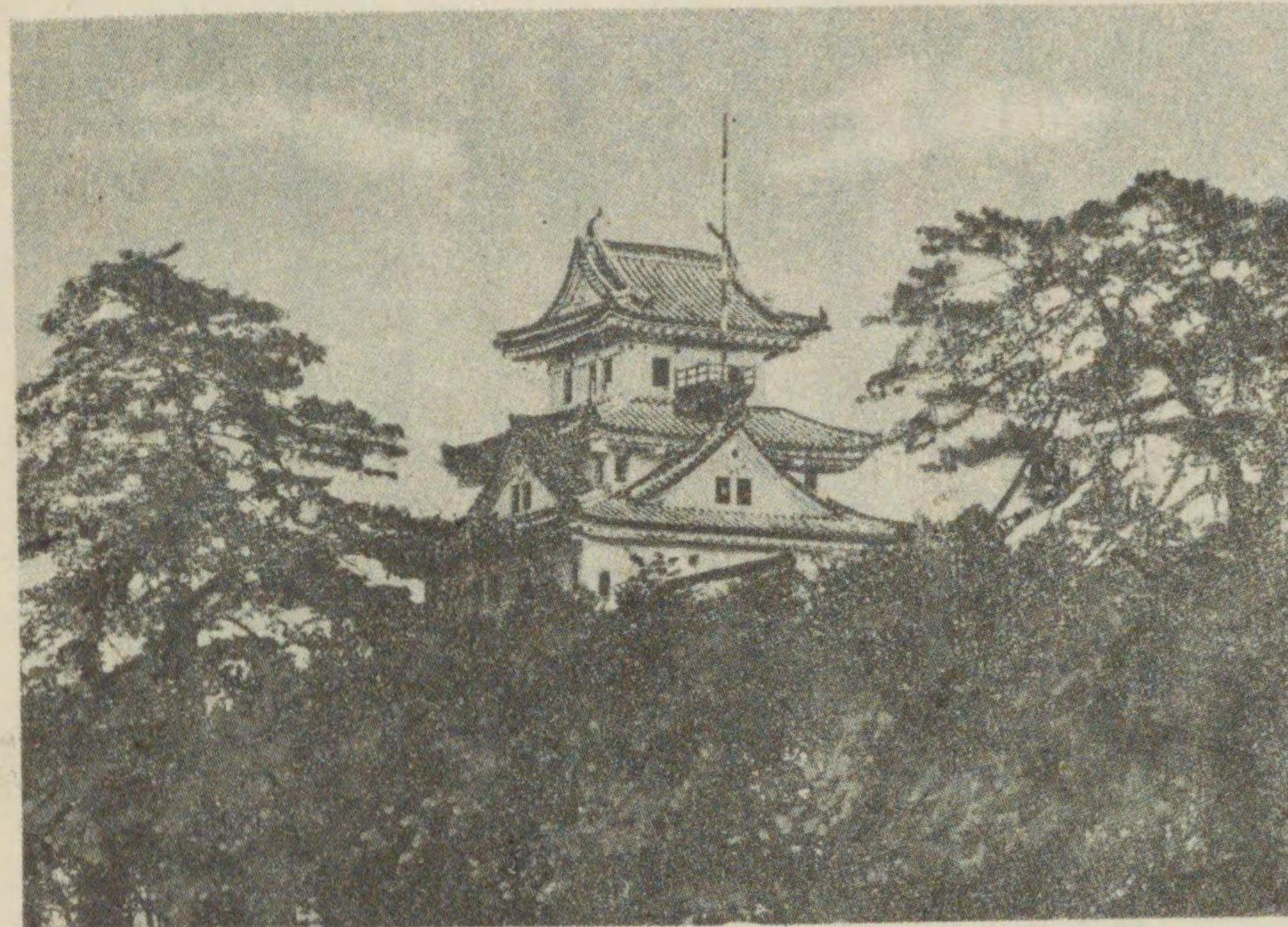
家康の關ヶ原に向ふや、西尾光教、水野勝成、留まりて、曾根の砦に在り、松原康長、津輕爲信、長松に在り、與に大垣の敵に備ふ。

勝成、從軍を乞へども、許されず、空しく、髀肉を撫して、

功名の期しがたきを嘆ず。

大垣城址

大垣城址は美濃國安八郡大垣町に在り關ヶ原役の當時石田三成の女婿福原長堯等の據守せし處水野勝成等攻めて之を抜く



十四日の夜、

領家村の郷

士久世助兵

衛、會根に

來つて、光

教に向ひ、

『石田、

浮田、島

津、小西

の面々、

今宵、皆、

關ヶ原に

赴き候ひ

ぬ、大垣

に残れる

ものは、

何程も候

はず』

と言へば、光教大に喜び、

『左らば、大垣を攻め取らん』

急ぎ勝成を招きて、其事を語る。

勝成、欣然として、躍り上り、

『イザ續き給へ、我れ、先づ進み候はん』

助兵衛を嚮導として、直に發す。

光教、此れに續く。

康長、爲信、亦、聞いて、出軍す。

人馬、皆、雨を衝いて進む。

十五日黎明、勝成、樂田の砦を衝きて、島津義弘の殘兵を

驅逐し、更に、進んで、傳馬町口を攻む。

大垣の城兵七五百人、福原長堯、熊谷直陳、本丸を守り、

垣見一直、木村勝正、其子豊綱、相良頼房、二の丸を守り、

秋月種長、高橋元種、三の丸を守る、東軍不意に迫るを見

て、俄かに、守備を整ふ。

城兵神谷金七、門を開いて、出で戦ふ、忽ち、丸に中りて

退く。

勝成の部下、透かさず、之れを逐ふ。金七、早くも、門を

鎖して、入れず、乃ち門を踰えて、入らんとす。

城兵、槍を揮うて、突いて落す。

勝成の家臣河村縫殿助、向井登之助、河村新八等、勇を勵

まして進む、鈴木與八郎、同じく小右衛門、中山將監、神

谷久右衛門等、亦、續いて進み、終に城門を破つて、突入

す。

城將相良頼房の部下、殊死して、拒ぎ戦ふ。

勝成、自ら槍を捻つて、遮ぎる敵を、突き伏せし、士卒

を勵まして、二の丸に迫る。

與八郎、久右衛門等、奮戦して、敵を倒す、上田清兵衛、

松浦六兵衛等、亦、續いて、進み戦ふ。

六兵衛、敵の首を提さげて、縦横に、馳せ戦ふ、忽ち、敵

弾に中りて倒る。

城將木村勝正、手兵を率ゐて、突出し、槍を揮うて、奮ひ

戦ふ、追ひつ、返しつ、七たび進み、七たび退く。

斯かる處へ、光教、士卒を率ゐて、突進し來り、鯨波を發

し、銃を放つ、其家臣小寺半兵衛、

『當手の一番乗り』

と高く名乗りて、塀に攀ち上る、忽ち、敵の亂槍に刺され

て、倒れ落つ。

戦闘、益々烈し。

康長、爲信、亦、兵を驅つて、北門に迫る、門扉、固く鎖

されて、入る能はず。

康長、銃手に對して、勵聲一番、

『塀を打ち壊はせよ、打ち破れよ、人を打つのみが、銃

の用かは』

と疾呼すれば、銃手、臺尻を以て、一齊に、塀を打つ、塀、

破れ崩る、こと五六間、

『ソレ突き入れよ』

衆卒、吶喊して、三の丸に、頽れ入り、勝成等と相應して、

敵を撃つ。

城兵、盡く二の丸に退きて、固く守る。

勝成等、急に、力取すべからざるを察し、兵を收めて、城

外林村に退き、火を縦ちて、街市を焼き拂ひ、直ちに、捷

を家康に報ず。

捷報、關ヶ原開戦の前に達す、家康、喜ぶこと限りなし、黄金一枚を、使者に與へて、遣り還す。此夜、城將相良頼房、秋月種長、高橋元種、密に、書を勝成、康長に贈りて、

『本領安堵の神文を、賜はらば、本丸、二の丸の諸將を殺して、降參致し候はん』

と請ふ、二人、使を遣はして、家康に報ず、家康、乃ち誓書を與へ、且、中村一榮、横田内膳を派して、勝成等を、援けしむ。

十八日、頼房等、相謀り、使を諸將の陣に遣はして、

『軍議の候、此方の陣所へ、集まり候へ』

と告げ、兵を伏せて待つ。

長堯、疑うて、來らず。

一直、直陳の二人、直に來る、伏兵、矢庭に起つて、之を殺す。

勝正、出で、一直、直陳の營を訪はんとす、頼房等の部下、襲うて、此れを殪す。

是に於て、東軍の諸將、進んで、本丸を攻む。

長堯、殘兵二百五十人を率ゐ、橋を撤して、拒ぎ守る。勝成等、其兵を損せんことを慮れ、二十三日、禪僧を遣はして、降を諭す。

長堯、乃ち髪を削りて、城を出で、朝熊山に至りて、罪を待つ。

勝成、光教等、長堯を赦さんことを乞ふ、家康、其三成の女婿たるを以て、許さず、二十八日、使を遣はして、死を賜ふ。

六十八

義弘、漸く虎口を脱し、多羅の山中より、五僧鬼燈の嶮を越えて、高宮河原に達す、殘兵、僅かに五十餘人。

士卒、皆、疲れ、且、飢ゆ。

義弘、命じて、食を求む、村民、皆、避けて、山林に潛み、家に留まるもの、一人もあらず。

士卒、食物を得ず、皆、手を空しくして、還り來れば、衆、皆、望みを失ふ、義弘、徐かに、

『牛はなきや、馬は居らずや』

と問へば、士卒、皆、

『牛馬な

らば、數

多、小屋

に繋ぎ居

り候』

と答ふ、義

弘、

『其は、

無類の食

物ぞ、疾

く、曳き

來れ』

と命ずれば、

士卒、復た

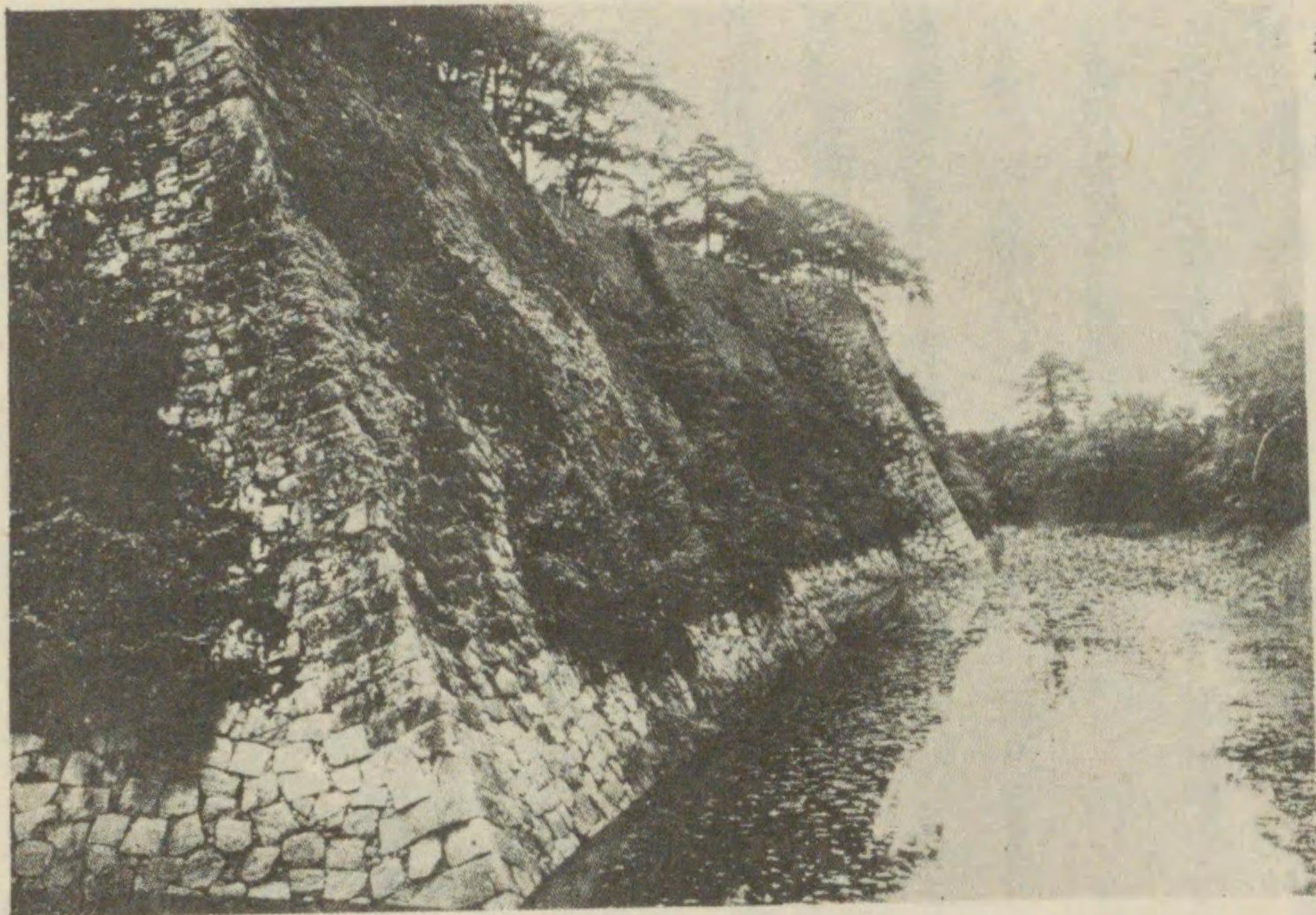
馳せて、牛

數頭を、曳

き來る、

上野城址

上野城址は伊賀國阿山郡上野町に在り關ヶ原役の當時簡井定次の居城たり島津義弘退去の途中旗鼓堂々として通過せし處



『ソレ撃ち殺せ』

直に、之れを屠り、刀を抜き、肉を劈いて、食す。

衆、氣力、始めて復す、乃ち復た進んで、甲賀谷に入る、

一老翁あり、義弘、命じて、之れを捉へ、

『伊賀への道を知らん、イザ、案内せよ』

諭して、嚮導とし、水口、三代寺、信樂を過ぎて、伊賀の上野に達す。

上野は、東將簡井定次の居城なり、義弘、潛かに、過ぐるを屑しとせず、乃ち使を城中に遣はして、

『島津兵庫頭義弘、唯今、御城下を罷り通り候、ヨモ、無事には通し給ふまじ、弓矢の禮義、一槍致し候はん』

と告ぐ、時に、定次、關ヶ原に在り、留守の士、敢て、取り合はず、義弘、乃ち旗鼓堂々として、城下を過ぐ。

會、土寇五百人、山中に屯す、義弘の兵を見て、

『素破や、落人ぞ、アレ討ち取れや』

と薙き、弓を發し、銃を放ち、手に、竹槍を揮うて、道を遮ぎる。

義弘、見るより、赫と怒りて

『奇怪なる土民原の振舞ひかな、一人残さず、撫で斬り

にせよ』

と令し、ドツと、喚いて、群がる敵中に、躍り入り、矢庭に、數十人を、斬つて落す。

餘衆、皆、駭き散ず、宛ら、蜘蛛の子を、散らすが如し。

義弘、逃げ後れたる二人を捉へ、直ちに、引き還して、上野に來り、追手の門前に、首を梟け、捕虜をも縛し、矢立を取つて、其傍に

『島津義弘の歸國を妨ぐるに依つて、此の如くせしめ畢んぬ』

と書き記し、復た悠然として、立ち去り、十七日の朝を以て、南都に入る。

嚮導の老翁に、赤銅の弁を與へて、

『之れを證として、鹿兒島に、尋ね來よ、必ず、厚く報ゆべきぞ』

と告げて、暇を與ふれば、老翁、喜び辭して、國に還る。

老翁、後、人に誘はれて、鹿兒島に抵れば、など疾く來らざりしぞと、厚く之れを饗し、黄金五百枚を與へ、尙、誘へるものにも、黄金を與へて、送り還す。

義弘、其後、大阪に入りて、敗兵を集め、使を城中に遣はして、

『若し、關東の軍を、引き受けて、戦ひ給はゞ、義弘、亦、城に入りて、守り候はん』

と通ずれども、輝元、敢て答へず、義弘、慨然として、

『扱て〜、頼み甲斐なき人心よな』

と嘆じ、直に、大阪に在りし妻孥を收め、毛利家の船を奪うて、日向に還る。

義弘の兄義久、見るを許さず、之れを櫻島に幽して、罪を家康に謝す。

家康、復た兵を動かすを欲せず、乃ち宥して、敢て問はず。

六十九

三成、行長、秀家等の消息、杳として、知るべからず、吉政、物色すること、甚だ急なり。

行長、伊吹山より、忍び〜て、美濃國池田郡粕川谷に抵る。

山高く、谷深し、松杉、枝を交へて、晝も、尙、暗し。

行長、但ある辻堂の中に入れば、敗兵の既に來りて、隠る

るもの十餘人。

既にして、人聲聞え、足音騒がし、頓て、辻堂の前にて、止まる、

『素破や、追手ぞ』

堂内の面々、互に、顔を見合せて、言葉なし。

忽ち、外に聲あり、

『此中に、落人ありと覺ゆるぞ、ソレ取り圍めよ』

と言ふと齊しく、バラ〜と、堂の四方を、取り巻き、

『落人、出で候へ、出でずば、焼き殺し候ぞ』

と薙めきつ、枯枝、枯草を、運び來つて、積み重さぬ、

『今は、遁れぬ所ぞ』

行長、乃ち意を決して、外に出づ。

會、一人の僧、あたり在り、行長、手を舉げて、魔ねき、

『そこなる人、來候へ』

と呼べども、僧、逡巡して、進まず、

『要らざる我れへ、御用を仰さんよりは、疾く〜、何方へなりとも、御落ち候へ』

と答ふ、行長、聞き入れず、尙も、

『兎も角も、近くへ、寄り候へ、申すことあり』

頻りに、促がすこと再三。

僧、是非なく、傍に進み寄り、

『何の御用に候ぞ』

と言へば、行長、

『其方は、何者ぞ』

と問ふ、僧、

『某は、關ヶ原のものにて、相川林藏主と申し候、合戦の恐ろしさに、此處に、立ち退き居り候なり』

と答ふれば、行長、

『さらば、知らさん、我れは、小西攝津守なり、合戦敗

れて、斯かる身の上となりつるぞ、其方、徳川殿の本陣

に、連れ行きて、褒美に預かり候へ』

と告ぐ、林藏主、驚きて、目を睜はりつ、

『扱ては、然る御方にて渡らせ候か、少しも、早く、落

ちさせ給へ』

手振りをもて、促がし立つ。

行長、首を掉りて、聞かず、尙も、

「人は、我れを、卑怯者とや思はん、されども、我れは、吉利支丹の宗門なり、宗門の法、自殺を許さざれば、生害せんに、由なし、疾く、連れ行き候へ」と促せば、林藏主、今は、是非に及ばず、

「某、見遁がし参らすとも、土地の者共、ヨモ、逃がし奉らじ、さらば、仰せに従ひて、御供仕つり候べし」直に、行長を伴うて、立ち去り、人を若手に馳せて、領主竹中重門に報ず。

重門の家臣伊藤次左衛門、後藤市左衛門、急ぎ、人数を率ゐて、馳せ來り、行長を護りて、岩手に還る。

十九日、家康、進んで、八幡に到る、次左衛門等、乃ち林藏主と與に、行長を、草津の營に送る。

家康、黄金十枚を與へて、林藏主の勞を賞す。

七十

三成、遁れて、伊吹山に入るや、近臣磯野平三郎、渡邊勘平、鹽野清助の三人、隨ひ來る。

三成、三人を、近く招きて、

「是まで、付き隨ふ志、神妙ぞ、されども、斯く落人と

なりては、多勢は、却つて、便、悪し、只今限り、三人共に、暇を遣はすべければ、何方へか忍びて、時節を待てよかし、我れ、再び旗を揚げしと聞かば、早々、馳せ來つて、忠節を盡し候へ」

三人、顔を見合せて、暫し、言葉なし、稍、ありて、

「仰せは、然ることながら、我等は、冥土黄泉までも、御供仕つらんと存じ候ものを、争かて、君を見捨て奉つりて、姿を隠され候べき、何處までも、御供仕つりて、御先途を、見届け奉つり候べし」

と述べ、何れも、固く思ひ極めて、立ち去らん氣色もなし。

「面々の志は、忝けなきも、其方共を、召具すれば、誰か落人と思はざらん、斯くては、却つて、我れの不爲めぞ」

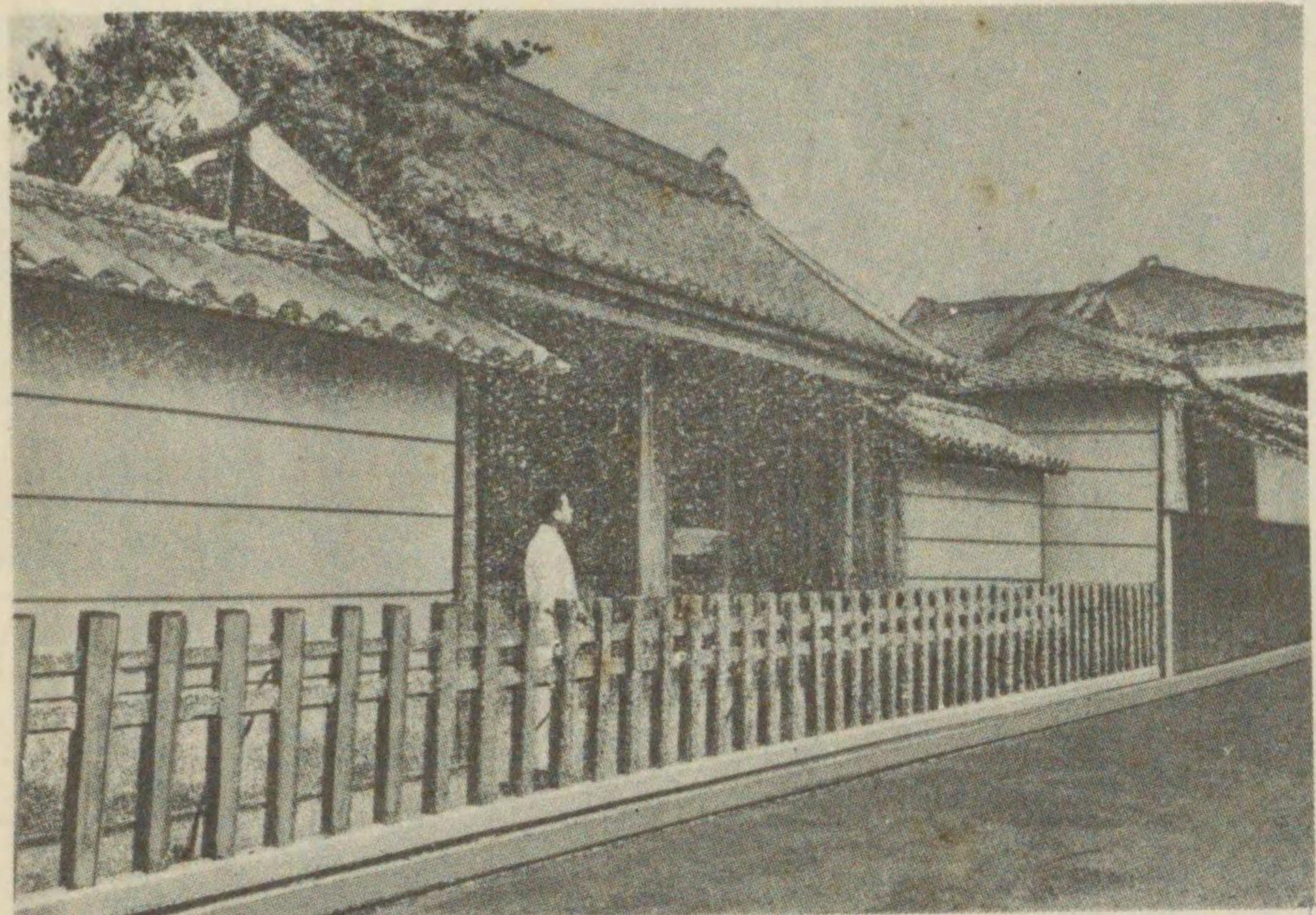
三成、怒りに諭せども、尙、從はず、

「さらば、此處にて、自害仕つり、面を剃ぎて、御心安く、落し参らせん、御紋付の服を、賜はり候べし」と述べて、一死、其主に代らんと欲す。

三成、思はず、顔を背向けて、涙を吞む、

「扱て、深き心入れ、感ずるに餘あり、されども、

佐和山城の舊門
此れは佐和山城の舊門なり京都紫野大徳寺三玄院の南門に移したるに明治三十六年更に大阪市北野茶屋町元鶴の茶屋に移す



此處に果てたればとて、何の益もあらず、我れは、如何にもして、大阪に赴き、毛利、増田等と謀つて、再び旗を擧ぐべければ、其時、又々、忠勤を勵まんこそ、我れの望みなれ、強ゐて、聞き入れずば、我れ、此處に

て、自害するの外あらず」

退引させぬ最後の一言、今は、背かん由もあらず、

「此上は、兎も角も、仰せに従ひ候はん」

泣く、暇を告げて去る。

「今は、心安し」

三成唯一人、忍び、佐和山に向ふ。

樹の下に隠れ、岩の陰に伏すること三晝夜、十八日に至りて、遙かに、佐和山の方を見れば、黒烟、高く立ち騰る、

「扱ては、早、落城に及びたるか、ア、是非もなし」

力なく、又も伊吹山の奥に、分け入り、甲冑を脱ぎ捨て、古びたる蓑笠を着し、草刈の體に裝うて、トボくと、辿り行く、身は、飢ゑに飢ゑて、眼も、眩まんばかり、

「責めて、是れなりとも」

行く、稲の穂を、摘みて食し、木の實を、取つて啖ふ。忽ち、腸を害し、腹痛み、熱出で、下痢、頻りに催はして、堪へがたし。

兎角して、郷里なる淺井郡脇坂村に達す、

「故郷も、今は、敵地なり、晝、歩かんば、最と危し」

三成、生ひ茂れる芦の中に、潜みて、日の暮るゝを待つ。
三重院と云ふは、幼時、手習を學びたる由縁あれば、夜に
乗じて、密かに、尋ね行き、ホト〜と、戸を敲きて、
『我れは、石田治部少輔なり、幼き時の由縁も候、暫し、
我れを匿まひ給へ』

と乞へば、住僧、イヤ〜と、首を掉りて、肯かず、
『君の此寺に由縁あること、人々、能く知りて候、斯か
る場所に、忍び給はんは、不覺にこそ候べけれ、斯く申
すも、御身の爲めを、思へばに候ぞかし、人目に觸るれ
ば危し、疾く〜、立ち去り給へ』

情なくも、引き立て、門外へ、押し出だす。
三成、頼む樹陰に、雨漏りし心地しつ、惘然としてイむこ
と、稍々暫し。

頓て、漸やう、我れに返り、更に、善住院と云ふに、訪ね
行く。

折りよくも、相識の僧あり、三成の状を見て、思はずも、
涙を垂れつゝ、

『暫時の御休息は、苦しからず、されども、田中兵部大

輔殿の詮索、嚴しければ、長居は、御身の爲めに、然る
べからず』

と告げ、藥を與へて、懇ろに憫はる。
三成、此處にも、足を留めがたし、虎の尾を踏む心地しつ
つ、又も、寺を出で、當途もなく、其處此處と徨ふ、足
は疲れ、腹は痛みて、今は、一步も、移しがたし、田の畦
に倒れて、悶へ苦しむ。

天、明くれども、身を起さんに力なく、尙、倒れたるまゝ、
其處に在り。

斯かる所へ、誰れやらん、近づき來る。

『今は、是れまでぞ』

三成、キツと、覺悟を定めて、運を天に任す。

七十一

足音、愈々近づくと、見れば、一人の農夫なり、

『ハテ、見た顔なるが』

三成、忽ち、思ひ浮びて、

『コレ〜、其許は、與次郎太夫にあらずや』

と聲を掛く、彼の男、チツと、三成の顔を、見詰むること

少時、頓て、ハラ〜と、涙を濺ぐ、

『扱ても、淺間しき御身の有様かな、斯くならせ給へば
こそ、賤しき我等にも、言葉を掛け給ふなれ、空腹にや
在はず、病氣にや罹り給へる、兎にも角にも、我が家へ、
御供申し候はん』

餘りの憫はしさに、捨て置かれず、病み疲れたる三成を、
扶け〜て、伊香郡古橋村なる自宅に、連れ歸り、

『コレ〜、此御方こそ、常々、申せし石田治部少輔殿
にて在はずなれ、努め、人にな漏らしそ』

妻と與に、扶けて、屋後の窟の中に隠し、懇ろに、看護に、
力を盡くす、

『實にや、地獄で、佛とは、此事ぞ』

三成、深く、打ち喜ぶ。

これぞ、三成の幼時、三重院に通へる頃より、知り合へる
男なる。

三成、此處に在ること兩日。

村民、又右衛門なるもの、早くも、ソレと聞き知りて、與
次郎太夫の宅に、入り來り、

『與次郎殿、御身は、關東方へ敵對したる張本人を、匿
まひ置くと申す噂ぞ、此事、若し、外より、相知れなは、
御身は、言ふに及ばず、村中、皆、盡く難儀に及び候ぞ
や、疾く〜、追ひ出し給ふべし』
と告ぐ、與次郎太夫、扱てはと、心に驚けども、態と、然
り氣なき振りにて、

『努め〜、左様のこと候はず、必ず、御氣遣ひあるべ
からず』

種々に言ひ拵へて、又右衛門を還へし、密かに、窟の中に
到りて、

『最早、此處に忍び給はんことも、叶ひ候はず、何處へ
なりとも、落ち行き給へ、大切の御身を、敵の手に懸か
り給はんこそ、口惜しう候へ』
と叫く、誠實の心、辭色に露はる。

三成、首を左右に、打ち掉りつゝ、

『其許の好意、謝するに言葉なし、されども、我が運命
の盡くる所、腹痛、以ての外に、烈しくして、一步も、
進みがたし、田中兵部大輔の詮索嚴しと申せば、頓て、

捜し出されん、早く、兵部の許へ、訴人に出でんこそ、然るべけれ』

と諭せば、與次郎大夫、

『扱てく、言ひ甲斐なきことを、承はり候ものかな、其儀ならば、何時までも、此處に在はし給へ、萬事、好きに計ひ候はん』

と答へ、尙も、三成を匿まはんとす。

既にして、里正、村民數名を率ひて來り、

『扱てく、大膽不適の男かな、疾く、石田を出せ、出さずば、汝を連れ行かん』

と罵りつ、將さに與次郎大夫を、捕へんとす。

三成、聞いて、窟の中より、匍ひ出づ、

『我れこそ、治部少輔なれ、與次郎大夫に、罪なし、赦し遣はし候へ』

と言へば、里正、扱てこそと、直に、人を井ノ口に馳せて、

田中吉政に報す。

吉政の家臣田中傳左衛門、能く三成を識る、吉政、乃ち傳左衛門を召して、

と促せば、傳左衛門、乃ち轎に扶け乗せて、連れ還る。

七十二

吉政、頓て、三成に對面して、慇懃に、

『此度、上方の諸將を、手に付けて、勝負を争ひ給へるこそ、誠に末代までの聞えに候なれ、勝敗は、戰の常に候、只一戰に、打ち負け給へばとて、何の御遺憾か候はん』

と會釋す、三成、身、震るれども、氣力、衰へず、坐上の柱に、凭り懸かりつ、莞爾として、打ち笑みつ、

『我れ、故太閤の重恩を蒙むること、山より高し、御幼君の御爲めに、害を除きて、聊か太閤の御恩に報ひ奉つらんと思ひしに、運、盡きて、斯くなり果てしこと、復た何をか悔み候べき』

と答へ、懷中より、一口の脇差を、取り出だし、

『これは、故太閤より、賜はりし切刃貞宗の名刀にて、片時も、肌身を離したることあらず、田兵、イザ筐として參らせん』

と告げて、吉政に與ふ、三成、平生、吉政を呼んで、田兵

と命ず、傳左衛門、直に、馬を驅つて、古橋村に到り見れば、紛れもなき三成なり、

『田中傳左衛門、御迎ひに參り候』

と言へば、三成、徐かに、傳左衛門の方を見遣り、

『オ、傳左衛門、久し振りぞ』

と告げて、更に、驚く状もなし、稍、ありて、傳左衛門に向ひ、

『木工頭、石田重成は、如何體に候ぞ』

と問へば、傳左衛門、愁然として、

『御憫はしう候、奥方、公達を、手に懸けて、御生害なされ候ひぬ』

と答ふ、三成、聞いて、頷ぎきつ、

『それにて、ザツと、濟みたるぞ、我等も、斯く逃げ隠くる、こと、本意にあらず、只、如何にもして、大阪の城に入り、今一度、旗を揚げんと、思ひたればこそ、今日まで、存へたるなれ、イザ往かん』

『汝、疾く、往きて見よ、愈々治部少輔ならば、搦め來れ』

と命ず、傳左衛門、直に、馬を驅つて、古橋村に到り見れば、紛れもなき三成なり、

『田中傳左衛門、御迎ひに參り候』

と言へば、三成、徐かに、傳左衛門の方を見遣り、

『オ、傳左衛門、久し振りぞ』

と告げて、更に、驚く状もなし、稍、ありて、傳左衛門に向ひ、

『木工頭、石田重成は、如何體に候ぞ』

と問へば、傳左衛門、愁然として、

『御憫はしう候、奥方、公達を、手に懸けて、御生害なされ候ひぬ』

と答ふ、三成、聞いて、頷ぎきつ、

『それにて、ザツと、濟みたるぞ、我等も、斯く逃げ隠くる、こと、本意にあらず、只、如何にもして、大阪の城に入り、今一度、旗を揚げんと、思ひたればこそ、今日まで、存へたるなれ、イザ往かん』

と答ふ、三成、聞いて、頷ぎきつ、

『それにて、ザツと、濟みたるぞ、我等も、斯く逃げ隠くる、こと、本意にあらず、只、如何にもして、大阪の城に入り、今一度、旗を揚げんと、思ひたればこそ、今日まで、存へたるなれ、イザ往かん』

田中兵部太輔の略語と云ふ、此期に及ぶも、尙、改めず。

吉政、更に、三成に向ひ、

『御氣色以ての外に見え候、服薬し給ふべし』

と言へば、三成、徐かに、

『斯かる身の上にては、薬も、無益なり、構へて、用ひ候まじ』

と答ふ、吉政、重ねて、

『御最期に至り、氣力、弱くては、然るべからず、枉げて、御養生候へ』

と言へば、三成、

『さらば、此頃、腹あし、菲雜炊を賜ふべし』

吉政、乃ち家臣に命じ、直に、調へて、三成に進む、三成、

快よく、數椀を喫して臥す。

駒々たる軒聲、囚裏の人にも似ず。

七十三

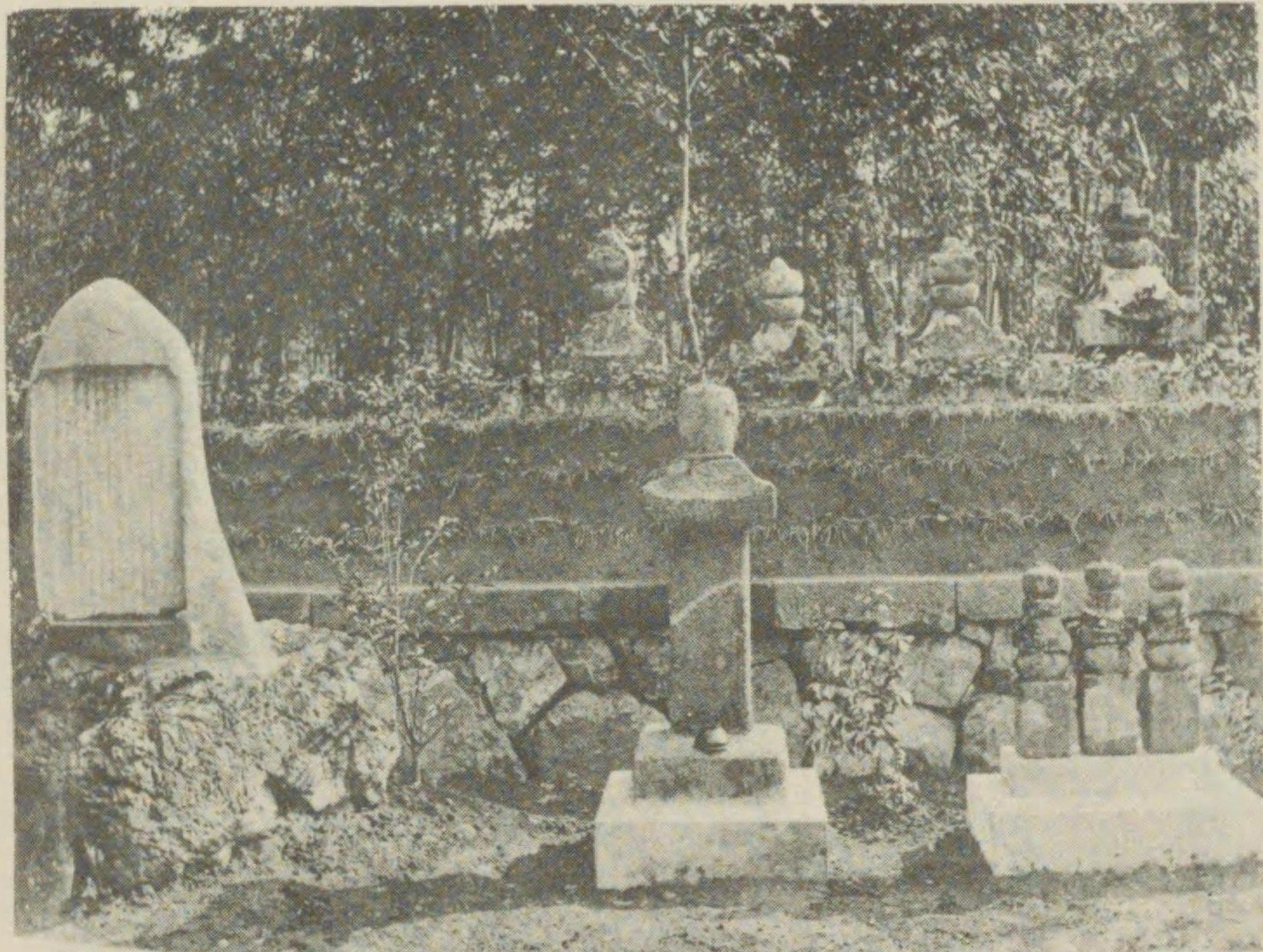
家康、進んで、大津に次す。

吉政、乃ち三成を護りて、大津に來る、疊を本營の門外に、

敷きて、坐せしめ、

『暫し、御控へ候へ』

石田三成の墓
京都市上京区紫野大徳寺に在り中央なるは三成の墓
右なるは妻子の墓にして左なるは碑石なり。



と告げ、直に入つて、状を家康に白す。斯る所へ、福島正則、浅野幸長、細川忠興、其他の諸將、續々、來りて、三成の前を過ぐ。諸將、戦捷ちて、

意氣、昂がる。

正則、傲然として、馬上より、三成を見遣りつゝ、

『其方、要らざる騒動を、起したればこそ、斯かる身の上とはなれるなれ』

と言へば、三成、忽ち、色を作しつゝ、

『己れを召し捕つて、我が如くに、繩を掛け得ざるは、天命ぞ』

憤然として、罵り返へせば、正則、言葉もなくして、中に入る。

少し後くれて、黒田長政、亦、來る、三成を見て、馬より、飛び下り、

『扱てくゝ、斯かる身の上となり給へるこそ、不運なれ、寒うや在はさん、是れなりと召さるべし』

自ら羽織を脱して、着せて去る。

三成の噂、營中に喧すし、小早川秀秋、出でて、三成を見んとし、

『治部少輔は、憎き仁なり、イデ往きて、見候べし』

と言ひつゝ、直に、座を起たんとす、忠興手を舉げて、制

し止む、

『要らざる儀に候、思ひ止まり給へ』

と制し止むれども、血氣の秀秋、聽き入れず、

『憎きものは、見たう候ぞ』

と言ひつゝ、其儘、往きて、物の陰より、窺ひ見る。

三成、敏くも見認めて、心血、俄かに湧く、

『己れは、日本一の卑怯者ぞ、約束に背き、義理を捨てて、裏切りせるこそ、實に、末代までの笑草なれ』

と言葉鋭く、罵れば、秀秋、赤面しつゝ、走り去る、是れより、終に、心すぐれず。

七十四

稍々ありて、家康、親しく、三成を、延き見て、

『不運にして、斯かる身となるも、サラく、耻辱に候はず、古より、例多きことに候ぞ』

と言葉穩かに、慰むれば、三成も、亦、心、打ち解け、

『天運の然らしむる所にこそ候へ、此上は、疾くく、首を刎ねられ候へ』

と述べて、少しも、悪びれたる状あらず。

家康、後にて、左右に向ひ、

『三成は、流石に、大將の器量なり、平宗盛などゝは、大なる違ひぞ』

と語り、鳥居成次を召して、

『治部は、其方が父元忠の敵ぞ、思ふ仔細あれば、其方に、預け遣はす』

と告げて、三成を引き渡せば、成次、ハツと、首を下げつゝ、

『御誼、有りがたく、存じ奉つる』

と答へて、直に、三成を連れ歸り、一夜、留め置きて、手厚く饗應し、更に、恐める色もあらず。

三成、亦、感涙を流して喜ぶ。

翌朝、成次、家康の前に出で、

『御誼に依りて、一夜、預かり候ひぬ、去りながら、父彦右衛門は、公儀に依つて、一命を、差し上げ候へるもの、石田に對して、私の遺恨あるべき道理候はず、天下の御敵にて候へば、外々へ預け給ふべし』

と白せば、家康、深く、其志を感じ、更に、三成を、本多

正純に預く。

七十五

正純、或時、三成に向ひて、
『秀頼公、御年若う在はしませば、大老、奉行、心を協はせて、天下泰平の道を、計り給はんこそ、然るべきに、由なき軍を起して、斯かる耻辱を、取り給へるこそ、淺間しき限りに候なれ』

と言へば、三成、屹と、容を改めつゝ、

『我れ、土民より昇りて、一城の主となりたるもの、是れ、皆、故太閤の御恩にあらずや、熟々世の有様を観るに、徳川殿を滅ぼさずんば、豊臣家の御爲めになるまじと思ひ、秀家、景勝を始め、皆、同心なかりしを、強ひて、勧めて、此度の軍を起し候ものぞ、戦ひに臨んで、裏切りのもの出で、勝つべき軍に、打ち負けしこそ、口惜しけれ、二心あるものだになくば、御邊達を始め、皆、我れの如くならしめたらんものを、見候へ、運盡きぬれば、九郎判官も、衣川にて、滅び候はずや、我れの打ち負けたるも、天命に候ぞかし』

と答ふ、正純、重ねて、

『智將は、人情を計り、時勢を知るところ申せ、諸將の同心せざるをも知らず、軽々しく、軍を起し給へるこそ、不覺にて候へ、軍、敗れて、自害をもせず、暗々と、生捕りとなり給へるは、抑も如何なる御量見に候ぞ』
と問へば、三成、冷然として、正純を見遣りつゝ、

『扱て、御邊は、露ばかりも、武略を心得ざる人かな、腹切つて、人手に掛からじとするは、葉武者の事ぞ、頼朝公の、土肥の杉山に於て、朽木の空洞に隠れしは、如何なる心と思はる、ぞ、若し、其時、大庭に搦められなば、御邊如きに笑はれ候ことよ、大將の道を語るとも、御邊の耳には入り候まじ、最早、物をな申されそ』
と告げ、空嘯きて、復た言葉を交はさず。

七十六

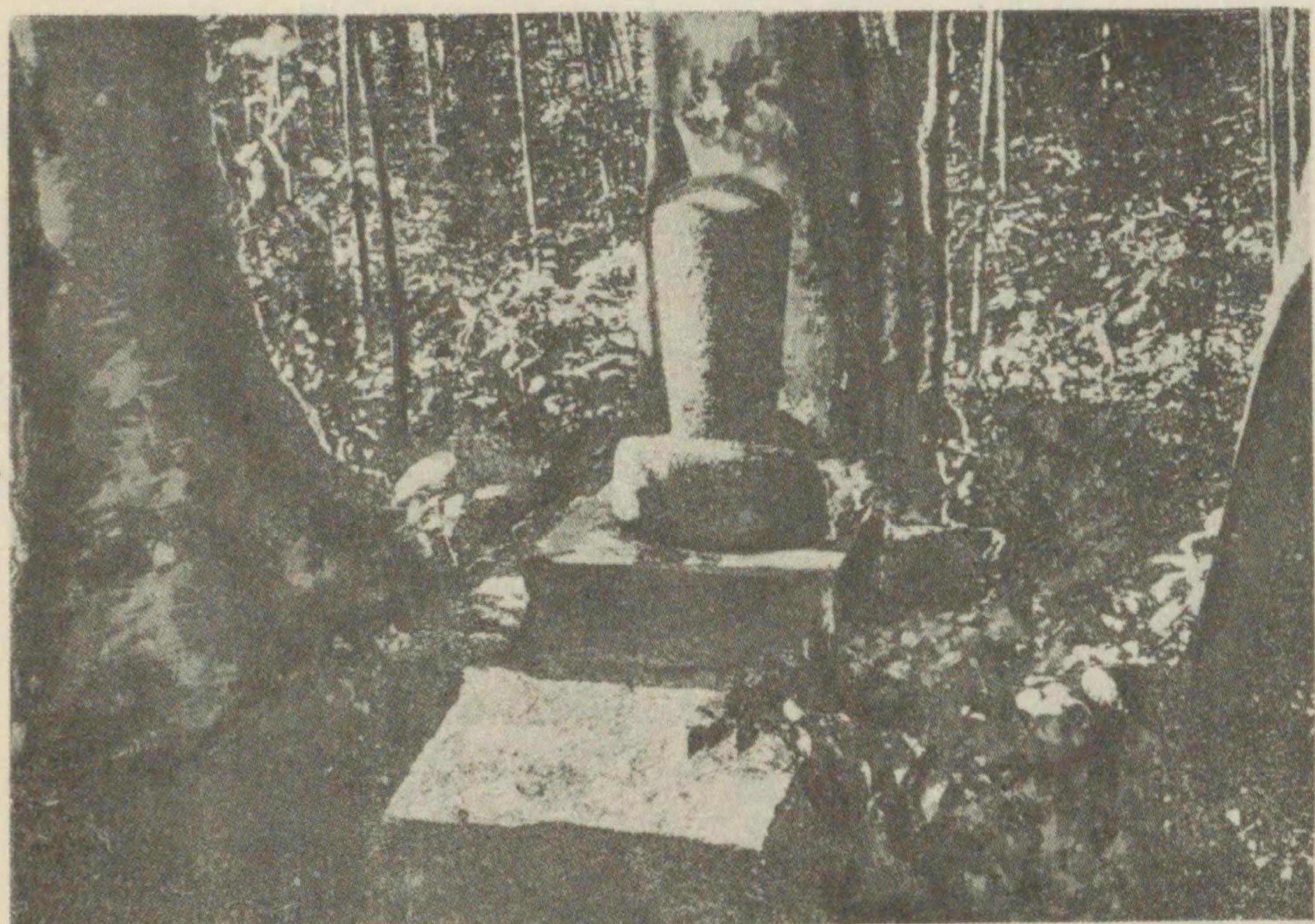
安國寺惠瓊、關ヶ原を遁れて、江州に入り、更に、毛利秀元に頼らんとす。

會々秀元の款を東軍に通ずる由を聞き、望みを失ひ、鞍馬に走りて、潜かに、月照院に匿くる。

此處も、亦、安全の地にあらず、又去つて、六條の邊に隠

くる。

安國寺惠瓊の首塚
京都市東山區大路の四條下ル建仁寺方丈の北手なる竹林中に在り



江州の人樂鎮なるもの、其主佐々木義郷の讒せられたる爲め、惠瓊を怨むこと、甚だし、其所在を聞き知りて、大に喜び、直に、馳せて、所司代奥平信昌に訴ふ。信昌、乃ち家臣鳥居庄

右衛門を召して、

『疾く、安國寺を、搦め來れ』

と命ず、庄右衛門、十六歳なる嫡男孫三郎と與に、部下を率ゐて、六條に向ふ。

惠瓊、早くも、其れと察し、轎に乗りて、遁れ走る、家臣平井藤九郎、長坂長七の二人、前後に、付き隨ふ。

庄右衛門、ハタと、途にて、行き逢ふ、

『アレこそ、安國寺ぞ、ソレ搦め取れ』

部下を指揮して、取り圍む。

今は、囊中の鼠、遁れんに術もあらず、

『人手に懸かり給はんよりは、寧そ、我が手に懸け參らせん』

長九郎、刀を抜くより早く、ズバリと、轎の中を刺し、

『許し給へ御坊、頓て、御供致し候べし』

と言ひ捨て、面も振らず、打手の中に、躍り入り、勇を振うて戦へば、長七も、亦、同じく渡り合ふ。

孫三郎、突と、轎の傍に、馳せ寄り、惠瓊を、引摺り出だして、繩を懸く。

庄右衛門、長七の二人、見て、切齒しつゝ、

『扱ては、捕はれ給ひたるか、今は、是れまでなるぞ』
多勢を、相手に、奮ひ戦うて倒る。

惠瓊は、唯、頬を傷けるのみ、一命に障りあらず、信昌、
乃ち大津の本營に送れば、家康、村越直吉に命じて、小西
行長と、一つ所に幽す。

行長は、首枷を嵌られて、室の中央に坐し、時々、守者と、
談を交ゆ。

惠瓊は、障子を隔て、其隣に在り、頭を低れて、黙して、
語らず。

七十七

三成、行長、惠瓊の三人、皆、破れたる木綿の肌着を纏ふ、
家康、聞いて、左右に向ひ、

『治部は、日本の政治を執りしものぞ、攝津守は、一城
の主なり、安國寺、亦、賤しむべきものにあらず、あの
まゝ、京中を引き廻はして、耻を與へんは、却つて、此
方の耻辱ぞ』
と告げ、命じて、三人に、小袖一重づゝを贈る。

行長、涙を垂れて喜び、

『敵たる我れへ、斯くまでの御心入れ、辱けなう候へ、
さらば、一時の寒風を、防ぎ候はん』
と述べ、直に取つて着す。

惠瓊は、別に、禮をも述べず、

『ドレ〜着せん』

亦、直に着す。

三成、小袖を見て、

『誰れよりぞ』

と問ふ、吏、

『上様より候』

と答ふれば、三成、忽ち、

『ナニ、上様とは』

と問ひ返す、吏、又、

『内府様に候なり』

と答ふれば、三成、佛然として、

『上様とは、故太閤をこそ申さめ、何條、内府を、上様
と申すべきや』

と呟き、敢て小袖を着せず。

七十八

三人は、愈々斬首に決しぬ。

十月朔日、本多正純、村越直吉の二人、三成、行長、惠瓊
を護りて、京都に抵り、所司代奥平信昌に、引き渡す。

信昌、乃ち三人を、車に乗せて、京中を引き、廻はす。

三成、喉渴きて、湯を乞ふ、警固の士、

『途中にて、湯は候はず、喉、渴かば、柿の甘干の候、
參らせ候はんか』

と言へば、三成、首を掉りつゝ、

『そは痰の毒ぞ、得こそ食ふまじ』

と答へて、拒む、警固の士、冷笑ひつゝ、

『只今、首を刎ねらるゝ人の、毒斷ちとは、笑止なれ』

と言へば、三成、忽ち、呵々と笑ひつゝ、

『其方共の心には、尤もの量見ぞ、大義を思ふものは、
首を刎ねらるゝ期までも、命を惜しむこと、如何にもし
て、本意を達せんと思へばこそ、など燕雀に、鴻鵠の
志を、知り得らるべき』

と嘲り、頓て、六條河原に牽かれて、斬に處せらる。

此日、三條橋下に、梟けられし首四つ。

其三つは、此三人。

残る一つは、長束正家の首、南宮山より、遁れて、水口城
に還りしを、池田長吉の爲めに、迫られて、自殺せしもの。

七十九

秀家、其近臣進藤三左衛門、黒田勘十郎を従へて、伊吹山
の奥深く、遁れ入る、本多正信の二子三彌、流浪して、秀
家の許に在り、亦、隨うて走る、

『追手や来る』

風の音、水の音にも、心を冷やし、後を見返り〜、山路
を辿り、何時しか、美濃國粕川の谷に、迷ひ入りぬ。

日は暮れぬ、宿るべき家もなし。

天は明けぬ、食ふべき物もあらず。

心ばかりは、逸れども、腹減り、足疲れては、歩みも、更
に抄取らず、三彌等、手を曳き、跡を押して、漸く中山郷
に、辿り着く。

石田三成、粕川の谷へ落ちしとの噂、遠近に響き渡れば、

我れ、捕へて、恩賞に預からばやと、在々所々の農民原、我れ先きにと、粕川の谷へ、馳せ来る。

美濃國揖斐郡白檜の浪士矢野五右衛門、亦、馳せて、粕川の谷へ赴く途中、圖らずも、秀家主従の来るに逢ふ。

五右衛門、名は重昌、本と、齋藤右兵衛尉の近臣たり、

『天晴れ、好き捕物かな』

と思ひつゝ、槍を取つて、進み寄る、近づくと儘に、顔を見れば、色白く、眼涼しき凛々しき大將、唯人とは、思はれず。

五右衛門、餘りの憫はしさに、思はず、ハラ／＼と、涙を垂れつゝ、

『何方へ落させ給ふぞ、御道案内仕つり候べし』

槍を伏せて、慇懃に述べれば、三彌、進み出で、熟々と、五右衛門の顔を見遣る。

害心、既に失せぬれば、俠氣、自から色に形はれぬ、三彌、漸く心を安んじ、

『人を助くるは、人の道ぞ、好きやうに計らひ候へ』と告ぐ、五右衛門、聞いて、頭を下げつゝ、

『馬も、牛も、通ふべき道に候はず、背負ひ参らせん』後を顧みて、家僕九藏を麾ねき、

『ソレ／＼負ひ奉つるべし』

と指圖すれば、屈竟の若者、何の苦もなく、秀家を負ひて、道を急ぐ。

此あたりの農民、見て、逐ひ來り、落人遣らじと、犇めき合ふ。

五右衛門、右を制し、左を宥めつゝ、

『知人に候なり、許し給ふべし』

幾たびか、危き間を言ひ遁れ、其日の暮方、漸く我家に還り着き、

『最早、御氣遣ひは候はず、寛ぎて、御休息あらせ給へ』

と述べて、妻子諸共、懇ろに劬はり冊づく。

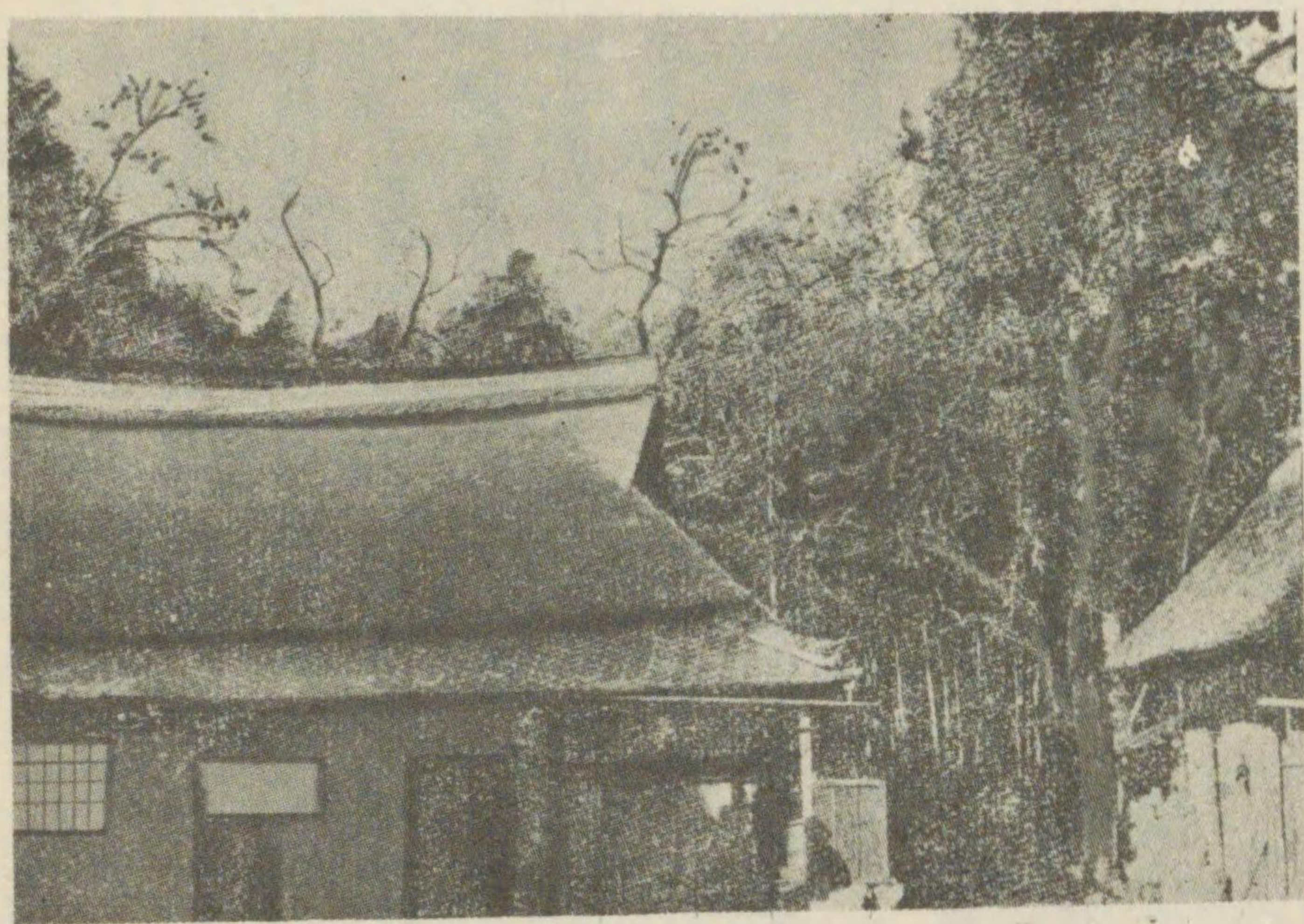
三彌、深く心に感ず、隠くしては、却つて、悪しからんと思へば、五右衛門を、膝近く、招きて、

『此方こそは、備前、播磨、美作三ヶ國の太守浮田中納言利家卿にましますなれ、今こそ、落人の御身とならせ給へ、正しく、前田大納言利家卿の婿君にて在します、

又家康公の執權本多佐渡守正信は、斯く申す某の父なれば、家康公の御前を、執り成して、必ず、二たび、

浮田秀家の隠家

美濃國揖斐郡小島村矢野源三郎は浮田秀家を匿まひし矢野五右衛門の後裔にして此寫眞は其本宅なり



世に出だし参らすべし、

其時は、恩

祿、望みに

任かせ候は

ん、暫く、

匿まひ奉つ

るべし』

と包まず、實

を告ぐれば、

五右衛門、思

はず、飛びす

ざり、

『扱ては、

然る尊き御

方にて在は

し候ひしか、御心安く、思し召せ、命の有らん限りは、

匿まひ奉つり候べし』

と述べ、屋後の窟の中に、隠くして、甲斐々々しく、敬ひ事ふること、主君の如し。

此處は、美濃の國と聞きければ、秀家、

東路の美濃に來りし甲斐ぞなき

涙の雨にぬる、我がそで

詫しさに今はとおもふ秋山の

よもぎが下に松虫ぞ啼く

山の端の月は昔に變らねど

わが身の程は面影もなし

涙のみ流れて末は杭瀬川

水の泡とや消えんとすらん

など口吟みつゝ、今日と暮れ、明日と經ちて、九月も、何時しか過ぎぬ。

秀家、大阪の事の心に懸ければ、五右衛門を招きて、

『汝、我れを大阪に送り候へ』

と頼めば、五右衛門、手を突きて、

『仰せ畏み奉つる、萬事、某に任せ給ふべし』
と答へて、古びたる駕籠に、秀家を乗せ、勘十郎と與に、
付き添うて、忍びやかに、我家を立ち出で、江州武佐より、
伏見に到りて、乗合ひの舟を求め、

『重き病人の、有馬に赴くぞ、許し給ふべし』
と言ひ、駕籠の儘、舟に乗せて、淀川を下る。

頓て、大阪に着きければ、事なく、秀家を、其邸に送り入
る、夫人、夢かとはかりに、打ち喜び、

『嬉れしや、喜ばしや、最早、此世に在はしませずと思
ひ侍りしに』

犇と、取り縫りて、涙、瀧の如し、
『これと申すも、五右衛門とやらの力なり』

夫人、五右衛門を、引き見て、盃を賜ひ、
『當座の引出物ぞ』

黄金十枚、外に、小袖十枚を、妻にと與へて、犒らひ還す。

五右衛門、是より、富貴の身となり、世々、大庄屋を勤む、
現時の戸主を、矢野源三郎と曰ふ、秀家の遺留せし刀一口、
脇當一足、及び秀家の朝鮮に在りし日、秀吉より送れる書

翰二通、火災に逢へる槍又二個を、家に藏す。
大事、既に去りぬ。
秀家、大阪に還れども、旗を擧げんやうもなし。
乃ち去つて、薩摩へと向ふ。

八十

佐和山城の陥るや、家康、旗を進めて、西上す。

十九日、草津に到り、二十日、大津に移る。

天皇、特に、慰勞の勅使を賜ふ。
大野治長、福島正則の軍に屬して、關ヶ原の戦に加はる、
家康、治長を召して、

『此度の事は、皆、治部の企てなり、幼年の秀頼、及び
淀殿の關かり知る所にあらず、我れ、少しも、心に懸く
る所あらねば、汝、大阪に往きて、能く、此意を諭
し候へ』

と告ぐ、治長、大阪に馳せ下りて、斯くと報ずれば、淀君、
初めて、ホツと、息を吐く。

三成の幼兒、妙心寺内の永壽院に入りて、僧となる。
住僧、所司代奥平信昌に頼りて、助命を乞ふ。

本多正信、家康の前に出で、

『疾く、赦し遣はし給へ、治部少輔は、君に對し奉つり
て、大きな御奉公を致し候はずや』

と白せば、家康、怪しみつ、
『大きな奉公とは』

と問ふ、正信、膝を進めて、
『左ればに候、治部少輔が、不量見を起したればこそ、

天下も、安々と、御手に入り候なれ、治部は、全く、大
きな御奉公を致したるものに候なり、坊主子の一人く
らゐ、助け給はんこと、何條、苦しう候べき』

と白せば、家康、忽ち、呵々と笑ふ、
『鋸屑も、結へば、結はるゝとは、此事ぞ』

直に、赦免の命を傳ふ。
家康、二十七日を以て、大阪に入る。

二十八日、勅使又來り犒ふ。
公卿百官以下、來り賀する者多く、城門、市の如し。

天下の大權、是れより、家康の手に歸す。

上田城址

眞田昌幸籠城の地

上田城は、信濃國小縣郡上田町の西南に在り、眞田幸隆
の建築せるものにして、尼淵城、又は伊勢崎城と曰ふ、
慶長五年九月、徳川秀忠の中山道より、進んで、上國の
戦に、會せんとするや、幸隆の子昌幸、此城に據りて、
秀忠を支へ、終に、關ヶ原の役に會せしめず、世、其勇
を稱す。

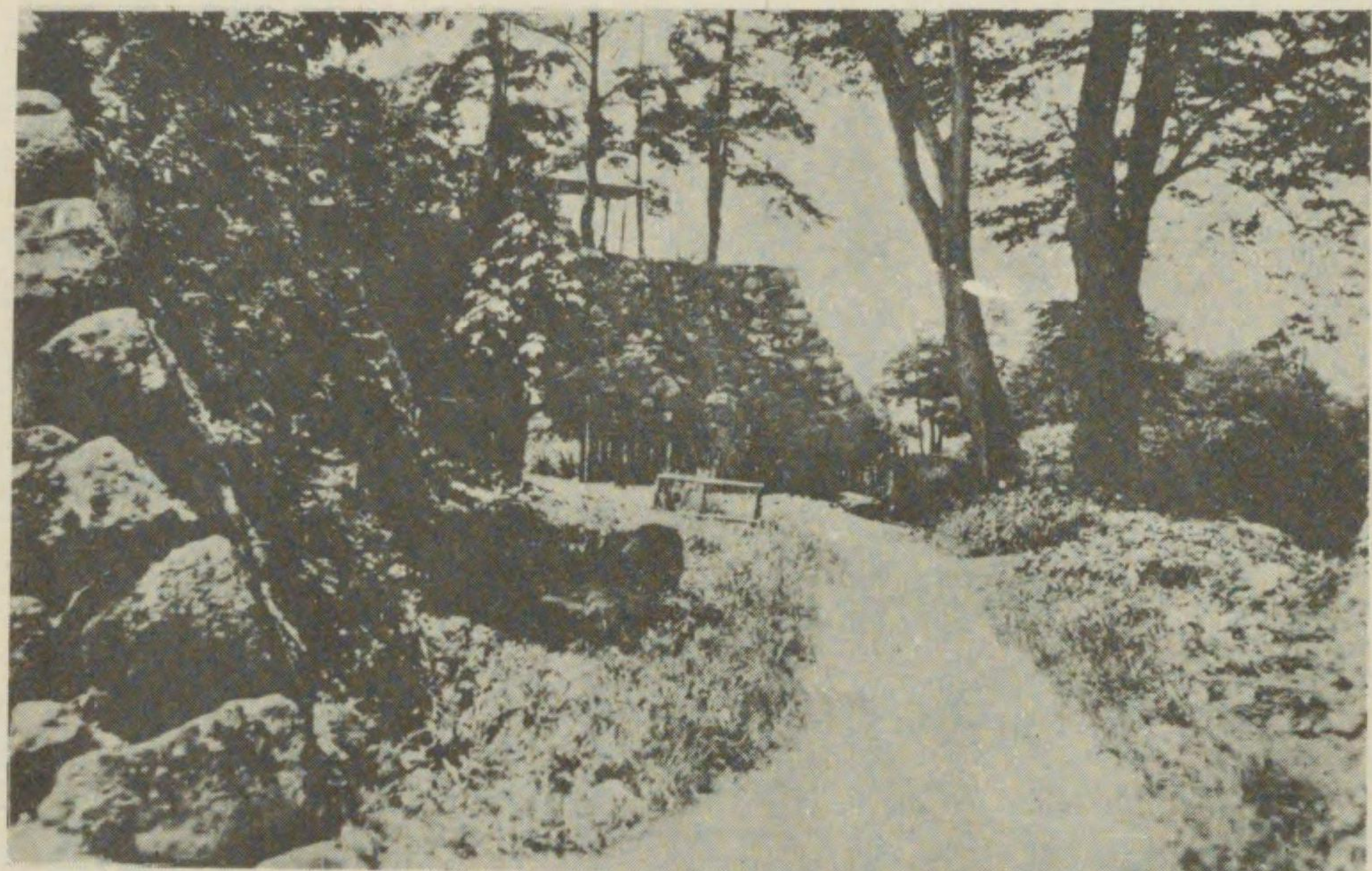
徳川秀忠、兵三萬八千を率ゐて、中山道より、上國に向ふ。
榊原康政、其先鋒たり、大久保忠隣、其子忠常、本多正信、
本多忠政、酒井忠重、奥平家昌、菅沼忠政、牧野康成、其
子忠政、戸田一西、眞田信之、森忠政、小笠原忠政、仙石
秀久、石川康長、日根野吉明、諏訪頼水等、此れに従ふ。
九月二日、進んで、小諸に到る。

眞田昌幸、上田城を以て、石田三成に應じ、伊勢崎、砥石、

冠者嶺の諸砦を守りて、東軍を遮ぎらんと欲す。

小諸城址

小諸城址は信濃國佐久郡小諸町の西南隅に在り慶長五年仙石秀久之れを守る徳川秀忠の關ヶ原に向ふの途中兵を次せし處



秀忠、乃ち使を上田に遣はして、降を諭す。

信之も、亦、秀忠の命に依りて、

『速かに、東軍に従ひ候はゞ、領地を増させ給はんとの御内意に候なり、能く能く、御思慮を運らし給ふべし』

と報ず、昌幸、頗る偽計に長ず、秀忠の使に對して、

『諸將士を諭して、後、御報仕つり候べし、暫しの猶豫を賜へ』

と乞ひ、荏苒、日を延ばして、密かに、守備を修す。

秀忠、疑うて、之れを攻めんと欲す、家政も、亦、進撃を主張すれども、正信、獨り、

『昌幸、ヨモ、偽はりを申し候まじ、今一二日、待たせ給へ』

と述べて、之れを止む。

又待つこと兩日。

昌幸、尙、答へず、秀忠、人を遣はして、其確答を促がす。

時に、城砦の修理、全く成る、昌幸、乃ち傲然として、

『攻めんと欲せば、攻めよ、何條、關東に従ひ候はんや』

と答へ、火を城外の民家に縦ちて、戰意を示す、使者、還り報ずれば、

『左らば、上田を攻め落せよ』

秀忠、五日を以て、小諸を發し、旗を染屋に進めて、俯し

て、上田城を瞰ふ、康政、

『安房守昌幸は、軍の道に長け候、今宵、必ず、夜討を仕掛け候はん、御油斷あらせ給ふべからず』

と説き、篝を焼き、備を立て、待つ。

昌幸、果して、兵を提さげて來り、

『敵は、遠く來りて、疲れつらん、イデ、一撃ち破らん』

進んで、山下に迫れば、警備、おさく、嚴し。

『扱ては、敵に用意あるぞ、進めば、必ず、過ちあらん』

其儘、兵を收めて、城に入る。

幸村、出で、伊勢崎の砦を守る、信之、攻むれども、砦、固くして、抜くべからず。

信之、乃ち康政、忠隣に向つて、

『某、聊か存するの旨候、山上に登りて、鯨波を揚げ給へ』

と説く、二人、直に諾し、兵を率ゐて、山上に登れば、幸村、見て、

『扱ては、敵は、我が歸路を絶たんとするぞ』

と思ひて、意、少しく沮む、折柄、信之、火を村落に縦ち

て、伊勢崎に迫れば、幸村、

『猶豫すれば、難儀ぞ、今の中に、疾く退かん』

直に、砦を棄て、走る。

菅沼忠政等、砥石の砦を攻む、守將根津幸直、亦、戰はずして去る。

石川康長等、冠者嶺の砦を攻む、守將池田市左衛門、固く守りて、屈せず、康長等、敗れて退く。

戸田一西、秀忠の前に出で、

『此處にて、日を送り候ては、上方の戰期に、後れ候はん、少しの押へを留めて、疾く、進發あらせ給ふべし』

と説く、時に軍費乏し、正信、乃ち斥けて、聽かず。

家次、家昌、康成、忠政、本多、忠常等、進んで、上田城に迫る。

麾下の士太田吉政、杉浦久勝等十八人、諸卒を督して、城外の禾を刈る。

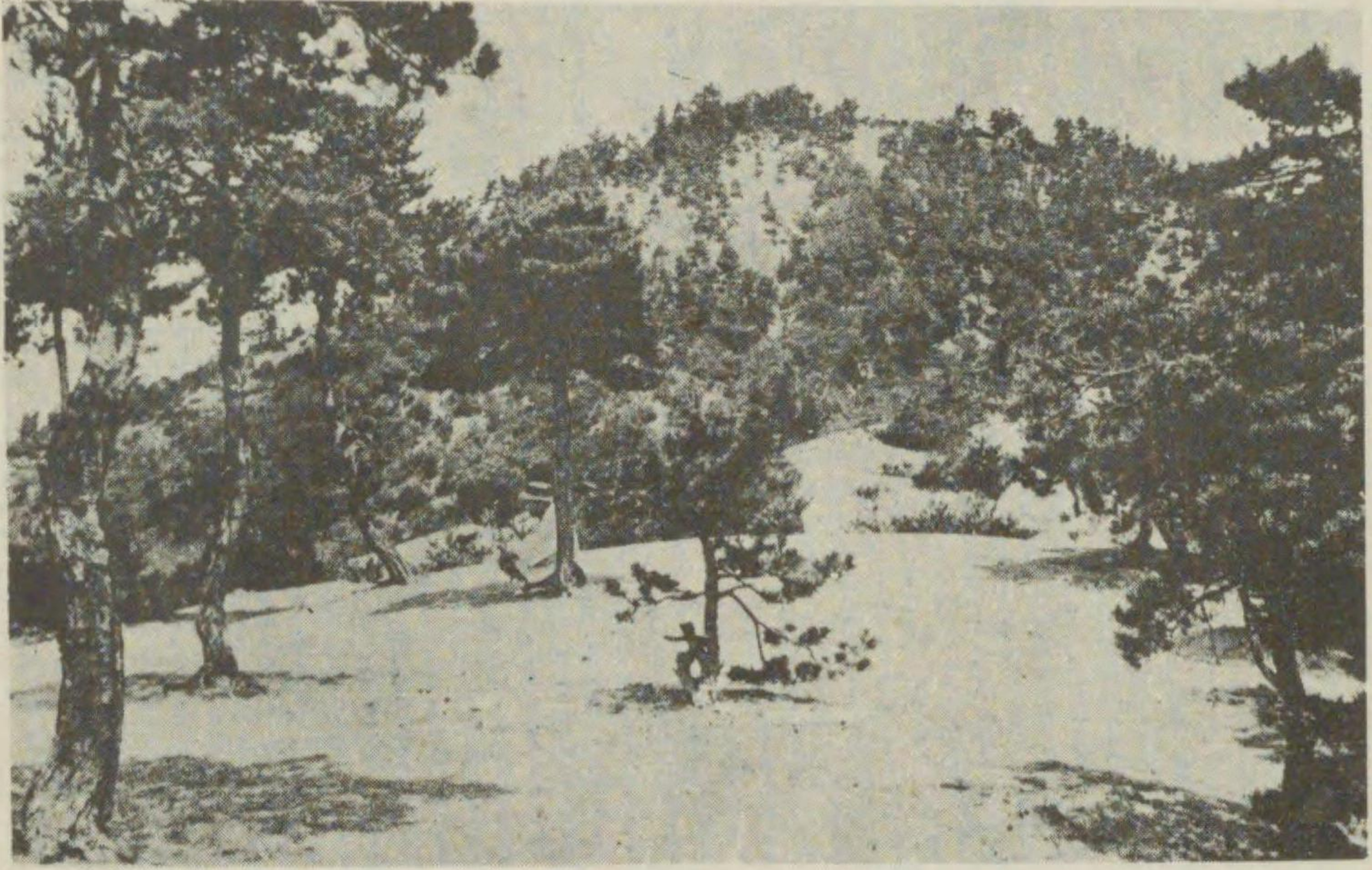
時に、昌幸、從士十餘名と與に、出で、外廓を巡視す、十八士、望み見て、

『アレこそ、眞田なれ、ソレ撃ち取れよ』

諸卒を勵まして、猛然として、突貫す、兵鋒、頗る鋭し。

砥石城址

砥石城址は信濃國小縣郡神村大字上野に在り上田城の東北二里ばかり眞田昌幸の東軍を遮らんとせし處なりとす

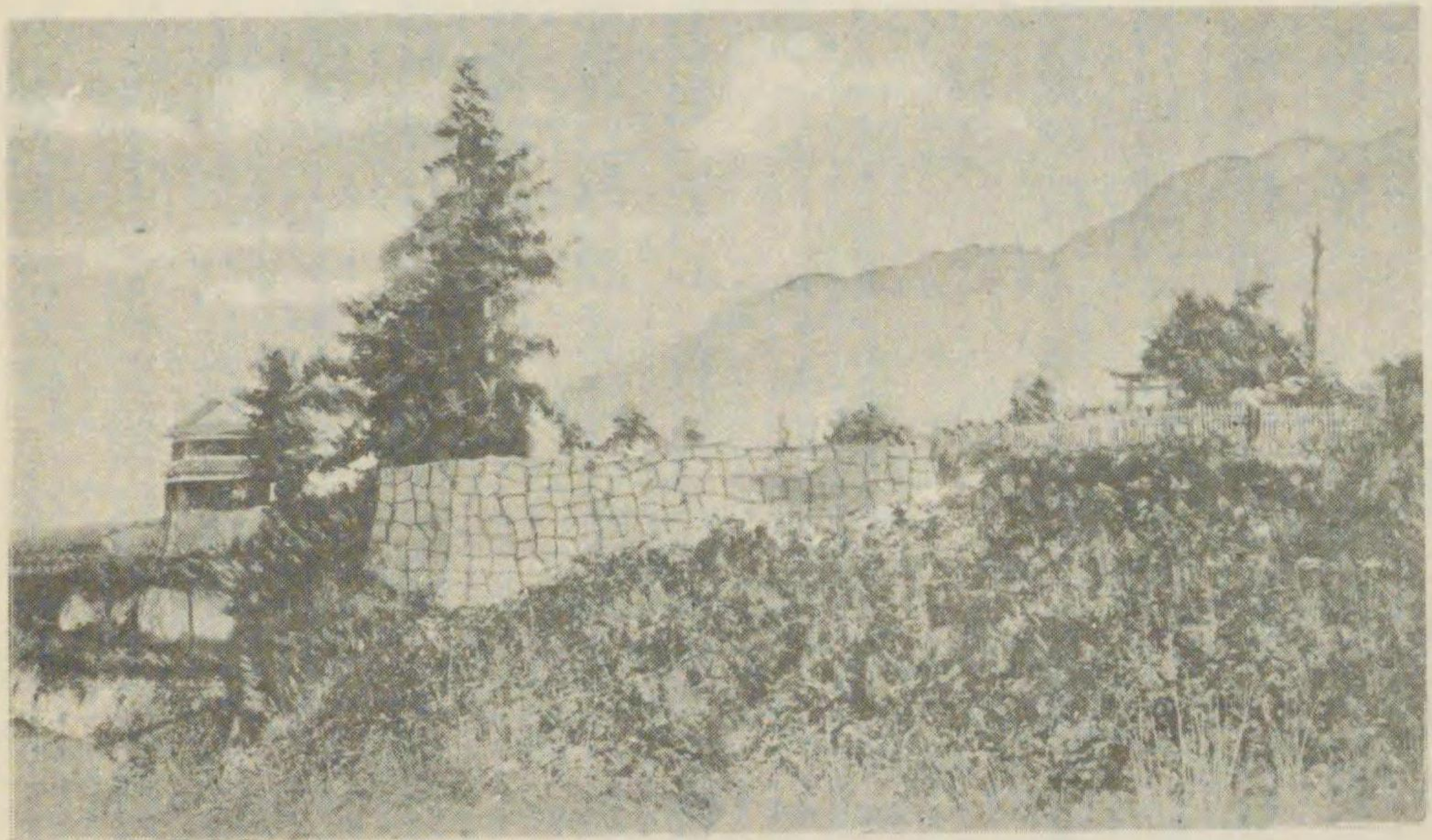


昌幸父子、急に城に入り、銃を發ちて拒ぐ。十八士、屈せず、直に城門に向つて、肉薄すれば、康成、

手を衝き、奮撃して、其一廓を奪ふ。正信、忠隣、本營に在り、聞いて、大に怒り、『命令をも待たで、自儘に戦ふこそ、奇怪なれ』急使を飛ばして、兵を收む。正信、請うて、隊長の軍法を犯すものを、罰せんとす、康成、聽かず、『罰せんと思さば、某を罰し給へ、部下の罪には候はず』と述べて、自ら其責に當らんとす。杉浦久勝、正信の議を聞いて、憤慨し、直に、屠腹して死す。秀忠、終に、康成父子、及び麾下の士八人を罰して、上野の吾妻に錮す、未だ敵城を屠らず、内紛、先づ、起る。昌幸、屢々奇兵を縦ちて、東軍を困しむ。秀忠、九日を以て、兵を小諸に回へす。此日、家康の書、江戸より達す、披き見れば、『我れ、明日〓九月朔日〓江戸を發し候、疾く、濃州に來會候へ』とあり、秀忠、乃ち、俄に、西上するに決し、森忠政、仙

石秀久、石川康長、日根野吉明、諏訪頼水等を留めて、上田城址

信濃國小縣郡上田町の西南に在り眞田昌幸の籠城して徳川秀忠の軍を拒ぎし處



田に備へ、十日を以て、小諸を發す、本多康重、殿軍たり、正信、秀忠に向ひて、『本道を過ぐれば、城兵、追撃ち致し候べし』と説き、迂路を取つて進む、康政、獨り、從はず、『何條、小勢の敵を恐る、ことや候』部下一千餘人を率ゐ、本道を経て、和田嶺に向ふ。

城兵、終に出でず。十七日、妻籠に抵りて、關ヶ原の捷報に接す、乃ち程を兼ねて進み、二十日を以て、草津に抵る。家康、疾と稱して、見るを許さず。康政、忠隣、正信、忠利等、相携へて、本營に到る、亦、謁を許さず、井伊直政、出で、『若殿の戦期に後れ給へるもの、亦、各方の責に候ぞ』と言へば、康政等、答へずして、還り去る。忠利、獨り、留まりて、直政に向ひ、『若殿の後れ給へるもの、上田を攻め給へばこそに候へ、何の咎め給ふことや候、御邊の妄りに罵り給ふこそ、其意を得ざれ』と詰れば、直政、『我れは、若殿の笑ひを、天下に貽し給はんことを恐るればこそ、申し候なれ』と答ふ、忠利、勃然として、色を變じ、忽ち、『假令、上様の御腹立、烈しう候はんとも、其を宥め奉つらんこそ、御邊の職分に候へ、妄りに、御過まちを、

言ひ立て給ふは、何事に候ぞ、今一言、申されよ、此座は、立たせ候まじ』

と言ひつゝ、刀を按へて、チリ／＼と、進み寄れば、一座の人々、アナヤと驚きて、

『與七郎殿忠利今日の舌戦こそ、實に先年の武功にも優り候へ』

人々、傳へ聞きて、皆、亦、褒め稱ふ。

居ること數日、康政、入つて、家康を直諫し、本多正純、亦、

『父正信の罪にこそ候へ、父を斬つて、若殿を赦し給ふべし』

と諫むれば、家康、意釋け、二十三日を以て、始めて、秀忠と對面す。

父子の親、復た舊の如し。

石垣原

吉弘統幸戦死の處

石垣原は、豊後國速見郡別府港の東北、二里ばかりを距る石垣村に在り、荆棘亂石、滿野を掩ふ、慶長五年九月十三日、大友義統の黒田孝高と戦うて、敗る、處、實相寺山の麓、寒烟蕭條の中、其忠臣吉弘嘉兵衛尉統幸の墓あり。

大友氏は、其先、右大將頼朝より出づ、世々、豊後を領し、威、西國に振ふ、義統に至り、屢々島津義久と戦うて、敗れ、城邑、日々に蹙まる、乃ち援を豊臣秀吉に乞うて、之れを復す。

秀吉の朝鮮を伐つや、義統、亦、軍に従ひ、鳳山に陣して、小西行长等と、營を聯ぬ、明將李如松、大兵を率ゐて、來り逼ると聞き、戦はずして走る、秀吉、怒りて、其封を褫ひ、義統を、周防山口に幽す、慶長五年、石田三成の、徳川家康を伐たんとするや、秀頼に請うて、其

罪を宥し、舊封豊後に還りて、義兵を擧げんことを勸む、義統、喜んで、此れに應ず。

時に、義統の第三子義乘、家康に屬す、統幸、之れを輔けんとして、大阪に抵る、會々義統の西軍に應ずるを聞き、諷を求めて、之れを諫む、聽かれず、統幸、其主を棄て去るに忍びず、終に、從うて、石垣原に戦ひ、奮闘して死す、後人の其墓を弔ふもの、皆、涙を墮さるはなし。

國、除かれ、君、幽せらるゝも、臣たるもの、未だ以て死すべからず、戦亂の世、風雲の變化、朝にして、夕を計られず、若かず、姑らく、餘命を全うして君の先途を、見届け參らせんには。

統幸の意、決す、人は死すれども、獨り、死せず、人は、髮を薙ぐとも、獨り、薙たず、飄然、去りて、筑後の柳川に隠くる。

流落五年、秀吉、薨じて、天下、復た大に亂れんとす、統幸、西に居れども、心、常に、東に走す。

既にして、石田三成、幼主の命を矯めて、家康を除かんと欲す、諸侯、或は、西に屬し、或は、東に従ふ、天下紛亂の時、今や、來る。

義統の三子義乘、預けられて、家康の許に在り、統幸、心に思ふ、

『主家回復の好機、今ぞ、來れる、イデヤ、往きて、若君を輔け奉つらん』

待ちに待ちたる時機は、今ぞ、統幸、單身、筑後を去りて、急ぎ、大阪に抵れば、計らざりき、主君義統、既に、三成の甘言に迷うて、西軍に加擔しつらんとは。

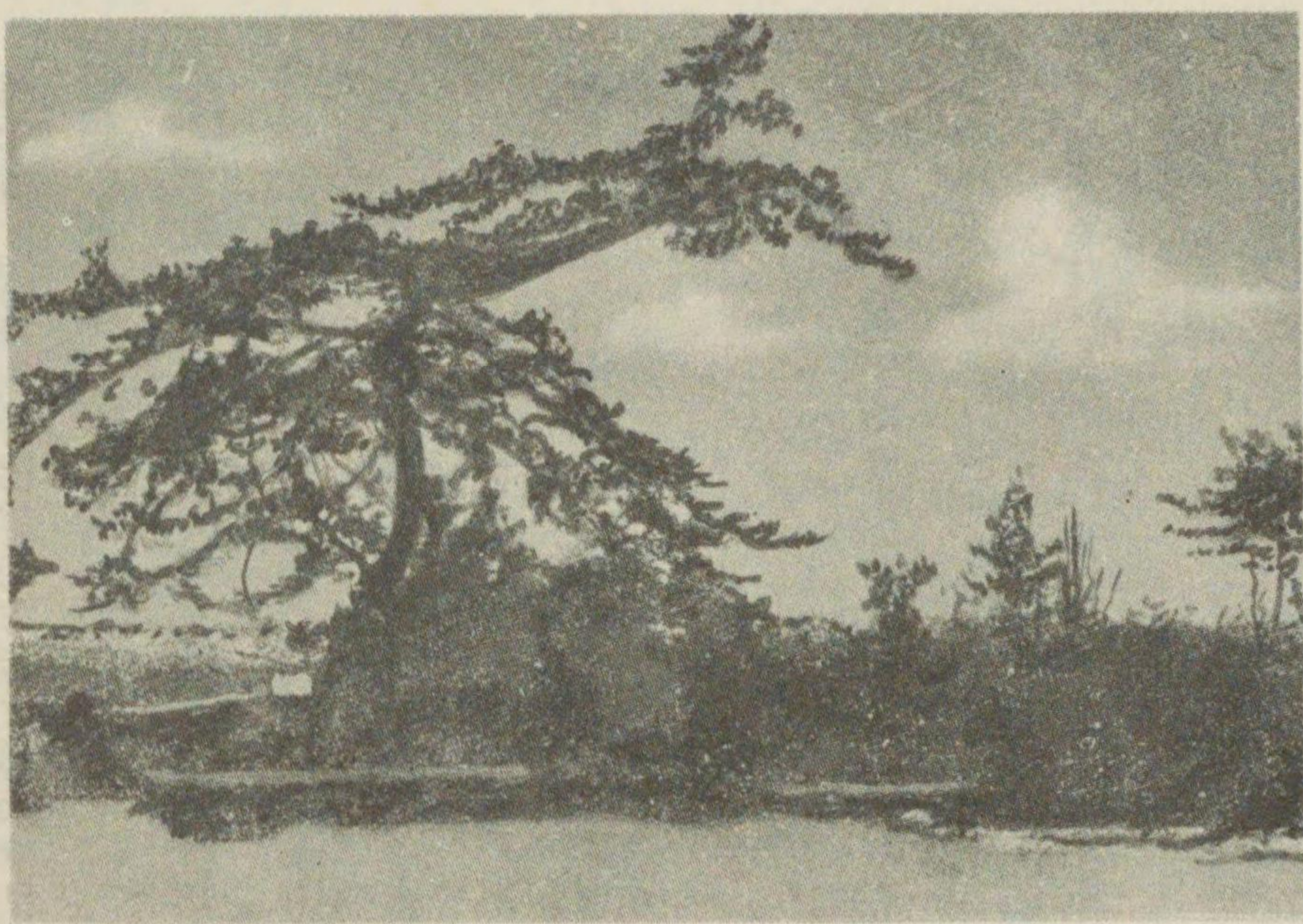
義統、幽屏を釋かれて、大阪に在り、檄を兩肥、豊筑に飛ばして、舊臣を募り、身も、亦、將さに、豊後に、馳せ還らんとす。

統幸、聞いて、大に驚ろき、急ぎ、諫め止めんと思ひて、謁を求む、義統、延き見て、

『幼君秀頼我が罪を赦して、舊領安堵の御墨附を、下し賜ひぬ、我れ、是れより、本國に、馳せ還らんとするの時、計らずも、汝に逢へるこそ、不思議なれ、喜ばしや、

是れぞ、當家再興の吉兆なる』
と告げ、喜色、面に溢る。

石垣原古戰場
豊後國速見郡石垣村に石垣原あり大友義統と黒田孝高
と血戦せる處



統幸、チツと、
義統の顔を、
見上げつゝ、
ハラ〜と、
涙を垂る、
『恐れなが
ら、是れぞ、
御家滅亡の
時節に候べ
し、此度の
御企ては、
幼君の思召
しにあらざ
方今、諸侯
多しと雖も、
誰れかは、

徳川殿の右に出づるもの、候はん、君、誠に、御家を興
し給はんと思召さば、宜しく、早く、東へこそ、従ひ給
ふべけれ、何とて、西に屬し給ふことや候、況してや、
若君は、徳川殿に預けさせ給ふをや、呉れ〜も、三成
の肝謀に、惑はせ給ふ勿れ』
諄々として諫むる言葉は、皆、熱誠の意ならぬはなし、義
統、頭を掉りつゝ、

『會て、當家の島津に滅ばされんとする時、故太閤の援
助ありたればこそ、本領をも、保ち得たるなれ、争かて、
其恩義を忘らるべきや』
と言へば、統幸、容を正しつゝ、

『這は、君の御言葉とも、覺え候はず、小西の讒言に由
りて、三百年來の御領土を召し放せるは、故太閤に候は
ずや、怨みこそ在はせ、何の恩義か候はん、若君の東に
在はすさへ候ものを、是非に、思ひ返させ給ふべし』
と諫む、至誠、面に滿つれども、義統、終に從はず、

『故太閤、我れを罪し給へども、我れ、幼君を援く、是
れぞ、怨みに報ゆるに、徳を以てするもの、亦、武門の

譽にあらずや、我が心、決す、復た諫むる勿れ』
と告ぐ、今は、是非なし、

『左らば、君は、君の思召しに、任せ給へ、臣は、是れ
より、關東に、馳せ下りて、若君を援け奉つり、御家の
再興を計り候べし、左らばに候』
泫然として、涙を垂れつゝ、辭して出づ。

二

既にして、統幸、驟然として思ひ返し、
『我れ、今、君を棄て、若君に従ひ参らせんか、世の
人、我れを、何とか思ふらん、若かし、今一度、君を諫
め奉つりて、御志を継へさせ参らせんには』
二たび、義統の許に抵れば、遺憾、早、既に、西下したる
後ならんとは。

『左らば、御後を追ひ奉つらん』
統幸、倉皇、船に上りて、發す。
上の關周防に至りて、漸く、逐ひ及ぶ。
統幸、又も、利害を説きて、苦諫すること徹宵、義統、頑
として、聽き入れず。

今は、奈何にも詮術なし、

『此上は、是非に及ばず、君に従ひ奉つりて、御先途を、
見届け参らせん』
終に、義統に隨うて、豊後に抵る。
舊臣の來り屬するもの、甚だ多し、

『イザ、此勢ひに乗じて、杵築に、押寄せん』
九月十一日、義統、其將宗像鎮繼をして、夜に乗じて、急
に、杵築城を攻めしむ。
事、不意なり、城兵、慌て遽めき、専ら鳥銃を發して、敵
を防ぐ。

鎮繼、一舉、城を抜かんと欲し、兵を指揮して、四面、齊
しく迫る。
城、殆んど陥らんとす、黒田孝高の兵、來り援ふに會う
て、果さず。
十二日、孝高の先鋒四千餘人、杵築の戌將松井康之、有吉
興行等、二百餘人と與に、實相寺山に陣し、將さに、明日
を以て、戦はんとす、軍容、頗る振ふ。
統幸、固く、死を決し、十三日、義統に見えて、

『今日の戦、極めて、難儀にこそ候べけれ、今生の拜顔も、是れ限りに候べし』

と述べ、黯然、涙を呑みて、陣に回へる。既にして、金鼓一聲、戦、既に合す。

兩軍、各々競ひ進み、奮ひ戦ふ、勝敗、容易に、決せず。

孝高の部將井上九郎右衛門、野村市右衛門等、加來殿山かくだのやま實相寺山の西に陣す、味方の軍兵、漸く、疲るゝを見て、自ら代はりて、戦はんとす。

會々、義統の兵、憩ひて、涼を納る。

九郎右衛門等、斯くと見るより、猛然、山を下り、兵を麾ねきて、急に迫る。

義統の兵、自若として、動かず、其益々近づくを待つて、一齊に、蹶起し、矢を放ち、丸を發す。

戦、正に酣はなり。

忽ち、九郎右衛門の陣中より、一士、躍り出で、大野久彌と名乗りて、戦を挑む。

義統の臣深栖七郎右衛門、奮然、進み出で、此れに當り、互に、槍を揮うて、鬪ふこと霎時しやと、七郎右衛門、終に撃た

る。

續いて、敵の陣中より久彌の兄大野勘右衛門、進み出づ。義統の臣小田原又左衛門、此れに當り、亦、勘右衛門の爲めに、撃たる。

義統の軍、漸く色めく。

九郎右衛門等、勢ひに乗じて、進んで、掩撃せんと欲す統幸の儼然兵を勒めて、動かざるを見、逡巡して、敢て進まず、統幸、

『扱ては、敵も、兵機を曉れるよな、敵、若し、隊伍を亂して、來り逐はゞ、我れは、撃つて殲みたらにせんと思へるものを、左らば、此方よりこそ、押し寄すべけれ』

精兵一千を率ゐて、徐々として進む。

敵兵、亦、陣を齊せいへて待つ。

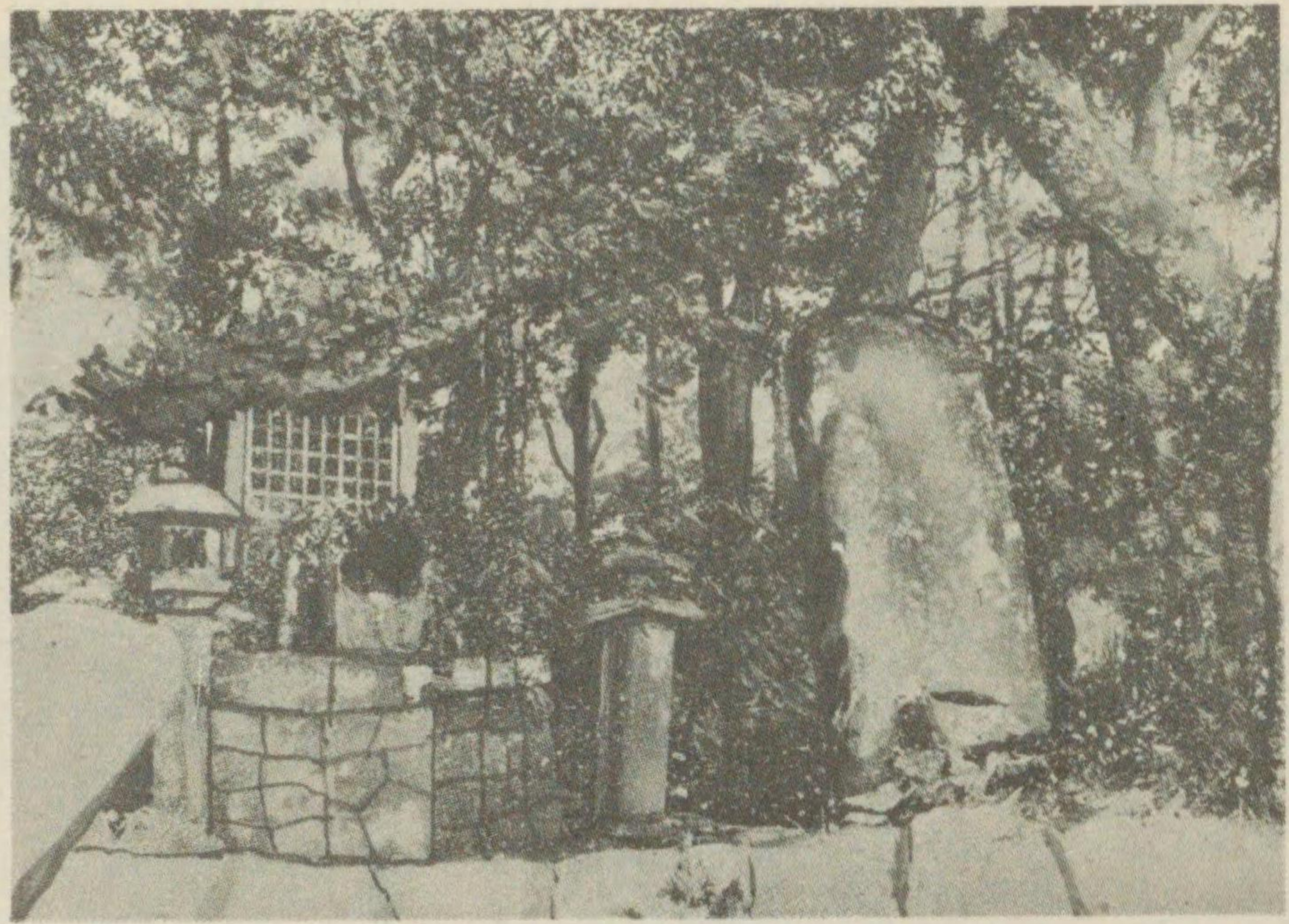
秋風、野を掃うて、人も、馬も、皆、勇む。

兩軍、漸やく近づく。

統幸、叱咤號令、進んで、敵陣を衝く、馳突縦横、猛烈、當るべからず。

九郎右衛門、勢ひ敵せず、將さに、潰え走らんとす。

吉弘統幸の墓
豊後國速見郡石垣村實相寺山の麓に古墳あり大友義統の忠臣吉弘統幸を葬むるところ



野村市右衛門の別隊、

横さまに、

統幸の陣を

衝き、九郎

右衛門の部

下後藤左衛

門、亦、迂

回して、統

幸の陣後を

襲ふ。

統幸、勇猛、

比なし、朱

柄の大槍を

揮うて、近

づ敵を、

突き伏せ、突き倒す、敵、怖れて、敢て、迫らず。

統幸、敵の一將を見るより、大音に呼はる、

『汝は、井上九郎右衛門にあらずや、我れは、吉弘嘉兵衛なり、イザ、勝負を決せん』

忽ち、馬を乗り出だせば、九郎右衛門、亦、十字槍を捻つて、進み來る。

統幸は、軀幹長大、九郎右衛門は、身軀短小、一は、巨象の如く、一は、悍豺の如し。

互に、馬を乗り入れ、乗り過はし、火花を散らして、奮ひ戦ふ。

九郎右衛門の槍尖、偶々、統幸の冑かぶせのひもに觸る、纓ひも、斷れ、甲かぶせ、傾きて、其眼を掩ふ、統幸、敵の穂先を、サツと、勿ね退けさま、突と、退くこと數歩。

統幸の左の腋下、鎧、開きて、青色の襦たぎ衣、少しく現はる、九郎右衛門、目敏く、之れを見るより、槍を捻つて、此を刺す。

鮮血、サツと迸しり、大剛の統幸、ドツと、馬より落つ。勝敗、忽ち、此に決す。

義統、大に敗れて、敵に降る、特に、死一等を、宥ゆるされて、上總に、江戸牛込に、幽せらるゝこと六年、慶長十年七月

十九日、疾んで歿す。
家運、興らず、領土、復せず、忠臣の先見、果して、愆ら
ず。

八丈島

浮田秀家配流の地

八丈島は、伊豆七島の最南に在り、東京より、直航百五
十哩あり、島の西南岸、大賀郷字東里は、實に浮田秀家
謫居の地なりとす。

秀家の父を、直家と曰ふ、兒島高德の裔なり、高德の子
高秀、備前宇喜多に居る、因りて、氏とす、秀家、十歳
にして、父を喪ひ、豊臣秀吉の爲めに養はる、秀家、眉
目清秀にして、文武の才あり、秀吉、之れを愛し、前田
利家の女を養うて、子とし、之れを秀家に配す、十三歳
にして、左近衛少將に任ぜられ、十五歳にして、左中將
に進み、十六歳にして、參議に陞り、二十二歳にして、
權中納言に任ぜらる、其徳川家康、前田利家、毛利輝元、

上杉景勝と與に、大老に列したるは、二十六歳の時なり
き。

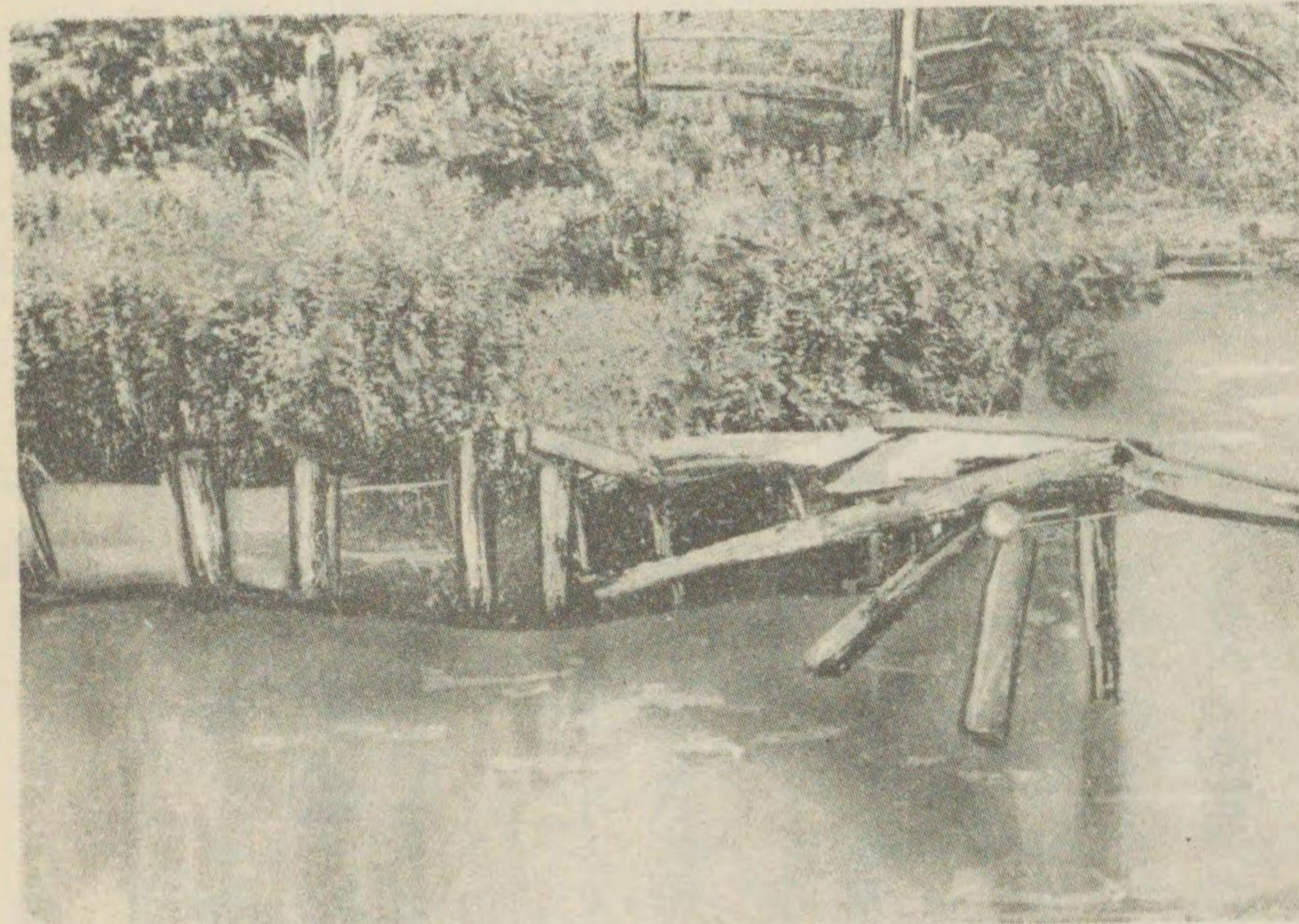
慶長五年、關ヶ原に敗れて、薩摩に走る、八年、家康、
島津家久の請を容れて、秀家の死を赦し、駿河國久能に
放ち、翌九年、更に、八丈島に流す、島に在ること、五
十餘年、明暦元年、八十三歳を以て歿す、尊光院殿秋月
久福大居士と諡す。

東里に、長松あり、秀家の名を取りて、久福松と名づく、
航海者、之れを目標とす、松下に、秀家の墓あり、明治
二年四月、秀家の子孫を赦して、武藏國北豊島郡板橋町
に、召し還さる、因りて、其骨を此處に、移し葬り、稱
して、八丈郷と名づく、同郡書記たりし浮田久三郎は實
に秀家十二代の裔なり。

浮田秀家、關ヶ原を遁れて、大阪に還れば、石田三成、小
西行長等は、既に、捕へられ、毛利輝元は、城を出で、
木津の別業に移る。

秀家、事の濟すべからざるを見て、慨然たり。

八丈島の東里
八丈島は伊豆七島の一にして最南に位す此れは其東里にし
て浮田秀家の謫居は此寫眞の上部に在りしなり



『我れ、十歳にして、父を喪ひ、故太閤殿下の爲めに、
養はれて、其女を賜ひ、其姓を賜はり、位は、三位に進
み、官は、
權中納言に
陞り、若輩
の身を擢ん
で、徳川、
前田、毛利、
上杉と與に、
大老に列せ
しめ給ふ、
恩遇の厚き、
物の比ぶべ
きなし、我
れを生むも
のは父、我
れを人とな
し給へるも

のは、殿下なり、我れ、争かて、殿下の洪恩に、酬い奉
らざるべき、毛利は、頼むに足らず、此上は、薩摩に下
りて、島津と與に、再擧を謀るべし』
密かに、大阪を脱し、人目の關を、忍びくへて、慶長六年
六月、薩摩の山川港に達す。

人を遣はして、島津義弘に報ずれば、義弘、其臣伊勢貞成、
相良長時に命じて、迎へて、牛根に置き、厚く秀家を款待
す。

秀家、名を久福と改めて、此地に、潛居すること、一年あ
まり、舊臣の傳へ聞きて、來り寓するもの數百人。

秀家、日々、親から一里ばかりなる居世神社に詣で、豊
臣家の恢復を祈る。

左れども、家久、既に家康と和して、戰意あらず、復た誰
れと與にか、再擧を計るべき、一念、豊臣家の前途に及ぶ
毎に、九腸、寸斷するの想あり、

『寧ろ死せんか、イヤ、空しく、死すべからず、命
惜からぬ命を存へて、時節を待つこと、又一年。』

家久の家臣桂忠詮、及び釋文之の二人、秀家の隠家に、訪ひ來りて、

『主人家久、山口直友を以て、御赦免を乞ひ候ひしに、兎も角も、伏見まで、上らせ給へとのことに候、弓矢八幡、家久、命に換へても、助け奉つり候はん、御氣遣ひあらせ給ふべからず』

と申せば、秀家、聞いて、深く感じ、

『島津殿の御芳志、何時の世にかは、忘れ候はん、左らば、出發候べし』

と答へ、家臣玉川伊豫、山田半助の二人を顧みつゝ、忠詮に向ひて、

『此者共は、物の用に立つものに候、我れには、用なきもの、留めて、當家に、召し使ひ給はるべし』

と述べ、ソコ／＼に、支度を整へ、忠詮、文士に護られて、伏見に向ふ。

日數を経て、慶長八年八月六日、伏見に着す、山口直友、乃ち本多正純と與に、入つて、家康に乞ふ。

家康、島津氏を憚かりて、特に、秀家の死を赦し、駿河國

久能に幽すること一年、其翌九年、更に、八丈島に流す。従ふもの、子秀高、秀繼、家繼、家臣浮田次兵衛、田口太郎右衛門、寺尾久七、村田助六、村田半三郎、中間彌助、市若、才若、並に秀繼の乳母愛女、其下女虎女の十人。

伊豆の下田港より發す、風、順にして、舟の飛ぶこと、矢の如し、帆走五日にして、島に達す、領主島左近、庵を東里に結びて、秀家を置く。

苦草ける家根は、雨を掩はんやうもなく、竹編める戸は、風を防がん由もあらず、秀家、黒木の柱を削りて、斯くなん、

もしほ燒きうるめ刈る身は浦風の

とふばかりにやわぶと答へん

昔は、三國の領主、今は、孤島の流人、兜着たる頭を、汐風に吹かれ、塵取れる手に、海藻を拾ふ、實に、榮枯盛衰こそ、常なけれ。

二

秀家の夫人を、備前殿と稱す、夫と與に、島に赴かんことを乞へども、許されず、泣く／＼、加賀に還りて、兄利長

の許に居る。

濤荒み、島遠くして、往來の船も最と稀れなり、

『夫や如何に、子や無事なる』

寢ても、覺めても、思ひ詫び、思ひ續けて、片時も、忘る暇あらず。

行雁、北に去るを見ては、夫の便なきを悲しみ、浮雲、南に飛ぶを望みては、我身の切なる想を寄す、風花烟月、孰れか、傷心の種ならざるべき。

島の領主島左近の、數年に一度、江戸に出づる毎に、其安否を聞きて、切めてもの、心遣りとなし、其都度、金銀衣服を數多、左近に託して、送り遣はしぬ。

島よりも、左近の上る度毎に、消息あれども、誰れの書きけん、夫の手跡にはあらず、

『など、親しう、御文をば、賜はらざる』

夫人、心には、怪しめども、間ひ見ん傳とてもあらねば、其儘、空しく、打ち過ぐ。

程經て、復た島より便ありしに、此度は、見覚えのある夫の手跡、嬉れしさ、懐かしさ、宛がら、其人に逢へる心地

しつゝ、急ぎ、封押し切れば、思ひも寄らぬ怨の文句、

『絶えて、御便なきこそ、中々に、怨みなれ、早や、我れを忘れ給ひけん、扱ても、情なき御心よ』

讀みも終らず、夫人、ワツとはかりに、泣き倒る、

『此方よりは、度々、文をも參らせ、物をも送り侍べるものを、如何なれば、斯くも、怨じ越し給ひけん』

身を悶え／＼て、悲しみけるが、不圖、心付きて、キツと、頭を擧ぐ、

『無念やな、扱は、左近に、押領せられけるか、道理こそ、夫の御文も、夫の御手跡にてはなかりしなれ』

思はず、南の天を見遣れば、悲憤の涙、膝を打つて、聲あり。

島に隨ひ行ける秀繼の乳母愛女に、一子あり、澤橋兵太夫と曰ふ、夫人、憐みて、我子の如くに、養ひ育つ、今は、早、二十ばかりとなりて、利長に仕ふ。

兵太夫、日夜、夫人の悲嘆に暮る、狀を見て、

『此上は、彼の島に渡りて、君の御安否を、伺ひ奉つり、二つには、母の容子をも見ん』

と思ひ、密かに、夫人に、告げ聞え、夜に紛れて、國を脱して、伊豆に赴く、

『武士の身にては、望みも叶ふまじ』
兵太夫、髪を削りて、名を常珍と改め、一雙の舟を求めて、島に渡らんとす。

左れども、警戒、おさく厳しく、公儀の許可なきものは、出船を許されず、兵太夫、時機を得ずして、空く此處に留ること一兩年。

計らずも、島の便をこそ、聞き得けれ。

三

頃は、元和の初めなりき。

福島正則の家臣、宰領となり、數多の米を、船に積み、福島より、江戸に赴く。

遠州灘に、差し掛かる頃、計らずも、暴風に逢うて、沖へくと、押し流さるゝこと數日、漸く、一つの島に着く、

『扱てく、危うきことなりき、兎も角、上陸して、疲れを休むべし』

但ある民家に入りて、休息す、風俗こそ、異なれ、正しく、

日本の領土、

『こゝは何處ぞ』

と問へば、伊豆の八丈島なりと答ふ。

『扱ては、浮田中納言殿の流され給へる島か、不思議なる土地に着けるものかな、餘所ながら、御容子を、窺ひ見ばや』

と思へる折りしも、主人、下男に向ひて、

『茶を進らせん程に、久福様御親子を、迎へ來れかし』

と命ずれば、下男、畏まりぬとて、馳せ出で、間もなく、還り來る。

引き續いて、入り來る二人の賓客、

『扱ても、御志の辱けなさよ』

言葉少なに、挨拶するは、年の頃、四十餘り、今一人は、二十四五にもやあらん、顔は糞れ、衣服は汚るれ、何處となく、氣品高きは、疑ひもなき中納言父子。

正則の家臣、思はず、飛びすさりて、ハツと、平伏すれば、怪しみて、

『これく、其方は、如何なる人ぞ』

浮田一門の墓

此れは八丈島に於ける浮田秀家一門の墓にして右なる樹木は久福松なり



と言葉を掛く、正則の家臣、恐るく、頭を上げ、

『某こそは、福島左衛門大夫の家來にて候、麗はしき尊顔を、拜し奉つりて、恐悦至極に存じ奉つる』

と申せば、其人、懐かしげに、ヂツと、打ち見遣りつゝ、

『何と申す、左衛門の家來とや、我れは、秀家ぞ、近う寄り候へ』

と言葉優しく、告ぐるさま、復た尊貴の人に似ず、正則の

家臣、憫はしき、謂ふばかりなし、

『御代安穩に渡らせ給ひなば、我等如きものは、御傍に近づくことも、叶ふまじきを、扱てく、御憫はしき御有様かな』

ハラくと、涙を垂れつゝ、掻き口説けば、秀家も、亦、顔を背向けて、言葉なし、稍々ありて、

『左衛門は、無事か、日本の有様は、如何に』

と問ふ、心に懸かるは、實に故國の事、正則の家臣、具さに、容子を告ぐれば、秀家、聞く物事、皆、感慨の種ならぬはなし。

正則の家臣、舟夫に命じて、米五十俵を、船より、運ばせ來り、秀家の、

『無用なり、それには及ばず』

と百方辭退するを、

『イヤく、左衛門大夫の分限にては、安きことに候、態と、參らせんは、憚りも候へ、好き折りなればこそ、進じ候なれ』

と言ひつゝ、強めて勸むれば、秀家、涙を流して喜ぶ。

正則の家臣、此島に留まること數日、頓て、天氣も、回復しければ、此處を出帆して、無事に伊豆に着く。

伊豆に在りし兵太夫、此事を聞くより、秀家の無事なるを知り、渡島の心、愈々躍りて、今は、矢も楯も、堪らず。

正則の家臣、江戸に上り、正則に謁して、告ぐるに、此事を以てす、正則、能くこそ、計らひつれとて、落涙、數行に及ぶ、既にして、此事、世間に傳はりて、幕府の嫌疑を受く、正則、已むを得ず、彼の家臣の首を斬つて、幕府に謝す、正則の罪を得たるもの、此事、實に其一ヶ條たり。

四

許可なくして、渡るを得ずば、先づ、許可をこそ、受くべけれ。

兵太夫、獨り、キツと、思案の臍を固めて、江戸に上る。

一日、執權職土井利勝の通行するを、目蒐けて、訴狀を上つれば、

『ソレ直訴ぞ』

従者、取つて押へんとするを、利勝、暫しと制し、仔細如何にと、取つて見れば、手跡美事に書き認むるは、

『愚僧事は、浮田秀家八丈島遠流の砌、其幼兒に、付き

添ひて、渡島したる乳母の一子に候なり、母は儀に仗りて、我れを捨て候ひぬ、我れ、孝を思へば、争で、母を忘れ候べきや、禽獸すら、親子相親しみ候、一たび、彼の島に渡りて、母子今生の對面を遂げさせ給はゞ、誠に、生々世々の御高恩にこそ候へ、あはれ、御慈悲を以て、出船の儀を、御免あらせ給ふべし』

との願意、字々皆涙、言々皆血、利勝、思はず、袖をもて、浮田秀家遺愛の松

八丈島の東里に在り名づけて久福松と曰ふ航海者此れを目標とす



顔を掩ふ、

『扱てく、神妙なる志ぞ、追つて、御沙汰あるべければ、控へ居れ、者共、駕籠遣れ』

復た敢て兵太夫の罪を咎めず。

兵太夫、最と頼母しく思ひ、江戸に留まりて、徐かに、沙汰を待つ。

一月過ぎ、二月立ち、半年、一年を経れども、何の消息だにあらず、

『あれ程、御懇の仰せありながら、何とて、御許あらざる、御咎あらば有れ、今一度、訴へ見ん』

兵太夫、重ねて、利勝の出づるを窺うて、又も訴ふれば、

『御坊の訴訟、今に忘る、ことあらず、此程に至るまで、再三、上意を伺ふと雖も、更に、御免の御沙汰あらねば、是非に及はず、志は、神妙なれども、此上は、思ひ止まらんこそ、然るべけれ』

利勝、言葉穩かに、言ひ諭す、兵太夫、感涙、袖に餘りて、包みがたし、

『斯くまで、身を捨て、願ひ奉つれど、御免の御沙汰

なき上は、是非も候はず』

其儘、愁然として、立ち去れば、利勝、亦、目を屢叩く。兵太夫、力なくく、加賀に立ち還りて、斯くと備前夫人に告ぐれば、夫人の落膽、言はん方なし。

時に、利長、既に歿して、其弟利常嗣ぐ。

利常、其忠孝の志に感じ、命じて、髪を蓄へしめ、又祿を給す。

兵太夫、曾て、密かに、人に向ひて、

『本國備前には、中納言殿の舊好を忘れざるもの、少なからず、我れ、寄りくりに、語らひて、同心せしめ、中納言殿を、島より、盗み出だして、一度、天下を覆へさんと思ひしに、其望みの遂げざりしこそ、返すくも遺憾なれ』

と語り、是れより、悵々として、樂しまず、終に、世を蚤む。

五

幕府の茶坊主高木善宗、罪ありて、八丈島に流され、後、赦されて還る。

一日、利常に謁して、

『中納言殿こそ、誠に、御憫はしう候へ、奥方より、贈らせ給へる金銀衣服は、皆、領主島左近、押領して、一品だに、差し上げ申さず候、或時、左近、中納言殿御父子を請じて、歎待し奉りしに、中納言殿には、御腕の御飯を、喰ひさして、鼻紙へ包ませ給ふ、左近、怪しみて、其譯を尋ね奉つれば、悴の乳母に、喰べさせたさにと仰せ候ひぬ、是れにて、如何に、萬事、御不自由に涉らせ給ふかを、御察しあらせ候へ』

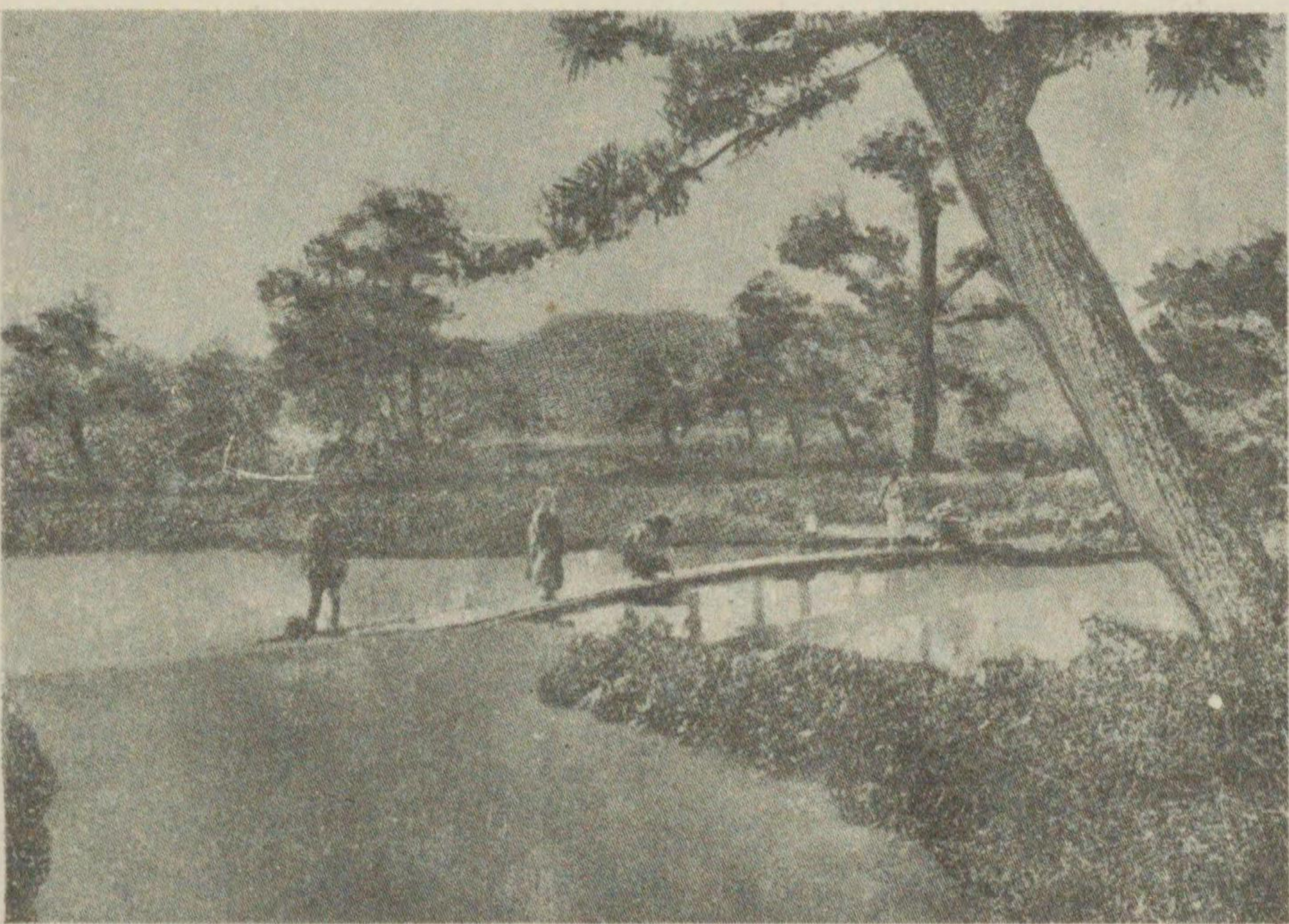
と鼻つまらせう、述べれば、利常も、亦、涙を吞みつ、
『扱てく、憎き左近の振舞ひかな』

と憤る、利常は、將軍秀忠の女婿なり、此由、密に、公儀に聞え上ぐれば、左近、忽ち、他國へ追放せられ、伊豆の代官谷庄兵衛、代りて、八丈島の支配を兼ね、隔年毎に、彼の地に到る。

利常、爾後、隔年に、金穀を送る、秀家、是れより、稍乏しからざるを得。

六

斯かる孤島に在りても、常に、心に掛かるは、豊臣家の行板橋の八丈郷
此れは東京市板橋の石神井川にして八丈郷は此下流の岸に在り



末、
『故太閤
在天の威
靈、願は
くは、幼
君を護ら
せ給へ、
御敵徳川
を滅ぼさ
せ給へ』
と日夜、禱
れる甲斐も
なく、元和
元年、大阪
の城、陥る
り、秀頼、

亦、自害せしと、程經て、聞いて、力を落す、

『ア、桐、落ちて、葵、花咲く世となれり、伯夷叔齊は、周の粟を茹はずとて、首陽に入つて、蕨を採る、我れ、徳川の流に、嗽がずして、斯かる孤島の海藻を採らんこそ、中々に、心安けれ』

遙かに、故國の天を望みて、慨然たり。

或時、利常より、例に依りて、金穀を送り來る、其率領の士、密かに、秀家に對して、

『君、八丈島より、還らせ給はん御心の在はさば、利常、公儀に乞うて、領國の内、十萬石を進ずべしと申されて候、御思召の程、包まず、聞えさせ給へ』

と語る、秀家、時に膳に對ふ、喰ひ懸けし椀を、下に置き、箸を其上に載せて、瞑目沈思すること頃刻、

『左らば、歸つて、足場を作らんか、イヤく、加賀、越中などにては手を出さんやうもあらじ、止みなんく』
胸に問ひ、胸に答へつ、頓て、徐かに、目を見開く、

『備前、美作の内、一郡欠けても、イヤにて候、但し、宰相殿利常の芳志は、辱けなう候と傳へ給はれ』

と答へて、復た箸を執る、

『古は、肩を並べて、豊臣に仕へたる我れなるを、争か
で、膝を屈して、徳川に仕ふべきや、功、成らば、歸り
もせめ、成らざるを知つて、歸らんは愚ぞ』

雄心、尙、存すと雖も、施さんに由もなく、寧ろ、一流民
として、身を終らんとす。

七

或時、備前兒島の商船、風波に漂はされて、八丈島に着く、
『備前と聞けば、懐かしきに、兒島と申せば、別けて、

我が先祖の出で給へる由縁の土地ぞ』

秀家、流石に、懷舊の心動き、召し見て、故國の事、何呉
れとなく、尋ね問ふ、先づ、

『今備前には、誰れかある』

と問へば、船人、

『新太郎少將殿光政在はし候』

と答ふ、秀家、聞いて、小首を傾けつ、

『ハテナ、新太郎少將とは、誰が事ならん、名は、何と
申すぞ』

と問へば、怪訝顔なる船人、
『其御名前が、新太郎少將と申し候なり』
と答ふ、質朴なる片田舎の船人、領主の姓も、名乗りも知
らず。

秀家、思はず、打ち笑みつゝ、

『シテ、家老は、何と申すぞ』

と問へば、船人、

『御家老には、池田殿と申すも候、伊木殿と申すも在は
し候』

と答ふ、家老の名、却つて、領主よりも、行き渡る。

秀家、ハタと、膝を拍つ、

『扱ては、池田の家なるか、定めし三左衛門尉||輝政||
の孫にてもあるべし』

孤島に在ること數十年、故國の事を、聞けども、頼みには、
知れがたし、秀家、又、

『我れ、城の北に、伊勢の宮を、設け置きしが、如何な
りしぞ』

と問へば、斯かる事は、船人も、能く知る。

『伊勢の宮は、今も、尙ほ候、其あたりは、御家中の御
屋敷、犇と、建ち並びて候』
と答ふ、秀家、聞いて、頷づく、

『扱ては、世は、泰平となりしと覺ゆるぞ、亂世ならん
には、國境の城々に、武士を分ち置く故、城下に居るも
のは、少なし、今の話にて、世の治まれる趣を知りたる
ぞ』

と語る、家康逝き、秀忠失せて、徳川の基礎、却つて、益々
固し、秀家、斯くと知りては、愈々浮世に、望みなし。
筆を把つて、短冊に書き記せしは、後鳥羽天皇の御製、

我れこそは新島守よ隠岐の島の

あらしなみ風心して吹け

イザとて、船人に與へて、遣り還す。

身を島守と思ひ諦めて、又送ること、幾春秋。

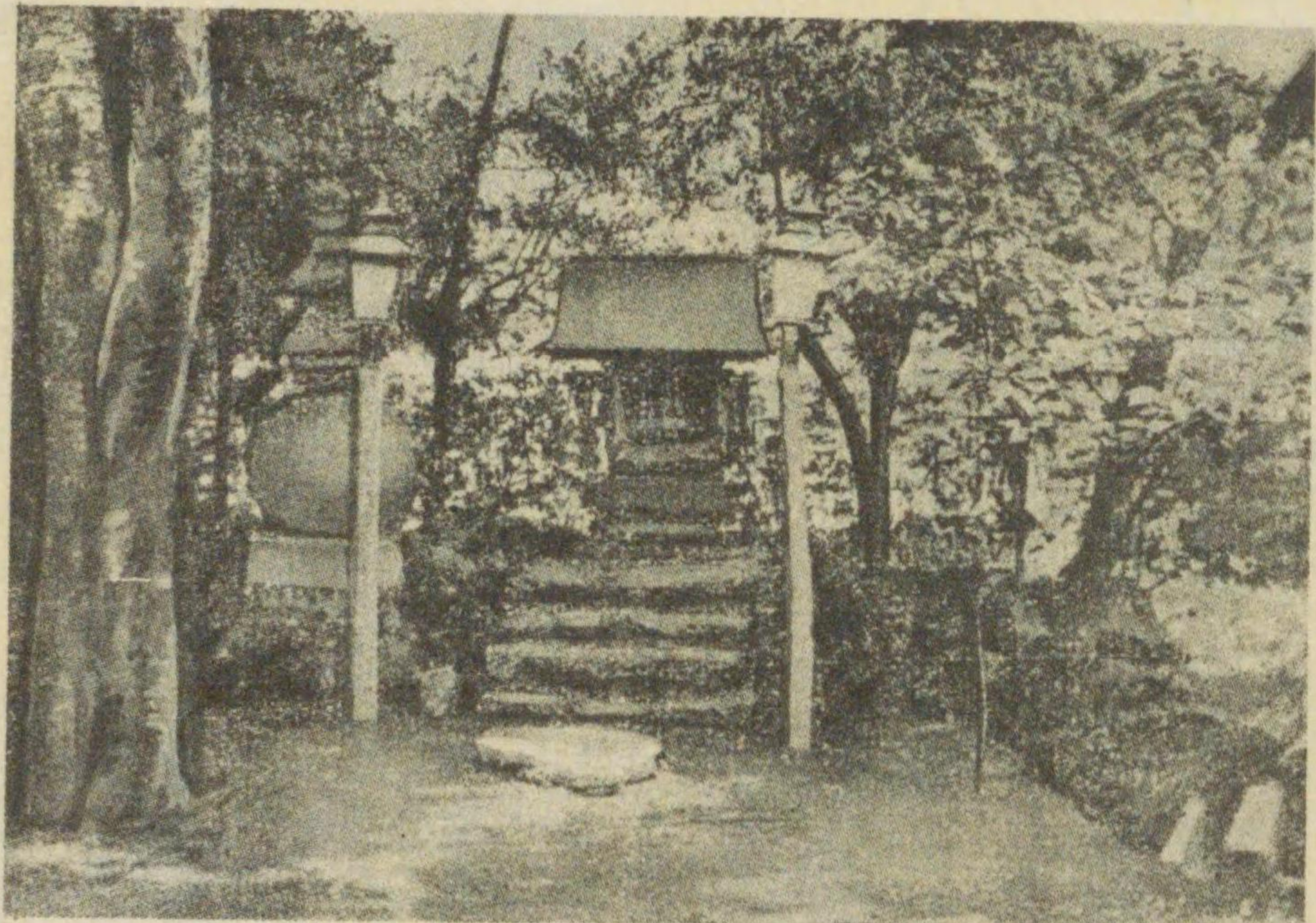
明暦元年十月二十日、終に、此地の露と消えぬ。

老松影縁なる處、英雄、長へに眠る、夜、靜かにして、風
露滴々、落ちて、聲あり。

八

秀家、死すれども、其祀、絶えず。

浮田秀家の墓
此れは東京市板橋八丈郷に於ける浮田秀家の墓なり



秀家の子秀
高、孫九郎
と稱す、秀
高の子秀正、
太郎助と稱
し、秀正の
子正家、太
郎之丞と稱
す、其子正
忠より、正
壽、正道、
正平、正生、
正教、正定
を経て、正
矩に至り、
皆、忠平と

稱す。

正矩の子經家、久三郎と稱す、之れを現今の戸主となす、
實に、秀家十二代の後裔たり。

秀家、八丈島に流されて後、二百六十餘年、其倒さんと欲
して、倒し得ざりし徳川幕府は、終に、當時の同志、島津、
毛利の子孫に倒されて、世は明治維新の代となる、秀家地
下の喜び、如何ばかりぞ。

明治二年四月、朝命、忽ち、時の浦賀奉行江川英武に下る、
『朝政御一新に付、浮田一類家族一同の者、御赦免仰付
けらる、江戸表着船の上は、屈出づべきもの也』

との赦狀、天恩、枯骨に及びて、罪ならぬ秀家の罪は、此
に赦さる、一門一族の喜悅、言ふばかりなし、

『左らば、故國に歸るべし、何よりも、先づ、移すべき
は、御先祖の墓ぞ』

家も、土地も、家財の多くも、皆、人に與へ、明治三年八
月、先祖秀家の遺骨を奉じて、江戸に向ふ、其向ふものは、
久三郎を始め、一門七十有五人。

江戸に着して、屈け出づれば、舊來の縁故をもて、前田幸

相慶寧に引渡され、宰相、之れを板橋の別業に置く、荒地を給すること五町、金を贈ること千圓。秀家の遺骨、此處に埋められぬ、由縁なき地も、由縁ある名は、附けられぬ、人々、何時とはなしに、八丈郷と唱へ合ふ。

罪は、赦さるれども、舊封は、復せられず。

金澤藩廳より、一片の命令は下る、

『身分の義は、平民と相心得べし』

一門、見て、皆、慨然として驚く、

『祖先高德の忠を南朝に盡くせしことは、言はずもあれ、秀家、豊太閤の知遇を受けて、三位黄門の榮斑に上る、朝廷に、功なしと雖も、敢て罪あるにあらず、今や、其罪なきに據りて、赦されて、天日の光を拜す、假令、諸侯に列せられざるも、切めて、士籍に置かれんこそ、至當の所置なるべけれ』

久三郎、幼と雖も、當主たり、祖先を辱しめんことを虞れて、慨然として起つ。

往いて、前田家に乞ふこと二回、更に、去つて、島津家に

乞ふ、兩家、乃ち代りて、朝廷に請ひ、此に始めて、士籍に列せらるゝを得。

士籍に列せらるゝと雖も、敢て、俸祿の伴ふにあらず。

不知の土地に來りて、不知の人々に接す、執るべきの業なく、頼るべきの人あらず、少許の地、少許の資は、永く、一門七十五人の口を、糊するに足らず、窮乏、月に加はりて、困苦、年に積もる。

困苦、年に積もる。

吳天、何の無情ぞ、祝融、何をか怒れる、八年の冬、火災、忽ち、起りて、邸宅は、皆、焦土、什寶財貨は、悉く、烏有に歸す。

窮苦、骨を刺して、自殺するあり、債鬼、門に迫りて、苦界に沈むあり、一門、漸く離散して、残れるもの、只、僅かに三家。

宗家久三郎、遠き豆南の海島を出で、復た荒き世上の風波に漂ふこと幾年、今や、北豊島郡書記として、身を簿冊の間に埋む。

板橋の里、石神井川の畔、古川、水絶えずして、名家の祀、僅かに存す、之れを發揚するは、抑も何れの日ぞ、時ぞ。

日本史蹟大系

第十一卷

昭和十一年五月十四日印刷
昭和十一年五月十八日發行

〔二圓八十錢〕

著者 熊田葦城

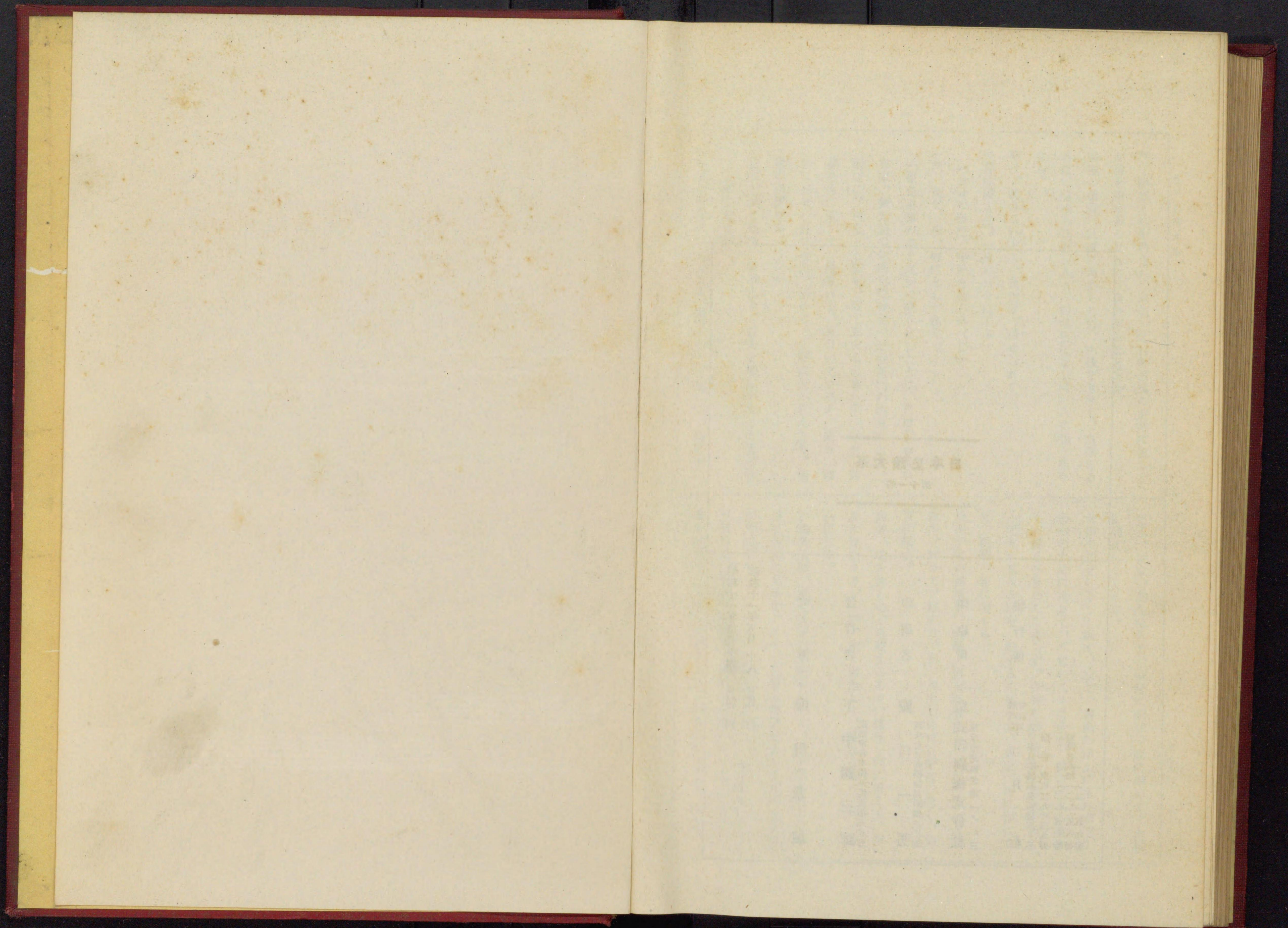
發行者 下中彌三郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷者 關口一男
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷所 單式印刷株式會社
東京市芝區芝浦一ノ二三

發行所 株式會社 凡社
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

振替 東京二九六三九番
電話日本橋 二二二五七番
二二二五八番
二二二五九番



670
25



